

邱海濤 作品

中国五千年 性の文化史



カバー図＝顧臣撰「韓熙載夜宴図」(部分)
©中国文物データセンター



カバーデザイン＝東京図鑑
カバー印刷＝錦明印刷株式会社



徳間文庫

き
19-1
¥629

中国五千年 性の文化史

邱海濤
納村公子訳

徳間文庫



9784198923471



1920122006294

ISBN4-19-892347-7

C0122 ¥629E (0)

定価： 本体 629円 + 税

悠久の歴史のなかで育まれてきた
驚くべき性の奥義^{けいぼう}。閨房の秘術、男
根改造術、性具、媚薬、同性愛、強精
法、観相術、動物占い、売春テクニ
ック……古代から現代まで、中国の
奇想天外でバラエティに富む性の文
化史を、豊富な実例と図で読み解く。



徳間文庫

ちゅうごくごせんねん せい ぶん か し
中国五千年 性の文化史

きう かい とう
邱 海 濤

一九五五年上海市生まれ。上海外国語大学卒業後、
上海訳文出版社勤務。一九八五年来日。慶應義塾
大学および東京外国語大学で学んだあと、中国経
済情報紙『中文導報』を発行する中文産業で同紙
の編集として勤務。現在、上海で作家および出版
プロデューサーとして幅広く活動中。著書に『国
際巨星高倉健解密（世界のビッグスター高倉健の
秘密）』（上海文匯出版社）、『誰は未来的明星（未
来のスターは誰）』（上海文匯出版社）がある。日
本語版『毛沢東の妻たち』を日本で刊行予定。
Eメールアドレス：omjp2001@yahoo.co.jp

なむらきみこ
納村公子 訳

一九五五年東京生まれ。武蔵野美術短期大学卒業。
翻訳家、日中学院講師。訳書に『纏足』（馮驩才著、
小学館文庫）、『乞食の子』（頼東進著、小学館）、
『蛋白質ガール』（王文華著、バジリコ）、編著に『中
国と出会おう』（国土社）、『もっと知ろうよ！中国』（
汐文社）などがある。

徳問文庫

中国五千年 性の文化史

邱海濤
納村公子 訳



徳問書店

徳間文庫

中国五千年 性の文化史

邱海濤
納村公子 訳



徳間書店

まえがき

田中 優子

性の嗜好は個人的なものなのか、それとも社会的・文化的なものなのか。私はこの書を読んで、はたと考えこんでしまった。

性は極めて個人的なものだと思っていたが、どうやら違う。民族や国やその文化によって、性の嗜好はどのようにでもなるのかも知れない。だとするといいたい、その嗜好はどのように作られるのだろうか。相手によって？ 書物によって？ 伝聞によって？ 性の話題は果てしない問いを生む、という意味で奥深い。何千人の人が何千冊の本を書いたところで、すべての疑問が解けるわけでもない。しかしこの『中国五千年 性の文化史』は五千年ぶんの性の資料の探索である。考えるだけで眼がくらむ。この書では、中国文化の中でどれほど豊かな性の追求がなされてきたか、にまず驚く。それと同時に、「ずいぶん違うものだ」という感想を持つ。性は普遍的なものなのに、日本と中国は性の嗜好の歴史が異なり、中国と欧米も性の嗜好の歴史が異なるのだ。

たとえば私はこの書を読みながら、日本で最も性の文化が花開いた江戸時代と比較していたのだが、容易にひとつの結論に達した。日本では性を眼で見ることを好み、中国では

性を文章で読む（あるいは聞く）ことを好んだのだ、と。江戸時代の性に関連する文化でもっとも量が多いのは春画である。もちろん春本も存在するが、春画が主で、文章が従である。四十八手のような性の技術にしても、日本では図で描かれ、中国では文章で描かれる。本書『性の文化史』でも、女性の臀部が「明月」「玉樹」と表現されていることや、体位が動物の比喻で三十通りも表現されることなど、漢字を使った言葉による性表現の豊かさは、到底他の文化圏の及ぶところではない。現代日本のポルノ映画や小説が漢字を多用するように、漢字はそのもので身体や性交の図を思い浮かばせ、性欲を生じさせる力を持っている。絵図よりも文章による性表現が発達するのは、単に文章の意味の力というだけでなく、漢字の持つ図像的な力ゆえなのだ。

またもうひとつ日本との違いがある。それは日本の性の文化は「笑い」と組み合わせることが多いのだが、中国の性の文化は職人による技術の追求と作品制作のような趣がある、ということだ。たとえば日本の洒落本しやれというジャンルは中国の影響を受けた遊郭文学なのだが、たちまちお笑いの文学になった。かなり詳しく色の道を書いている西鶴の『好色一代男』も、詳細に色の道を書くより笑いや人間の面白さを引き出すほうに力をそそいだ。それに対して中国の書物たとえば『遊仙窟』ゆうせんくつには、酒、料理、詩、碁、音楽等々、遊郭にあるものすべてが列挙され、それはもう詳しい。しかしなんとと言っても山場は寝台の

上で抱き合う場面である。文の粋を尽くしてその快樂を表現する。それは本書に挙げられている様々な描写でも同様である。日本の春画春本にそこまでのものではなく、せいぜい、春画に互いのせりふが入れられたり、遠回しに激しさが表現されるだけである。

私は『性の文化史』で、徹底して追求されているのは文章表現だけではないことを知った。性の道具と性の方法の多様さ、その点において中国の上をいく文化圏はないであろう。たとえば「第二の性器」と本書でも表現されている纏足^{てんそく}は、他の文化圏では思いもつかなかった性のための道具である。しかも金蓮（纏足）に対する美意識は明確で、その美の規準が繰り返し書かれ、それを眼で、耳で、香りで、手で、足で、胸で愛撫^{あいぶ}する方法、扱う方法などがこれほど詳しく書かれてきたことを初めて知った。だからといって誰もこれを復活させようとは思わない。なぜなら、今や纏足を美しい、かわいらしいと思う人間は皆無で、誰もがおぞましいとしか思わないからだ。それを考えると、性の嗜好は民族文化によつて異なるだけでなく、時代によつても甚だしく変化するものだとわかる。現代人の性の嗜好も、未来世界ではなんの感興も湧^わかないようなものかも知れない。

その意味で、本書のような「文化史」が各文化圏で書かれることになったら、学問としてかなりきちんとした性の比較文化学が成立するだろう。これは存外重要なものだ。なぜならそれは、今の私たちの性の嗜好や観念を相対化し突き放すことにもなり、人間という

ものの深みと複雑さが浮かび上がってくる領域だからである。しかも急がなくてはならない。欧米のポルノグラフィが世界を席卷せうけんするようになってから、性の嗜好は急速に一色に塗りつぶされている。性がこれほど相対的で多様ならば、それが一色になることは甚だ危険だ。性は本書にもあるように、容易に政治の道具になり得る。容易に弾圧の理由にも、差別の理由にもなり得る。性の個人的な側面（限らない多様さ）を守るためにも、性が文化圏や時代によってどれほど違うものなのかを、私たちは知っておく必要があるだろう。私はたとえば纏足を忌み嫌うよりも、よく知ることのほうが大事だと思っている。纏足は、人間はどんなものにも性的な想像力を働かせるものだ、ということを教えてください、それがどれほど変化しやすいかも教えてください。その結果私たちは、自分たちのなじみの嗜好が絶対のものだとは思えなくなり、他の嗜好を見下すこともできなくなるのだ。比較文化はそのためにある。

『中国五千年 性の文化史』に書かれた中国史上の性の嗜好には、世界のあらゆるものが揃そろっている。このような側面でも、「中国は世界なんだな」と思い知らされる。男色は日本でも普通のこととして行われたが、中国でも盛んであったことがわかる。遊郭の性はどうやら、日本よりはるかに磨かれていたようだ。日本に比べ、中国の文章はどうしても格調が高く、川柳や戯作などから見えるような庶民の下劣な世界が見えにくいと思っていた

が、本書では動物を使うところでそれをうかがうことができた。

中国の性の文化は女性が虐げられ、儒教の貞操観念が女性にのみ強く求められていたように思われる。しかし女性の性欲や女性から仕掛ける恋が描かれていないかというところでもない。『金瓶梅』や『肉蒲団』に登場する女性たちはもちろんのこと、本書に書かれた山陰公主、徐妃、則天武后、林彪夫人・葉群に関する噂など、枚挙にいとまがない。女たちはどの国でも単に受け身というわけではなく、性に関してもっと積極的に生きていた。日本でも江戸時代までは、恋（この言葉は必ず性関係あるいは性欲をとまなっている）をしかけるのは女性ときまっていた。なぜなら男子たるもの、恋に心惑わされるべきでないからである。拙著『張形——江戸をんなの性』（河出書房新社で刊行後、『張形と江戸をんな』のタイトルで洋泉社新書として刊行）を編んだ時には、江戸時代の女性たちが張形を使う浮世絵が膨大に存在することに驚きあきれた。これは「男からの都合のいい視点」と決めつけることはできない。欧米のポルノグラフィが女性の裸体を単独で描くことが多いのに対して、インド、中国、日本などアジアのそれは常に男女の組み合わせで描かれた。それは男女で見る可能性を示唆する。日本の春画に至っては、女性の嫁入り道具のひとつと言われ、女性が持つことも珍しくはなかった。張形を売る店や行商もあった。

女性が性の主導権を握っている様子は東南アジアにも見える。『大航海時代の東南アジ

ア』（共訳・法政大学出版社）を訳した時に、フィリピンやインドネシアではかつて、女性の快楽に奉仕するために男性たちがペニスに棒や拍車や釘などをピアスしていたこと、また小さなボールをペニスにいくつも埋め込むやり方が、島嶼ばかりでなく大陸東南アジアにも広く行われた方法だったことを知った。目的はもっぱら女性が快楽を得られるからであり、著者はその背景に「女性の持っていた大きな権力と自立性」があると推測している。女性の側からの性の嗜好、美意識がもつと論じられてもいいように思う。『中国五千年 性の文化史』はその方向から見ても、多くの情報を提供してくれている。

「中国の性はつまるところ養生である」という見解を幾たび聞いたかわからない。確かに本書の中でも養生の側面を書いている。しかし私はこの本で、やはり中国でも性は健康法である前に、全人間的な営みとして考えられていたことがわかった。それと同時に、つい最近まで続いていた政治による性の管理について、初めて知ることが多かった。著者は単に好奇心で性の歴史を書いているのではない。私はこの本を読んでいるうちに、性が権力によって利用され玩ばれることのない社会、個人や民族の特質や嗜好が差別されない社会を、どのように実現できるだろうか、といったの間にか考えていた。この本の真の狙いはそこにある。

目次

まえがき……3

第1回 子づくりの思想……………14

無子の罪 キリギリスの羽、シンシンと

人民解放軍総司令・彭徳懷失脚の真相 子づくりに死す

第2回 保精思想……………28

漏らさず惜しむ 止めてもどす すっかり飲む

第3回 巨陽への憧憬……………38

微陽を変じて巨陽たらしむ 微陽を変じて長物たらしむ

第4回 女の達人たち……………47

未央生、愛の遍歴 顧仙娘の高等技

第5回 下着の話……………58

解帯卸衣の下 うす紅色、桃色、深紅

第6回	人をもつて人をおぎなう	68
-----	-------------	----

陰をもつて陽をおぎなう 陽をもつて陰をおぎなう

第7回	尼僧の淫乱な犯罪	79
-----	----------	----

華やかなる不倫・不貞 桃色尼僧の犯罪
女流詩人、情熱に死す 「明月」をめぐる

第8回	動物にたとえる	94
-----	---------	----

中国的動物占い 体位をたとえる

第9回	秘具・小道具	101
-----	--------	-----

女性用 男性用
最強の道具、ミャンマーの鈴 煬帝の御女車

第10回	小さな足と粽	118
------	--------	-----

伝統のフェティシズム・足 足の遊び、足の楽しみ

第11回	宦官の話	132
------	------	-----

栄耀栄華への裏道 宦官の偉業と悪行

第12回 奉仕する美しい男たち 143

強い女たちと面首 女帝の淫乱

第13回 ホモセクシユアル 幸せな同性愛者 155

傾国傾城の美少年 許季芳と尤瑞郎の恋物語

第14回 後宮の女たち 168

快楽を提供する佳麗三〇〇〇人 中年女、万貴妃の非情
産んでは殺す 后妃たちの男狩り

第15回 獸性狂・海陵王の話 181

ワンヤン・リヤンの蛮行 少女狩り特別法

第16回 強くなる薬、媚薬 186

起陽の丹薬 成功例と失敗例 美女名の処方箋

第17回 思う人を振り向かせる方法、媚術 198

愛する男を振り向かせる 愛する女を振り向かせる

第18回 肉体で観る観相術……………210

顔を見よ 下を見よ

第19回 陽気な中国セクハラ語……………218

性愛的漢字文化 国をあげてのしる 性の王者・イヌ

第20回 張競生先生の「性交救国論」……………231

北京大学教授のセックス理論 高潮に噴出する第三の水

第21回 芸を売り身を売る、民国時代の花柳界……………241

文化サロンの華・妓女 魔都・上海の花街事情

裏町の娼婦稼業 高級妓院の遊び方

第22回 貞操の話……………258

林彪夫人・葉群の不倫スキャンダル 中国の処女検査法

処女信仰の犠牲者たち

第23回 品のない話……………265

社会主義的猥談 猥談罵倒戦争 情歌・好色民謡

第24回 革命軍人 279

軍人婚姻破壊罪 ある離婚 心中

第25回 赤き中国にあらわれた妓女の姿 291

繁栄の中国性産業 広東買春客取り合戦
売春テクニクの文化的な差

著者あとがき 305 文庫版あとがき 312

中国性文化略年表 320 主な参考文献 325

図版・写真提供 327

第1回 子づくりの思想

無子の罪

後継ぎを絶つてはならない。

これは儒教の思想である。儒教は道教とならぶ代表的宗教で、数千年にわたって中国人の精神を形成し、性の意識にも大きく影響した。『孟子』*もうし「離婁上」りろうじやうにはこうある。

不孝有三、無後為大

不孝には三つある。祖先を祭らないこと、親に孝養を尽くさないこと、子（男子）をなさないことである。儒教ではこの三つのうち最後の「子をなさない」、つまり後継ぎの男子がないことがいちばんの不孝であるという。なぜかというと、要は「子孫繁栄」が社会

倫理の第一義であるからだ。子供をたくさんつくるためには妻の数はいくら増やしてもかまわないとまで、儒教は説いている。儒教は繁殖のための教えだと考えることができる。

古代中国で、祖先を祭る資格のある者は男子にかぎられた。このとき女子は男子を産むための従属物でしかない。中国の男尊女卑の風習はたいへん古く、春秋戦国時代（前七七〇～前二二一年）の儒教の古典『礼記』^{らいぎ}にはこのような記述がある。

男女有別、然後父子親

男女授受不親

前の句はこういう意味である。どんなことでも男女の関係はかならずはっきり区別しなければならない。つまり男性の地位は永遠に女性より高く、女性の地位は永遠に男性より低くあるべきだということである。この関係をはっきりしたうえで、初めて父と子女との関係をはっきり



仕女図（清、改琦画）

させることができるという。

二番目の句は、男には男の決まりがあり、女には女の決まりがあるので、男女はみだりに行き来してはならないということだ。

どちらも男尊女卑の考え方を反映している。後漢時代（二五〇～二二〇年）の女性向けの教育書『女誡』^{じょかい}には、女子は生まれて三日目から床下に寝かせ、女たるもの一生男より地位が低いことを認識させよとある。

唐代には『女論語』^{おんなろんご}という儒教の書物があり、女性がいかに夫に仕えるべきかが、具体的に解説されている。そこには女性が嫁に行ったときの心構えとして「將夫比天、其義匪輕」（夫はすべてであり天にも比すべきものである。その意義は非常に重大である）とあり、家にあつては夫を賓客^{ひんきやく}のように大事にし、夫が話をしたら耳を傾け、夫が悪いことをしたらじつくりさとし、夫が出かけたら食事の支度をして待ち、病氣になったら終日心をくだいて看病し……などと細かく指導している。

唐の時代、夫が妻をなじつても罪にはならなかったが、妻が夫をなじると三年の刑に処せられた。また夫が妻を殴打しても罪に問われなかったが、妻が夫を殴打すると一年の刑、夫が妻を殺しても三年の刑にしかならないが、妻が夫を謀殺すると死刑に処せられた。

昔の中国では、妻を一方的に離縁できる理由として、浮氣、舅^{しゅうとしゅうとめ}、姑に仕えない、おし

やべり、盗み、嫉妬しと、悪い病氣を持つことなどがあげられていたが、その第一に「無子」むし（後継ぎの男子ができない）が来ている。

＊『孟子』——儒教の祖・孔子の思想を受け継ぐ戦国時代の思想家、孟子の言をまとめた書。全4編。宋代、朱子学しうがくにおいて基本的な教学テキストとされた。

ギリギリスの羽、シンシンと

『詩経』しきやうは、いまから二〇〇〇年あまり前にできた中国最古の詩集である。日本でいえば万葉集にあたる古典である。そこには子孫繁栄と万世永続を歌った宮廷詩がたくさんある。「螽斯」しゅうしという詩が有名だ。最初の部分を紹介しよう。

螽斯羽　しゅうしの羽

詵詵兮　シンシンと

宜爾子孫　子孫によろしき

振振兮　シンシンと

……

蠡斯とはギリギリスのことである。ギリギリスの群のように子供がたくさんできるようなという思いが詩にこめられている。しかし、古代、社会の最下層にあえぐ圧倒的多数の庶民にとって、ギリギリスの群のような子たくさんは、ほとんど夢物語にひとしかった。どんなに子孫繁栄を願っても、天候によって生活が左右される時代のこと、ひとたび天災が起きれば、子供や老人など、弱い者から死んでいった。食糧事情がよくなり、天下太平が続くと人口は自然に増加していくが、王朝交替期にさしかかると戦乱となり、そのたびに弱き庶民はふたたび犠牲となつていったのである。

ある試算によると、紀元前二二一年、秦の始皇帝が中国を統一したとき、総人口は約二〇〇〇万人だったといわれる。その後を継いだ前漢（前二〇二年～後八年）で一〇〇年近く太平が続き、経済も発展し、人口は五〇〇〇万人まで増加した。後漢の世が終わって三国時代に入ろうとするころは戦が絶えず、天下は乱れ、人民は疲弊し、人口は激減した。二二〇年ごろ、人口はなんと二五分の一の二〇〇万人にまで減ってしまった。一〇〇人に四人しか生き残れなかったのである。

庶民はいつの世も「多子多福」を願っていた。子が多ければ多いほど幸福になると信じていたのだ。「福」の字は分解すると「ネ」「一」「口」「田」に分けられる。「ネ」（しめす

へん)は「神に祈る」という意味。貧しい民百姓は、福の字を指でなぞりながら、「祈求一口田」(一枚の田をあたえたまえ)と読み上げた。一人の子供が荒れ地を開墾して、田を一枚増やすというのである。子供が多ければ多いほど、田も増えていき、どんどん豊かになる。それが古代の人の幸せだった。

現在も農村では福を呼ぶ対句を門に貼る習慣があるが、こんな句などはとてもよく知られている。

門前車馬非為貴、家有児孫不算窮(門前に車馬が集まっても豊かとはいえない。家に孫子があつて初めて貧乏でないといえる)

当然のことながら、昔、子孫を着実に増やすことができたのは、財産と美女を独占した支配者階層にかぎられた。たとえば史書『漢書』(かんじょ)にはおどろくべきデータが載っ



多子多福の図(山東省の木版画)

ている。漢王朝を打ち立てた劉邦と、その二人の兄の子孫は、前漢二〇〇年のあいだに増え続け、なんと一〇万人あまりにもなったという。ねずみ算式とは言わないかもしれないが、子供の生き残る条件が庶民より恵まれているわけだから、一世代ごとに増えていく道理だ。これを年平均でならしてみると、年に五〇〇人増ということになる。

人民解放軍総司令・彭德懷失脚の真相

一九九九年、中国は建国五〇周年を迎え、一〇月一日の国慶節には大々的なパレードが行われ、軍事的なデモンストレーションも見られた。中国の人民解放軍の歴史は中華人民共和国より長く、一九二七年八月一日の江西省南昌で旗揚げされた南昌義起を建軍の記念日とし、建軍七十七周年を迎えた二〇〇四年には、返還後の香港で初めて閱兵式が行われた。

南昌義起当時は、周恩来、朱德、賀龍らが指揮をとったが、のちに労働紅軍となり、日中戦争時には国民革命軍第八路軍（通称・八路軍）、新編第四軍（通称・新四軍）となり、一九四七年に人民解放軍に改称した。建国の翌年、勃発した朝鮮戦争に参戦し、兵士たちは新生中国のみずみずしい精神力を発揮して、世界に人民解放軍の名を知らしめた。そのとき総司令官をつとめたのが彭德懷である。

彼は中国建国以来、中国共産党の最高顧問として、唯一、毛沢東もうたつとうに意見を述べることでできた人物であった。勇敢にして正々堂々たるその精神性は人々に尊敬された。彼を超える人物は、いまだ出現していない。

しかし、彼の後半生は悲惨であった。一九五九年七月に江西省廬山ろざんで開かれた中国共産党中央政治局拡大会議（通称・廬山会議）で、最高指導者の毛沢東によって罷免され、失脚したのである。彭が毛の人民公社政策（農村部における政策で、行政と生産を結合した集団化農業合作社）に反対したからであった。人民公社は毛沢東が建国以後、最初に打ち出した全国的な共産主義運動であった。

彭徳懷は罷免されたばかりでなく反革命集団の頭目という罪状までつけられ、全国的な非難の的にされてしまった。いかに国防大臣といえども彭の批判は受け入れがたく、毛沢東は激しく反発し、「怨み骨髓うづに徹す」ほどの感情を抱いたようだった。毛はなぜそこまで彭を憎んだのだろうか。かりにも彭徳懷は朝鮮戦争の英雄、国家の功労者である。

彼に対する批判大会が開催されていたとき、毛沢東が突然、意味不明の言葉をつぶやいた。

「……始作俑者、其無後乎。私は後継ぎを失うという罰を受けねばならなかったのか」毛沢東の言った最初の漢文は解釈が非常にむずかしい詩文だが、わかりやすく言えば、

「いままでにないほどの悪いことを考え出した者は、息子を失い後継ぎが絶えるだろう」という意味だ。

毛沢東がなぜこんなことを言ったのか。一九五〇年、朝鮮戦争が勃発、中国は彭德懷を総司令官とする義勇軍を北朝鮮に送り込んだ。そのとき毛沢東の長男、毛岸英もうがんえいが父の命令に従って前線に赴いたのだが、不幸にもアメリカ軍の爆撃にあい、帰らぬ人となった。毛沢東の無念、いかばかりか。新中国建国後、毛沢東は人民公社こそ共産主義の正道だと考え、導入を急いだ。息子の命を守れなかった彭德懷が目の前に立ちあがったとき、いままでの恨みと怒りが一気に噴出した。毛沢東は静かに詩をつぶやきながら彭德懷を政治の地獄におとし入れてやろうと決意したのである。数年後、彭德懷は政治的迫害のために死去した。

***朝鮮戦争**——一九五〇～一九五三年。朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国とに分断された半島における戦争。50年6月に始まる国境紛争から発展し、北朝鮮軍がソウルを落とすと、米軍を主力とする国連軍が参戦、平壤を陥落。中国は抗美援朝（米）援朝を掲げて義勇軍を派遣、参戦する。南北攻防の末、53年7月に板門店で休戦協定が結ばれる。新生中国にとって初の国民戦争であった。

子づくりに死す

『十二笑』

ポルノ

『十二笑』という艶情小説集がある。清代初期のもので、作者不詳。市井のめずらしい噂

話などが一二篇収められており、あまりにおかしく奇妙なので人気があったようだが、清末に発禁になってしまった。そのなかの一篇「痴愚女遇痴愚漢」（愚かな女が愚かな男と出会う）という小説は、子づくりのために一命を捧げてしまった小役人の話だ。

ときは明代弘治年間（一四八八―一五〇五年）、河南に花中垣という小役人がいた。妻は郝家から娶った女性で、年は四〇をすぎたというのに後継ぎができず、だんだんあせりといらだちをつのらせてきた。子供ができないことで夫婦は喧嘩が絶えず、ついに妻は家を飛び出し尼僧になってしまった。

独り者になった花中垣はやがて昇進し福建に赴任となった。荷物をまとめ、旅装を整え、二、三人の家僕を連れ、さらに秘書として裴肖星なる人物を招聘し、いっしょに旅立った。福建へ行く途中揚州に着いたときのこと、季節は晩春だった。裴肖星が花中垣にこう言った。

「先生、奥でお世話をする方がおられないのではご不自由でしょう。ここで夫人を娶っていかれたらいかがですか。そうすれば奥向きも切り盛りしてもらえ、後継ぎもできるでしょう」

この提案に花中垣はよろこんだ。すると裴肖星は一六歳の崔命児さいめいじという妓女きじよを連れてきた。見れば花のように美しい少女である。その美しさに花中垣は電気ショックでも受けたように呆然ぼうぜんとなり、少女を見つめたきり口もきけず、全身硬直して涎よだれをたらすありさま。

その夜の花中垣はまるで肉にありついたハゲタカのように。崔命児の体にむしゃぶりついてころゆくまで欲望を満たした。崔命児はさすがに妓院きいん出だけに、かたくななところがなく、求めに応じて蝶ちやうのように蜂はちのように乱舞し、花中垣をとりこにした。

「なんと、かわいいやつ！ もうたまらないよ。昔の女房などまるで腐った飯だ。毎日いいやいや食っていたのだ。このような山海の珍味を口にする幸せがあつたとは！ ああ、おまえをすっかり食べてしまえないのが残念だ」

若い妻を得た花中垣は有頂天だった。

一行はやがて杭州こうしゅうに着いた。花中垣は崔命児を連れて仏寺もうに詣でた。門前の路上では泥人形がたくさん売られていた。どれも子供の人形で、大きさは一尺（約三〇センチメー



秘戯人形―男上女下（清、陶製）

トル)ほど、白い肌に赤い唇、まるで生きているように愛らしい赤ん坊の姿をしていた。崔命児は一目で気に入る、買い求めてうれしそうに抱きしめた。花中垣が言った。

「おまえ、これは泥でつくった人形だよ。どこがいいんだね。こんなものをだっこしていいで、はやく生きているやつを産んでくれよ。本物の赤ん坊こそ宝じゃないか」

崔命児は笑って答えた。

「あなたのお年では、子供をつくるのはむずかしいかもしれません。しばらく人形で慰みにしましょうよ。これを実の子同然に可愛いがっていれば、本物が産まれるかもしれませんわ」

花中垣はなるほどと思い、泥人形に引哥インゴという名をつけ、乳母まで雇った。さらに八卦見はちけみの占い師に引哥の姓名判断を頼み、福運をもたらす生年月日を割り出して誕生日を決め、誕生日祝いもすることにした。

花中垣は引哥に帽子と服を買い、食事のときはいちばんおいしいおかずを引哥の前へ置いてやった。暑きにつけ寒きにつけ、そら風邪だ熱が出たと心配し、占いを立てたり医者と呼んだりした。小間使いにさせたオシッコを引哥の



秘戯人形—女上男下(清 陶製)

ものだと言ひ、朝には絹の布で人形の顔をふいて世話をした。これが泥の人形でなかったら……。夫婦の子供への思いはこれほど厚かつたのである。

ところがある日、乳母が敷居につまづいてころび、抱いていた引哥を落とし、こなごなに割つてしまった。花中垣と崔命児は驚天動地のおどろきよう。声をはりあげて泣き崩れた。崔命児は泣きながら花中垣に言つた。

「私が引哥を連れて帰るといつたとき、あなたはこう言つたわ。これは泥でつくつた人形だからかわいらしくないってね。引哥がこうして死んでしまったからには、私もあなたも無縁仏になるしかないわ。いやよ、そんなの。はやく子供をちょうだいよ。子供をつくつてくれなきゃ死んじゃうわ」

花中垣は慰めて言つた。

「わかつた。一年以内につくつてあげよう」

彼はこう約束すると、精力増強、強精強壯の処方を実行してみた。五〇近いその年で、衰えつつある精力を回復させるには、熱性の生薬を用いて燃え立たせなくてはいけない。子供が欲しい一心で死にものぐるいでがんばつた。崔命児も子供が欲しいばかりでなく、情欲の炎消しがたく、毎日のようにセックスを迫つたものだ。しかし一カ月もたたないうち、花中垣は足腰が立たなくなり、歩みもおぼつかなく背をまるめ、モノのほうもほ

とんど死にかけたウナギのようになってしまった。

そのうえ、崔命児は祈禱師きとうしの話聞き違え、過激な回春剤を買ってきて花中垣にむりやり飲ませてしまったのである。薬のおかげで彼のモノは鉄のように堅く直立した。崔命児はそれを見て淫心いんしんあふれさせ、花中垣の体の上にまたがると、欲情に任せてはげしく腰を動かした。だが、花中垣は長いあいだ不能よみになっていたので、このような劇薬に耐えられず、精液を出しつくし、下血してついに黄泉の人になってしまった。

小さな命を求めて、大きな命を絶つ。

とでもいうべきか。

第2回 保精思想

漏らさず惜しむ

中国人の男とアメリカ人の男が自分の精力がいかにすばらしいかをたがいに自慢しあつた。体格の大きいアメリカ人は自分より小さい中国人を見下ろして言った。

「昨夜は女とやりましてね。一晚中寝かせなかつた。どうです？ 一晚で五発！ 女のよろこんだのなんのって、今朝はもうくたくたになつてベッドに寝ていましたつけ。まあ、あなたにはとうていできない芸当でしような」

白人の口調からは東洋人の能力を軽視している語気が感じられた。

しかし中国人は平然とこうやりかえした。

「おやおや、五発もやつてしまつたんですか！」

と、いきなり噴き出し、今度は満面笑みでこう反撃した。

「私もときどき、楽しみで女を呼ぶんですよ。このあいだは五人。一晚かけて代わる代わる同床し、明け方にやっと最後の女で果てました。そんなにかんたんに発射してしまつては男じゃありませんよ。これは『閉精不泄』（精を閉めて漏らさない）の高等技なんです。ま、あなたにはできない芸当でしょうな」

アメリカ人は何度も射精できることが誇りであり、中国人は決して射精せずに長持ちさせることが自慢なのである。こういった考え方は、じつは古来数千年の歴史のなかで蓄積された中国の性学にもとづいており、保精思想と呼ばれている。

古代中国では、男性の精液を非常に重要視していた。古代人はもちろん、精液のなかに精子というものがあることは知らなかったが、何かそこに偉大な気のエネルギー源を見だし、それを精気と呼んで、できるだけ体内にとどめておこうと思ったのだ。

古代人は精液をどのように考えていたのだろうか。

一九七二年、湖南省長沙で漢代の墓、馬王堆が発掘された。発掘は足かけ三年をかけ七四年まで行われ、当時の長沙国の丞相、軼侯利蒼という人物と、その妻子の墓であることがわかった。最初に発掘された第一号墓からは軼侯夫人の生けるがごとき遺体が発見され、世界をあつと言わせた。遺体の保存状態はすばらしく良好で、肌には弾力があり、とても二〇〇〇年の時をへだてているとは思えなかった。

馬王堆漢墓が世界の注目をあびたのは、夫人の遺体ばかりではない。第一号墓から第三号墓まである墓のうち、第三号墓から漆器、陶器、織物、人形などの副葬品が四〇〇点あまり出土したほか、絹地に文字の書かれた帛書はくしょや竹簡ちくかん、木簡もっかんなどの文字資料が大量に発掘され、文献として新発見のものも続出した。

このなかには医学や養生ようじよう（健康維持）に関する文献が含まれていた。中国の古代医学に関する資料としては、現在のところ馬王堆出土のものが最古である。それらを見ると保精思想はすでに存在していた。資料の一部『十問』じゅうもん（皇帝が各専門家に尋ねるQ&Aの養生書）にはこう書かれている。

人体の部位は同時に生まれたのに、なぜ生殖器が最初に衰えるのかということ不思議に思う。答えはこうだ。生殖器は飲食には用いず、思考にも必要ではない。人々はその名を口にすることを避けようとする。しかし性交のときは常にそれをを用い、しかも休ませることなく節制をしない。肉体で最初に生殖器が衰えるのはそのためだ。では、どのようにしてそれを保護すればよいかと人は問うだろう。それには飲食で滋養をつけ、随時堅くできるようにし、性交に多用しないことである。すなわち衝動があってもみだりに性交せず、性交するにあたって最高潮の快樂に達しても漏らしてはならない。こ

のようにすれば精液と眞の氣は蓄積され、百歳になつても肉体は衰えるどころか強健になるだろう。

長生の秘訣は精の関を閉めることである。関を閉めれば精氣が集まり、人は元氣旺盛おうせいに氣力は蓄積される。蓄積の効果ははっきりしており、精の関が堅固であれば精液が随意に漏れることもなく、百病はのぞかれ長生となる。性交の原則は心を落ち着かせれば心身ともに健康となる。一回の性交に漏らさなければ耳聰さきく目は明らかに、二回の性交に漏らさなければ声にはりが出て高らかに、三回の性交に漏らさなければ肌に光沢がもどり、四回の性交に漏らさなければ脊髄や手足の関節が損傷しなくなり、五回の性交に漏らさなければ臀部と大腿部だいたいぶがしっかりと、六回の性交に漏らさなければ全身の経脈がよく通じ、七回の性交に漏らさなければ終生いかなる病氣にもならず、八回の性交に漏らさなければ長寿となり、九回の性交に漏らさなければ神明の境地に入るだろう。

これは二一〇〇年も前の記録である。保精の思想がいかに古くから伝えられているかわかるだろう。

保精思想は民間宗教の道教に取り入れられて現在に伝えられた。現代人が求める「不老ふろう

長生^{ちやうせい}（若さを保ち長生きすること）、延年益寿^{えんねんえきじゆ}（長寿を得ること）は、道教の最高目的「長生不死^{ちやうせいふし}、修道成仙^{しやうどうしやうせいせん}」（永遠の命を得て、修行ののちに仙人になること）につながっている。保精して修行し完全な健康体を達成した者が神仙になれるのだ。神仙は不老不死であると同時に強大な神通力を持っており、身体は自由自在、心は軽やか、ストレスなどまったくない。現世社会の頂点をきわめた帝王にして、朝な夕な思いこがれるほどの夢なのだ。

世界の宗教のうち、仏教は俗世を捨てて涅槃^{ねはん}を求め、キリスト教は魂の浄化を求めるが、道教はあまりに遠い彼岸を望まず、天国を探すこともない。ただ求めるのは生きることへの執着であり、現実の楽しい人生が無限に続くことである。

氣功のような健康法や養生法、漢方薬や鍼灸^{きゆう}などを用いる中医^{ちゆうい}（東洋医学）も、このような道教の思想がベースになって、実践を



陰陽融合を示す図。図中の坎は陽（男）、離は陰（女）を示す（17世紀「性命圭旨」）

通し経験を蓄積しながら発展してきた。一方、道教そのものが不老長生という最高目的を達するための方法として教えているのは、氣功や漢方薬ではない。道教は宇宙の成り立ちから説き起こし、至高の健康法を男女の性交に導く。

つまり、天を男、地を女とし、昼はそれぞれに分かれて夜に一体となるというわけだ。すると、天（男）と地（女）は一年三六五日あれば三六五回交わるということになる。こうして天地は精氣整い、万物を産む。我々人間でも道理は同じだと説く。正しい男女交接の方法をもって実践すれば、どんな仙薬を服用するより靈驗あらたかである。

止めてもどす

道教思想で男女の性交は無上の地位にあるというわけだ。しかし、際限のない欲望はきびしく禁じ、男には保精して欲を抑えることを奨励している。それを節欲という。

精氣を欲望のままに放出してしまうと人は病にかかり、尽きれば命を落とす。男女交接にはむやみに精を漏らさず、欲の調節を自在に行える技を身につければ長生きすることができる。

健康で長生きするためにはセックスをたくさんし、射精はなるべくしないというのが道教の教えなのである。中国人の性生活はこうした考え方の影響を大きく受けている。現在

でもオナニーは体によくないと思う人は少なくない。もちろん、西洋医学の観点に立てば射精やセックスの回数は健康保持とは無関係なのだが、人の心に焼きついた観念はなかなかぬけるものではない。

中国の古典的な艶情小説^{ポルノ}を読むと、男が絶頂に達しようとするとき、こう言つてよがり声をあげる。

ウオブーハオラ
我不好了
ウオヤオデイクラ
我要丢了

どちらも日本語に訳せば「イクよ」となるが、中国語の本来の意味は「まずいことになった」ということだ。精液を出すことをいかに惜しんでいるか、よくわかる例だろう。

道教は女性についてはとくに制限を与えていない。なんといつても女性の精気は消耗もはやいが再生もはやいので、あまり心配する必要がないのだ。

セックスに強いかどうかは、女性を前にしてあせらずさわがず、精を保つて漏らさないでいられるかどうかなのである。

道教が不老長生のための方法として推奨する保精のテクニックは「止精回流法^{しせいはいりゅうほう}」と呼

ばれた。射精をこらえて精液を脳へ送るといのである。道教では実践編としてこのように教えている。

性交中、射精が起ると感じたなら、ただちに左手の人差し指と中指で、陰囊いんのうと肛門こうもんのあいだのツボを強く押さえ、深呼吸しながら歯ぎしりをする。このとき決して息を止めてはいけない。

こうすれば射精が抑えられ、精液が活性化して男根から逆流し、脳に入るといふ。さらに精液が脳に入ると、脳裏に「日月交合之相」にちげつこうごうのさうなるイメージが描き出され、男は至福の瞬間を味わうことができるという。これが不老不死の仙境である。

もちろん精液が脳へ流れるなどということはない。どんな鍛錬を積もうと、射精しなかった分はほとんど尿といっしょに放出されてしまうのである。精液と不老長生にはあまり直接的関係はないだろう。ただ、このような価値観があることで結果的に避妊することができたと指摘する学者もいる。

すっかり飲む

明代の艶情小説『浪史奇観』には、精液の話が出てくる。物語の舞台は風光明媚な杭州の銭塘江、主人公は風流才子の梅素先、年は一八、両親はすでになく、一六歳の従妹、俊卿と二人で暮らしている。俊卿は父が生前、親戚から娘としてもらいうけた少女だった。梅素先は、あまりの放蕩ぶりに浪子（道楽者）とあだ名された男である。浪子には陸珠という名の男妾がいた。女性とみまごうばかりの美男子だが、この男、浪子の従妹、俊卿づきの侍女、紅葉と関係を持っていた。俊卿があるとき紅葉に聞いた。

「ねえ、男の滋味を知っているんじゃないの」

紅葉が答えた。

「お嬢様にしかられると思つて黙っていました、知つております」

俊卿が続けて聞いた。

「相手はだれなの」

「ご存じではありませんの？」

俊卿が首をふると、紅葉はついに白状した。

「素先坊つちやまお氣に入りの陸珠ですわ」

そして頬を紅潮させ、興奮したように続けた。

「陸珠ならお嬢様もご存じですわね。彼の宝貝^{モノ}ときたらとても変わっていますのよ。やわらかくてつやがあり、とても大きいんですの。私、あの宝貝^{モノ}が大好きでございます。あるとき口に含みましたら、彼ったらがまんできなくなつて、私の口のなかで漏らしてしまいました。私、それをすっかり飲んでしまったのでございます」

俊卿は好奇心いっぱいに尋ねた。

「汚いなんて思わなかったの？」

「精液が汚いのでしたら、その人の身も汚れていますわ。彼のあの雪のように白い体をころんになつて！ もちろんあれだつてきれいに決まつています」

昔の人の「セックス理論」でいけば、汚い人は精液も汚く、清い人は精液も清いということになる。

* 錢塘江

——^{せつとうじやう}浙江省杭州市の南を流れる全長410キロメートルの川。

杭州湾に注ぐところが急に広くなつてい

るため、大潮のときは海水の逆流現象が起きる。とくに

仲秋節後の8月中旬は波濤^{はとう}の高さが4メートル近くにな

り「錢塘の秋濤」として有名。



明代の春宮画（部分）

第3回 巨陽への憧憬

微陽を变じて巨陽たらしむ

中国には昔からたくさんポルノの艶情小説があるが、なかでも『肉蒲団』にくぶたんは古典的な名作としていまだに人気が衰えていない。この小説の作者は一七世紀、明末清初に生きた文人、李漁である。李漁は明末、知識人の家庭に生まれ、十分な教育を受けて仕官の道を進もうとしたが、満州族まんしゅうが山海関さんかいかんを越えて明朝を倒し、清王朝を打ち立てると官僚の道をあきらめ、書画を売り、文筆で糧かてを得る生活を選んだ。もともと作家として才能があり、自分の劇団を結成して中国各地を巡業して歩いた。芝居の脚本はもちろん李漁が書いた。文芸作家としての李漁の実力はたいへん幅広く、新しい芸術を創出して庭園設計も手がけ、一部は日本の庭園建築にまで影響を与えた。生涯住むところを定めず、みずから好色の徒であることを公言し、花柳界の女性と浮き名を流した。かの博学にして洒脱しゃだつな文化人・李漁は

いまでも伝説的である。

巨根へのあこがれはたいていの男性ならば共通して持っているだろう。『肉蒲団』はそれをテーマにしている。

この物語は元朝が舞台である。主人公は「天下第一才子」(世界でいちばんいい男)を自負する若い知識人、未央生みおうせい。自分にふさわしい「天下第一佳人」(世界でいちばんいい女)を求める旅の話だ。

彼は旅の途中、宿で大泥棒の賽崑崙さいこんろんと名乗る男と知りあった。賽崑崙はなぜか未央生とうまが合い、二人は意気投合して親友になった。語りあううち、未央生は賽崑崙から書籍では知ることのできない性の営みの実例を聞くことができた。賽崑崙は活動の時間帯がほとんど夜なので、泥棒の仕事しながら、ついでに閨房けいぼうの雲雨うんうの一部始終をものかげからのぞきみて、さまざまな秘技を知ったのである。賽崑崙にとって色事は余芸。目を輝かせて聞き入る未央生に次々見聞を話してやった。大よろこびした未央生は、みずからの野望をうちあけ、賽崑崙と義兄弟のちぎりを結んだ。

未央生は旅の途中、子授けの神・張仙ちやうせんを祭る廟びやうの道士どうしに懇願し、しばらく逗留とうりゅうさせてもらうことにした。なぜならこの廟の参拝客がほとんど若い女性だからである。未央生の美女狩りに対する情熱はひとかたならぬ。彼は冊子を用意し、「広く春色を収める」と題

して美人コレクションのノートをつけた。ものかげに隠れて、道士と信者の女性との会話を毎日聞き、名前、住所、趣味を書きつけておき、容姿、体型を描写して、さらに評価の点数までつけるのである。

ある日の早朝、まだ寝ていた未央生の耳に「美人が来た」との声が飛んできた。知らせにかけつけたのは召使いの少年である。未央生は跳ね起きると、衣服も乱れたまま飛ぶようにかけつけた。見ると二人の若い女性が一人の年増女と連れだつて来ている。若い女が美しいこと、夢で見た仙女のようだった。ところが声をかけようかどうかとためらう暇もなく、女たちは帰ってしまった。

そこで未央生、興奮した勢いで、賽崑崙に先刻の女性を見つけるように協力を求めた。ところが賽崑崙、そうかんとんに引き受けはしなかった。まずおまえの一物を点検してからだと未央生にズボンをおろさせた。それを見て噴き出す賽崑崙。

「そんなネコのようなちっぽけな元手もとてで何ができる。義兄弟のおまえが女の笑い者になつたら、俺様の恥だ」

と、協力をことわられてしまった。がっくり肩を落とす未央生。しょぼくれて町を歩いていると「微陽びやうを変じて巨物たらしむ」という広告を見つけた。小さなペニスを改造するという意味である。これこそ天の救い、大いなる福音だと、大金を持って医者をつねた。

医者は道術をあつかう道士だった。その陽根改造術も破天荒なものだった。ひとつがいのイヌを交合させ、雄イヌのペニスが射精直前、最大に勃起した瞬間、するどい刃物ですばやく切り落とし、これを四つ割りにして人間のほうに埋め込むというものだった。

すぐにも術を施してくれとはやる未央生に、意外にも道士は難色を示した。道士は言った。

「いったん改造術を受けたら、三つの制約を受けることになる。第一に、術後三カ月は房事をつつしむこと。もし女色ががまんできずに情交すると、埋め込んだ肉塊が脱落し、陽根も腐ってしまう。第二に、術後最初の相手は絶対処女を避けること。処女と性交した者はみな命を落としている。最後に、術後は子供ができなくなるとのことだ。かりにできても長生きしない。おまえのように浮わついた女好きに、これらの試練が受けられるのか」

未央生は決心した。それまでの色道の考え方をやめ、巨根で生きる道を選択した。彼は道士の言うことをすべて守り、術を施して三カ月後、我ながらほれほれするほどの巨大な肉塊の持ち主に変身した。

未央生のほんとうの女遍歴はこれからはじまる。夢の巨根を獲得するには、子供を望んではならない。これは「セックスは子孫繁栄のため」という大義名分を掲げる儒教の社会においては、じつにきびしいことだ。しかし、その反面、家庭と社会のしがらみに生きて

いる男性にとって、子供ができないことはもっけの幸い。家にしばられることなく自由に女と交わることができるのだ。それはいまも昔も男の夢であるにちがいない。

＊雲雨——巫山雲雨ともいう。男女の情交のたとえ。楚の懷王が夢で巫山の女神と交わったとき、女神が去りぎわ「自分は高い山にいて、朝に雲となり、暮に雨となる」と告げたという故事による。

微陽を変じて長物たらしむ

未央生の女遍歴はこれからはじまるのだが、いったん巨根の話にもどると、清代の小説に『灯月縁』というものがある。一人の巨根の美男子をめぐる裏表含めた艶情小説だ。

物語は明末が舞台、主人公は真生といい、品のある二枚目で風貌が優れていたのが女性にもて、しじゅう浮き名を流していた。しかしこのときまだ彼は巨根ではない。ときは明末の混乱期にあたり、陝西から李自成が農民蜂起を旗揚げして北京めざして進軍していた。その部下の一人、高梧がふと真生を見かけて淫心を起こしてしまったのだ。彼は同性愛者であった。人を派遣してむりやり真生を軍営にまで引き立てた。ついていないのは真生だ。むりにつくり笑いを浮かべて高梧にサービスした。小説の第五回にはこのようにある。

真生と高梧の二人は衣をほどこいて寢床についた。高梧は頭のほうにもぐっていつて軽く抱き寄せ、やさしく愛撫した。真生が従順で少しも拒まないの、高梧は大よろこびし、直立した男根を突き入れた。その長さ最初は四寸あまりだったのに、肛門にゆとりがあつて数百回突くうち徐々に長くなつて一尺近くにもなり、肛門がきつくなると真生は切なさ、気持ちよさでたまらなくなり、動きに合わせ、高梧も十分満足した。力をこめて抜き差しし、黎明れいめいになつてやつと休息した。真生が言つた。「梧兄さんのものは最初は短いようだったが、だんだん長くなつたようだね」

高梧は言つた。「おれは子供の時分ある術士じゅつしに会つて、養亀セックスの方法を授かつたのだ。それで交わるときに冷水をかけると無類の強さになり、堅くなつたまま漏らさない。君の厚愛をもらつた札にその秘伝を教えてあげよう」

真生はよろこび、薬の調合と養生法を教わり、マスターした。すると女性と交わるとき、たしかに高梧と同じようにモノが長く大きくなり、萎なえることがなくなつた。

この一段を見ると、真生は「禍かを転じて福となす」になつたわけだが、話はまだ先がある。今度は李自成の娘、李翠微りすいびが真生を好きになつてしまつたのだ。彼女は計略を練つて

高梧を殺し、真生を自分のものにしてしまった。次は李翠微と真生の床上之歡である。

二人は衣をほどいて榻ねだいにのぼった。真生のものはまだ五寸ほどの長さで、軽く挿入した。往来をばげしくするうち気持ちが高まってきた。突くこと五〇〇回あまり、だんだん肉は太く長くなり、陰門にぴたりと合って髪の毛も入らない。内側は花芯かしんをなめるほど深く入り、からみあう二人のものはまるで同じ大きさにつくられたようだ。翠微は嬌きよう声をはりあげて言った。

「気持ちいいわ！ 死ぬ、死ぬ！ あなたったらどうしてこんなすばらしいモノを持っているの。」

中がきっちり満たされて、切なくて切なくて、一回動いたたびに体中がびりびりくるの。もう一度やったら魂は飛んでいってしまうかもしれない」

妖艶ようえんな声を聞いて真生はますます興に乗り、翠微の両足を肩に上げて強く突いた。一〇〇〇回も突いたところで抱き上げて聞いた。

「私のような田舎者をお嬢様はお気に召したでし



【花宮錦陣】(明代) に見える榻

ようか」

翠微が笑って、

「仙人でも妖怪でもないあなたが、どうやってこのような技を弄ろうすることができたのですか。私は処女を失って以来、いままで何人もの男と寝ましたが、何人かはあなたのように美男子でしたが、物はあなたのように長くも大きくありませんでした。何人かの人には物があなたと同じくらいでしたが、あなたのように続きませんでした。また何人かはあなたのように夜を徹して倦うむことがありませんでしたが、あなたのように親しげでなく風流な趣もありませんでした。俗に大海に入ったことのある人は水を恐れず、巫山みざんに登って雲海を見たことのある人はもはや別の山には登らないと言いますが、あなたの物はそれこそ天下一級ですわ」

と言うと、急にそれがそそりたち、真生は火のごとく燃え、オオカミのごとく襲いかかり、深く突くこと一〇〇〇回あまりでやつとことを終えた。

この小説で、真生は七人の女性と肉体関係を持ったが、そのうちの一人の女性我真生に長いあいだ会うことができず、巨根のよろこびに飢うえて憂鬱ゆううつのうちに死んでしまう。

『肉蒲団』の未央生の陽物は使うときもふだんも同じように大きいが、『灯月縁』の真生

はふだんは小さくて使うときに大きくなり、しかも使えば使うほど膨張するのである。天下の陽物、これほど珍奇なものはない。

*李自成——明末、農民蜂起の首領。飢饉ききんと圧政に苦しむ農民を組織し、陝西省北部から反乱を起こし北京に向けて進軍。途中、農民の租税を免除したり飢民を救済するなどして支持を獲得。主力部隊が北方の守りに出ていたすきに北京を陥落。明の毅宗きしうを縊死いしに追いやる。しかし清に寝返った呉三桂軍ごさんけいと戦って敗れ、湖北で自殺した。中国では農民蜂起の英雄とされている。

第4回 女の達人たち

未央生、愛の遍歴

さて、再び『肉蒲団』にもどりたい。改造した未央生の巨根は、さすがの賽崑崙をもうならせた。彼はさつそく美人で名高い町の糸屋の女房、艶芳を紹介した。艶芳の最初の結婚相手は容姿端麗な秀才だったが、物が短小で、結婚後一年もしないうちにすっかりやせ衰え、まもなく死んでしまった。艶芳は考えた、男は顔じゃない、物だと。それで次に選んだのが糸屋の権老実である。ぶ男で生真面目、風采は上がらなかったが、じつは力の弱い人では持ち上げられないほどの巨大な肉棒の持ち主だった。

そんな男に挑戦するように、未央生は権老実が商用で留守をしているときをねらって、誘惑にやってきた。艶芳はすぐに承知せず、最初は隣に住む醜婦を身代わりに出して未央生をためさせたところ、なかなかの美男子のうえ夫に勝るとも劣らない能力を見て、興奮

は最高潮、欲情の炎を燃え上がらせた。淫^{みだ}らなことではだれにもひけをとらない二人は、たちまち離れたい仲となった。

一方、艶芳の亭主・権老実のほうはというと、ほどなく出張から帰り、妻の不行状を知ることとなる。この男、もともと恐妻家で艶芳に頭が上がらず、しかも妻の浮気相手が賽崑崙だとはやとちりしてしまった。あんな大泥棒が相手ではたちうちできないと思い、泣きの涙で泣き寝入りの毎日を送るのである。

これは好都合だと未央生。賽崑崙の名を騙^{かた}って艶芳を強引に買い取り、二人で行方をくらました。二人はあるところで家を借り、昼夜をわかつたず快楽にふける。

やがて艶芳は妊娠した。出産までの一〇カ月ほどのあいだ未央生は独り寝をしなければならぬ。だが、この男、女なしで寝ることなど二、三日も続かない。美人コレクショ^ン・ノート「広く春色を収める」を開いてながめているうち、目を輝かせ、思わず小躍りする情報を見つけた。名簿に載せた女性が壁をへだててすぐ隣に住んでいたからである。

彼女の名は香雲^{こううん}、言い寄ってきた未央生を拒むどころか、さっそく夜中に忍んでくるよう伝える。下腹部を打ちそうな勢いで隆々とそそりたつ一物を目^まの当たりにした香雲は太よろこび。二人はたちまちねごろな仲になった。

未央生の艶運はまだ続く。かつて寺で見かけた仙女のような三人は香雲の親戚だという

のである。二人の若い女性は姉妹、姉が瑞珠ずいしゆ、妹が瑞玉ずいきぎよくといい、年増は姉妹の叔母で晨姑しんこという。姉妹はすでに夫のある身だった。姉の瑞珠の夫は臥雲生がうんせいといい、妹の夫は臥雲生の弟で倚雲生いうんせいという。つまり姉妹は兄弟に嫁いだというわけだ。兄弟は、香雲の夫・軒子けんしの弟子にあたり、未央生にとつて好都合なことに、師弟は遊学の旅に出ていて留守だった。加えて、晨姑は一〇年ほど前に夫を亡くし、寡婦である。

未央生が引きつけられたのは、愛欲に飢えた三人の発する氣の力だったのかもしれない。未央生の出現に、女たちのよろこぶまいことか。香雲も含めて四人が一人の男とからみあい、乱交パーティー。鶯声燕喘おうせいえんせん、蝶顛蜂狂ちやうてんほうきやう、二人の侍女と未央生の少年召使いも加わって、肉蒲団満喫の乱痴氣騒ぎ。

どの女も決してただ者ではなかったが、なかでも未亡人、晨姑がじつはセックスの達人だったのである。彼女は出産経験があつて、ゆったりサイズだったので、玉門の狭い香雲、瑞珠、瑞玉のように受け入れるのに苦労することはなかった。しかし、初戦は、たった数十回突くだけで「もうやめて……。いく、いく」と絶叫し、果ててしまった。

香雲にしても、瑞珠、瑞玉にしても、はやくて一〇〇回か二〇〇回、長いときには三〇〇回以上突かなければいかなかったのにと、未央生が不機嫌そうに言う、晨姑は突然キツとなった。

「失礼ね。私はもともと強いほうで、一〇〇〇回から二〇〇〇回突いてもらわないと漏らすようなことがないのです。主人が亡くなって十数年のあいだ、ご無沙汰ぶさたしていたので、ついあなたのようないい男を見て興奮してしまっただけのこと。本気を出したら、私が漏れる前に、男のほうがへとへとになってしまふでしょう」

と、第二回戦を迫ってきた。しかし、未央生は不思議に思つて聞いた。

「ご主人は腎虚じんきょで亡くなったと聞いていますが、腎が弱いと精力のほうもそれほどないんじゃないですか」

そこで、晨姑が夫婦の性愛秘技を披露する。

晨姑の秘技は三つ。

- 一、看春意かんしゆんい（春画を見る）
- 二、読淫書どくいんしよ（好色本を読む）
- 三、聴騷声ちようそうせい（淫声を聞く）

春画や好色本について未央生は、すぐに飽きるから良策ではないのではないかと持ちかけると、それは所蔵が少ないからだと言破されてしまふ。

「私の家には春画が数十枚、好色本も百冊以上ありますのよ。全部は覚えきれませんでしょう。だからいつ見ても新鮮なんですの。それに、ただ見たり読んだりするのではなく、

ちゃんと時を考えないといけませんことよ。春画は本番前に見るべきものです。私たち二人は正装し、まるでお客様同士ののように襟を正して向かい合って座り、鑑賞します。陽物が立つても淫水があふれてきても、そのまま鑑賞しつづけ、どうしても耐えられなくなったらはじめるのです。これが春画の効果を得るための正しい方法です。

そして、好色本は、二人が床に入ってから読むのです。声に出して読み、相手に聞かせ、興奮してきたら事を進め、雰囲気がちよつとしらけてきたら、また読む。これが好色本の正しい読み方ですわ。こうすれば一〇〇〇回突くというような労力もいらず、たがいに燃え上がり、自然に漏らすことができるのです」

未央生は「すばらしい、すばらしい」を連発。そして「聴騷声」について教えてくれと催促する。

「主人と楽しむ前に、まず彼に侍女と戯れさせ、侍女のよがり声を聞きます。侍女の興奮が最高潮に達し、よがり声が泣き声になったとき、私はすっかり燃えてきます。そして咳せきばらいを合図に主人をもどらせ、乱暴なほど私を攻めさせるのです。この方法は春画や好色本より何倍も効果があり、七〇〇回くらい突かれただけで漏れてしまいました」

晨姑の達人ぶりは、以上の長々とした話を、未央生との二回戦の最中にしたということだ。未央生は話を聞いているうちに、すっかり恍惚こうこつとなり、晨姑の亡き主人になったよう

な気がして一物はますますたくましくなり、くるった野獣のようにはげしく晨姑を攻めていく。すると晨姑ははやくも濡れはじめ、死ぬの生きるのと声をあげ、六〇〇回ほど突いただけで二人とも達してしまった。

『肉蒲団』では、さらに、未央生をかこんで香雲、瑞珠、瑞玉そして晨姑がカード・ゲームをしながら快樂にふける場面へと進んでいくが、性の女達人がもう一人登場している。それが顧仙娘である。

顧仙娘の高等技

話は前へもどるが、未央生は、男根改造手術をする前に結婚していた。相手は大地主で儒学者の鉄扉道人の一粒種、玉香である。未央生にとっては女性遍歴の第一号なのだが、なにせ深窓の令嬢、幼少のころから四書五経を教えられ、儒教のきびしい躰を受けてきた。もちろん色恋のことなどまったく知らず、まして枕席の歡など大罪にひとしいほどの罪悪感をいだいていた。しかし、婿に入ったのが風流男子・未央生だったのが運の尽き、彼の手にかかれれば、いかな深窓の令嬢もたちまち淫女に変わってしまう。美しい春画を見せながら氣を引き、徐々に愛の手ほどきをしていくうちに、玉香は色欲に目覚めた。もともと純真無垢であるだけに素直に淫乱になってしまったのかもしれない。ところが、どうも娘

のようすが変だと感じた鉄扉道人、だんだんきびしく監視するようになってきた。天性の淫を抑えることのできない未央生はいたたまれなくなり、科挙（官吏登用試験）の勉強をするためと称して、半年にも満たない新婚生活と縁を切り、春情のめばえたばかりの新妻をあとし、二人の召使いの少年を連れて家を出てしまったというわけだ。

色の道をめざめた玉香は、夫に逃げられ、毎日独り寝のさみしさを味わっていた。そこへ権老実が下男として屋敷に入ってきたのである。権老実は無央生に妻・艶芳をとられた男である。二人に逃げられたあとになって真相を知った彼は、怒りの炎を燃え上がらせた。彼がくわだてた復讐は、未央生の妻を自分のものにし、同じ思いを味わわせてやろうというものだった。

玉香は男の誘惑に抗しきれず、身を任せた。長いこと飢えていた彼女にとって、それはまるでひでりに雨が降ったような幸福だった。日々、権老実の長根におぼれていたが、やがて妊娠した。権老実は、彼女の妊娠が明るみになると命取りになる。ならば毒食らわば皿までと、玉香に駆け落ちをもちかけ、如意という侍女もつれて鉄扉道人のもとから逃げた。しかし逃避行の途中、権老実は無香を侍女・如意もつけて遊郭に売り飛ばしてしまった。

顧仙娘は無香と如意を買い取った遊郭の経営者である。

顧仙娘はとりわけ美人という女ではないし、恋文のやりとりで男をとりこにする文才もないが、どこぞの王族の貴公子などと三〇年以上の交遊があり、五〇になったいまも金持ちの男がたずねてくる。外見上はいいたい彼女の何がよくて男が来るのか、さっぱりわからないが、彼女には門外不出の三つのテクニクがあつた。それが、

俯陰就陽ふいんしゅうよう（陰戸うつむけて陽物をあてがう）

挺陰接陽ていゐんせつよう（陰戸をもちあげて陽物を迎え入れる）

捨陰加陽しやゐんかよう（陰の氣を移し陽の氣を補強する）

の三つである。

彼女のやり方はこうだ。体位はいわゆる女性上位で、男をおもむけに寝かし、その上からおおいかぶさるようにして差し入れ、はげしい上下運動をするのである。たいていの女ならば数回で疲れてしまうが、彼女は足腰の筋力にすぐれ、その太股ふとももはあたかも強力なバネでもできているように、まったく疲れを知らず、やればやるほど強くなるのだ。これではよろこばない男はいない。

「交わるとき、身を男にすっかり任せてしまうのは、服の上からかゆいところをかくよう

なもので、気持ちがよくないし、行きとどこかないところがあるの。それより自分が動くほうがさっぱりするし、むだがないでしょ」

と、言つてのけるのである。

受け身になるときでも、プロ意識の高い彼女は決して男に苦勞させない。腰をたくみに動かしながら、男の作業を助ける。男が突いてくれば腰をあげて迎え入れ、男が引けば腰を下げる。こうすれば男は力が半分ですむし、彼女も奥のほうまで思うようにかくことができる。

「この世の快樂は、一人では決して得られないものよ。陰が陽に合わせ、陽が陰に合わせ、たがいに合わせて初めて楽しみが生まれるのですから。陰陽あいかず、これが男女交合の正しい道ですわ。女が男の抽送ちゆうそうに任せきりで、腰を動かして迎え入れることをしないのならば、男は何も人間の女と寝ることもない。木の人形でも使つて股間こかんに穴をあけて使えばそれですむことでしょ」

なるほど、理屈は通っている。だが、彼女が仙娘、つまり仙界の女性とあだ名されるゆえんは、なんといつても三番目の捨陰加陽のテクニクである。やり方はこうだ。男がいきそうになったら、亀頭きとうを子宮の入り口にあてさせ、動かさないようにと指示する。彼女は、子宮の奥の穴を亀頭の穴とぴったり合わせた瞬間に陰の氣を放出する。男は前もつて

教えられていた呼吸法を用い、精液を漏らさず陰水を吸引し、陰の気を吸い上げ、丹田へまわす。こうして男の陽の気を補強するという。第2回でも述べたように、これは保精思想にもとづく健康法だ。

彼女といく晚か枕をとにした男たちは、みなつややかな顔色になり、元氣百倍になる。彼女の評判はどんどんひろまり、そのうちだれともなく「仙女の生まれ変わり」と言うようになり、顧仙娘と呼ばれるようになった。

売られた玉香は源氏名を妙と名乗り、顧仙娘のきびしい仕込みで評判の名妓となった。遊郭の名妓がかつて四書五経を読みふけていた良家の令嬢だったとはだれ知ろう。名妓・妙の名はひろまっていき、ついに未央生の耳に入った。色の道をきわめようとする未央生が、そんな名妓を求めないはずがない。

有名になったこと、それが玉香の不幸であった。顧仙娘の妓院にあがった彼の姿を玉香は見てしまった。自分を捨てて行つた男とはいえ、夫を女郎の身の上で迎えることはできなかったのだ。彼女は部屋で首をつり、自殺してしまった。妓院で死んだ妻と再会した未央生はショックを受け、剃髪して仏門に入る。『肉蒲団』の別名が『覺後禪』（あとで気づいて仏門に入る）と呼ばれるゆえんだ。

＊四書五經——四書は宋代の朱子の定めた『論語』『孟子』に『礼記』の「大学」「中庸」を加えたもの。五經は『易經』えいぎやう『書經』『詩經』『礼記』『春秋』で、儒教の基本となっている。

＊丹田——へそ下1寸（約3センチ）のあたりにある経穴（つぼ）。俗に下腹ともいう。道教では男子の精室、女子の子宮と言い、精気を宿すとされる。

第5回 下着の話

解帯卸衣の下

「昔の中国の女の人はパンティをはいていたの？」

と、以前、ある日本人の友人から質問されたことがある。

「もちろんですとも」と答えた私。だが、

「へえ、じゃ、どんな形の？ 色は？」

と聞かれ、はたと困ってしまった。そういえばこういうことに注意をはらったことがなかったのだ。さまざまな古代の文献のなかには、このような問題について考証したものがないわけではないが、非常に少ない。何しろ、下着のことなど、あまりに日常的すぎて、だれも研究などしないので、記録されにくいのである。

明代に仇英きゆうえいという美人画で有名な画家がいる。一五五〇年前後に活動していたのだが、

その作品のなかで非常に興味深いものがある。四人の女性が服を脱いでいるところで、そのしぐさがおもしろいのである。左の人物はボタンをはずしているところで、二番目の人物は上着をすっかり脱ぎ、豊満な肉体を見せている。三番目の女性はブラジャーをはずし豊かな乳房をあらわにしている。四番目の女性は上半身裸でズボンを脱いでいるところで、陰毛が描かれていないので陰部がすっかり見えている。この一枚の絵によって、当時の女性の服装の下から上までどういうものかよくわかるわけだ。

なんと、当時の女性はパンティなるものをつけていなかったのだ。下着はゆったりした長ズボンであり、体に密着しているのはブラジャーと靴下だけである。

すると、パンティはいつからつけるようになったのだろうか。

その解答は、艶情小説に求められるはずなのだが、星の数ほどある小説には、ベッドシーンばかり念入りに描かれていて、愛をむつみあう男女がどのように服を脱ぐかにはほとんど言及していないの



明、仇英画（列女伝）

である。

たとえば前述した巨根の美男子・真生しんせいが主人公の『灯月縁とうげつえん』には、崔惠娘さいけいじようという女性が登場し、遊びに出かけてもどつてこない夫を待つさみしさに耐えられず、街で真生をハントし、家で快楽にふけるといふエピソードがある。

真生はかすかにほほえむと、とうの昔に陽物は堅くなり、睦言むつことをかわすこともせず、惠娘を抱きしめた。蘭麝らんじやの香りがふくいくとたちのほり、リラの香りの惠娘の舌が真生の口に差し入れられ、しばし吸われると、耳元でささやき声がする。「うちの人は遠出したきり帰つてこないの。だから心配ないわ」と言うとき帯をほどいて衣を脱ぎ、二人はもつれるように蒲団ふとんのなかにもぐつた……。

ここでは、服について「解帯卸衣」（帯をほどき衣を脱ぐ）の四文字でかんたんになすませられており、パンティについては何もわからない。

明代の『続金瓶梅ぞくきんべいばい』でも同じようなものである。

登場人物の金桂きんけいと梅玉ばいぎよくは女同性愛者で、いつも一つのベッドで寝て愛撫あいぶしあつてよがり声をあげ、夫婦の楽しみをしていた。そのなかにこのような描写がある。

あれは七月、天気は暑く、開け放した小窓から月の光が差し込み、裸の二人を照らしていた。四本の足は白く光り、まるで沼から掘り出してきれいに洗った蓮根れんこんのよう。その毛は輝き、銀の糸のよう。二人はもうむつまじなれているように、首を抱いて音をたてて口を吸いあう。一方が「私のお兄さま、子羊ちゃん」と呼べば、もう一方は「私の大好きな姉さま」と答える。二人はどんな技も知っていた。上になり下になり、一つになってもつれあう。どこが良家のお嬢様なものか、年季のいった女郎でもこれほどすてきはおるまい。

ここでも下着の存在は不明である。ただ「兩人脱得赤条条的」（二人はすっぱだかで）とあるだけだ。

中国の古典艶情小説ポルノの多くは、寝る前の描写がこの程度で、パンティの考証はできない。しかし、唯一、中国で昔どのようなパンティが流行していたかという情報のある小説が存在する。それが前述した明末の艶情小説『浪史奇観』である。この話では、風流才子の浪子ろうしが、夫のある身の李文妃りぶんひと不倫し、彼女の夫が死ぬと、これ幸いと夫婦になり、李文妃の異母妹の潘素秋はんそしゅうとねんごろになり、また文妃の隣の家の趙家の母娘おやこともつきあい、文妃

の下女たちも交じり、さらに自分の従妹の俊卿しゅんけいとも通じる。中国では一般に名字を同じくするイトコとの婚姻は近親相姦と考えられているが、名字が違うイトコとの婚姻はそうは考えられていない。またのちには友人の鉄木朶魯テムダルの財産まで手に入れ、その妻も自分のものにしてしまう。さらに七人の美人を妾に入れ、全部で二人の妻と一人の妾を持ち、昼も夜も快樂にふける。しかしあるとき船で外遊していて突如として悟り、山にこもって現世との縁を切り、隱遁生活いんとんをして仙人になって去ってしまう。——これがストーリーだが、小説の第五回の浪子と李文妃が初めて雲雨うんうの情をかわす場面を見てみよう。

浪子は李文妃の寢室へ入り、あいさつをして腰を掛けたが、なぜかいつもと違い、なんとなくはざかしさを感じてしまいました。しかし、そこは浮気性の李文妃、風流才子の浪子を見ては、飢えたトラが餌を見つけたようなもの、浪子に飛びつきむしゃぶりつく。李文妃は浪子の顔に顔をよせて、ささやく。「かわいい人、はやく脱いでよ」。浪子も接吻せつぶんしながら言う。「愛してるよ。君もはだかになってよ」。そこで李文妃、急いで簪かんざしをはずし、衣裙イチヤン（上着とスカート）を脱ぎ、やわらかな胸をあらわにします。「主腰チヌーヤオル児もいっしょに脱いでおしまいよ」と浪子に言われると、李文妃はこくりとうなずき主腰チヌーヤオル児を脱ぎ捨てます。浪子が続けて「膝袴シークハも取っちゃいなよ」と言いますと、李文

妃は膝袴シキマも取ります。すると、たった三寸の小足があらわれます。今日はいているのは鳳凰ほうおうの頭のついた小さな紅靴。浪子の春心大いにそそられ、言います。

「君のその小足を見て、ぼくは魂をゆさぶられたよ。あれはどんなふうになっているのか、はやく袴クハル児を取って見せておくれ」

李文妃それには答えず、言います。

「ベッドに上がりました。灯りを消して帳とばりをおろしたら脱ぐわ」
けれどあわてている浪子は彼女の言うことを聞こうとしません。

「灯りは消さなくてもいい。帳も開けておく。いますぐ袴クハル児を取ってくれなくちやいだ。だってそこがいちばんステキなもの。隠すことはないだろう」

二人は押しあいもみあい、最後は李文妃が負けて、袴クハル児を脱ぐことになってしまいました。李文妃の陰部は肉厚にして無毛、おしろいを引いたような白さ。浪子はそれを見るなり陽物をそそり立たせ大急ぎで全裸になる。それを見て李文妃は大よろこび。「なんて大きな卵袋モメなの。陰戸に入れたらさんざんな目にあわされるわ」

というように話は続くが、李文妃の衣服だけを取り上げてみたい。

簪イイサユンと衣裙イイサユン（上着とスカート）をとり、上半身裸になる。

「主腰児」(チヌーヤオル) (ブラジャー) をはずす。

「膝袴」(シークア) (膝から足首まで覆う布で、脚絆きやはんやレッグウオーマーに似たもの) を脱ぐ。

最後に「袴児」クハルをとって下半身をあらわにする。

ということは、この「袴児」クハルが現在のパンティにあたるものようだ。すると、小説の成立した時代、つまり明代末には女性たちがふつうに「袴児」クハルなるパンティをつけていたことがわかる。

うす紅色、桃色、深紅

小説の第三四回には、浪子と、その友人の妻・安哥あんかが「袴児」クハルを交換するという場面がある。

安哥は人妻の身でありながら浪子に心惹かれていた。その日、安哥は春心をどうしても抑えることができず、夜、自分の部屋へしのんでこさせようと思い、侍女の



「花宮錦陣」(明)「風中柳」
(部分)。膝袴が見える

春鶯しゅんおうを使いに出そうとした。だが、春鶯は、初めての逢瀬おうせなので安哥の心を証明する物がなければだめだと言った。

「彼に信じてもらえる品を持つていかなければ、来てくれませんわ」

「それもそうね」

と言いながら、安哥はなんとす紅色の「袴児クハル」をするすると脱ぎ、春鶯に渡したのである。

「これを差し上げておくれ。もし色よいご返事ならば、身につけている『袴児クハル』をくださるようにつてね」

春鶯は命を受けて浪子の住まいを訪れると、安哥の愛の証あかしを浪子にプレゼントした。

安哥の「袴児クハル」は脱ぎたてのほやほやだ。浪子はそれを見て欲情をそそられ、袴児クハルに顔を押しつけてキスしながら言った。

「いとしい人！　なんていい香りなんだ。大好きだよ！」

浪子はさっそく自分の白い紗しゃの袴児クハルを脱ぎ、春鶯に渡した。春鶯は笑いながら言った
「お二人はまだ枕を交わしておられないのに、もう心は一つですね」

浪子は春鶯の手をとって言った。

「私の袴児クハルは私の卵袋モノにかぶせたもの、彼女の袴児クハルは彼女のおそこにかぶせたもの。今

日、こうしてそれぞれの袴カウル児を交換すれば、心から愛し合っているということになるのだよ」

浪子は続けて言った。

「おねえさん、事が成就したあかつきには、君にもお礼をしなくてはね。悪いけれど夫人に伝えておくれ。美青年インテリが今晚君を襲いに行くよとね。ただこの大卵袋オオモノを気に入ってくれるといいのだけれど、ほんとうに心配だ」

ここまでのやりとりで、当時の下着がどんな色だったのかがわかる。安哥が浪子に渡したのはうす紅色とあるが、いろいろな文献を見ると、古代中国では婦女子の服には赤い色がよく用いられたようだ。たとえば桃色タオスー、粉紅フエンホン（うす紅）、大紅ダイホン（深紅）などが好まれた。『金瓶梅』の女主人公・潘金蓮はんきんれんは上着からスカート、睡靴（寝るときにはく靴）まで全部赤で統一していた。



春宮画が刻された宝石箱（近代）

「紅 hong」には赤い色以外に、女性に関するさまざまな意味がある。

紅^{ホンレイ}泪

美人の流す涙

紅^{ホンイエン}顔

美しい女性

紅^{ホンロウ}楼

財産家の家の女性たちの住まい

紅^{ホンクイ}閨

令嬢の住まい

紅^{ホンニユイ}女

機織りや刺繡^{ししゅう}を生業にする女性

紅^{ホンシウ}袖

女性の赤い衣装

紅^{ホンフエン}粉

化粧に用いる紅おしろい

第6回 人をもって人をおぎなう

陰をもつて陽をおぎなう

中国伝統の性愛の理論に、

陰陽互採、以人補人（陰陽たがいに取り入れ、人をもって人をおぎなう）

という考え方がある。中国では昔から重視されてきた。夜間、男子は精氣旺盛で、女子は早朝に精氣が蓄積されるので、夜に交われれば男性の精氣で女性をおぎない、朝に交われれば女性の精氣で男性をおぎなえるというのである。精氣が旺盛となるとか、蓄積される状態というのは、全身の氣血がよく流れ、体内の脈が最も運動に適した状態になることである。パートナーからもらった精氣が内臓に入れば、臟腑ぞうふが活発になり、体はすこやかにな

つて精神もふるうようになるのだ。氣は口、乳房、性器から吸収できるので、その三カ所を接合する方法を「三峰採戦術さんほうさいせんじゆつ」という。

この「以人補人」の考え方をひろげれば、もらう精氣が多ければ多いほど長寿が得られるということになる。男性にしてみれば妻は多いほどよい。昔の中国には一夫多妻制度があつたが、その目的の一つが子孫繁栄。もう一つの目的が女陰で男陽をおぎない、男性の健康を保ち、女性を支配する地位を維持しようということだった。

艶情小説『巫山艶史ポルノ ふざんえんし』は、風流才子の李公子りこうしが八人の美女を次々妻妾さいしやうにし、子だくさんで榮華をきわめる話である。

北宋末年、江南こうなんは蘇州府そしゅうに李芳りほうというインテリ青年がいた。頭腦明晰めいせきで才氣あふれ、しかも美青年で風流の才も非凡であつた。両親をはやくに亡くし兄弟もなく、妻もまだないという、じつにしがらみのない生活を送っていた。

ある日、李芳は郊外へ狩りに行き、獲物を追ううちいつのまにか大邸宅の花園にまぎれこんでしまった。そこで彼は庭を散歩していた絶世の美女と出会う。彼女は江寧路こうねいろ（行政区域の一つ。現在の江蘇省南京市付近）の提舉・羅忠の娘、羅翠雲らすいうんという。二人は一目で恋に落ち、心を通わせるが、時すでに夕暮れ、恋を語ることができず未練を残してその

場は別れる。

日が変わり、李芳は、母親の納棺後、いまだ果たしていなかった埋葬の儀を行うために、使用人の李旺りおうを浙江せつこうに行かせることにした。李旺は長い旅路になるというので、出発の前日は妻の秋蘭しゅうらんと房事に熱中した。ちょうど二人がむつまじくあつてるとき李芳が部屋の前を通ったのである。なやましい秋蘭の声に思わず窓からのぞくと、二人は房事の真つ最中。秋蘭の白い肉体を見て李芳は心を動かされる。翌日、李旺が出かけると、李芳はさっそく秋蘭に水を向けた。この秋蘭は淫蕩な女、さっそくたなびき李芳の腕の中で雲雨の情を降らせた。

だが李芳は羅忠の令嬢、翠雲が忘れられない。ある日ついに羅家をたずねたところ、翠雲は望外のよろこびよう。彼女も李芳が忘れられず、彼が放った矢を庭で見つけ、ますます縁の深さを感じていたのだった。二人は熱く恋を語り合い、終生変わらぬ愛を誓い合った。李芳は懷から碧玉へきぎよくの根付けを取り出して、愛の証拠として彼女へ贈った。

「お父様ようしゅうが揚州の出張から帰られたら、結婚をお願いするわ」

と翠雲。二人がおしゃべりに興じているといつのまにか外はやらずの雨。李芳はそのまま羅家に泊まる。彼はベッドの支度を整える侍女の小娟しょうけんも気に入ってしまった。最初に寝たのは小娟、次に世間知らずのお嬢様を呼んできて、その夜は三人で淫樂に興じた。李

芳はそのまま三日いつづけ、やっと帰った。

李芳には一九になる美人のいとこがいた。名を聞玉娥ぶんぎょくといい、ある家に嫁いだ、嫁入りしてたった一年で夫に死なれ、若い身空で寡婦になってしまった。李芳は会ったことがなかったが、あるときたずねて行つた。聞玉娥は美しいばかりでなく情が厚く、年下のいとこの身を心配し、「なぜまだ独身なのか」と親しく尋ねる。すると李芳、年上のいとこの美貌ひぼうに心を奪われ、にっこりして言つた。「私は面喰いなんです。お従姉ねえさんほどの美人とならば結婚してもいいのですが」

彼女は李芳の含む気持ちをととり、いとこ同士の男女はたちまち恋に燃え夜な夜な交歓とあいなる。玉娥は李芳に言つた。「私は若くして夫を亡くし、床の歎よろこびを知りませんでした。こうしてあなたと親しくなり、死んでも悔いはありません。できるならばあなたの妾になり、あなたにお仕えしたい」

李芳がそんな申し出を断るはずがない。彼も誓いを立て玉娥を決して忘れないことを伝えた。

李芳はこれでも科挙の受験生である。彼の学友に名望家の息子で梅悦庵ばいえつあんという男がいた。彼はいっしょに試験勉強をしようと、李芳を家に誘つた。梅悦庵には蕭月姫しょうげつぎという妻がいた。匂い立つような色香の美しい女である。ところがなんと梅悦庵は男色で、悲しいか

な妻は独り寝のさみしさに耐えていた。また梅悦庵には素英そえいという妹がいた。まだあどけなさの残る少女だが人好きのする魅力にあふれている。この二人の女性が李芳の姿を御簾みすの向こうからのぞき、すっかり気に入ってしまった。彼女らは李芳が梅悦庵の学友だと聞き、出会いを求めて庭園を散歩する。三人があいまみえ、目と目をかわして意を通じ合い、あるとき梅悦庵が出かけた留守に悦樂の時をすごすことになった。その後も三人は密通し男女の楽しみに興じるのだった。

李芳の女遍歴はひよんなことから新しい道が開けた。李芳と月姫がたわむれている最中に梅悦庵が帰ってきたというので、月姫があわてて長持に李芳を隠してしまい、そのまま夜中まで開けることかなわず、そこへ泥棒が盗みに入った。泥棒とは隣家の秦しん仰山ぎやうざんであった。この男、博打に負けて金に困り、金目の物をねらって梅家にしのび入った。李芳の入っている長持を見つけてずっしりと重いのを確かめ、ひとまずそれを家に運び、ふたたび空き巣に入ろうと隣家に向かおうとしたら路上で御用となってしまった。秦しん仰山ぎやうざんには娘がいた。名を秦飛瑤しんひようといい、なかなかの美人だった。父親の窃盜行為に腹を立て、ふと長持を開けてみたら、なんと中に素っ裸の男が寝ているではないか。李芳は礼儀正しく名を名乗り自己紹介をすませると、言った。

「こんなに美しいお嬢さんが、盗人の家の娘だなんて、あまりにもかわいそうだ。もし私

がこのまま帰り、空の長持を残していったら、中の品物が無いというのでさわぎになるだろう。むろん疑いはお嬢さんにかけられる。もし賠償を求められたらお嬢さんは身を売らなければならぬ。それより私とともに百年のよしみをかわそうではないか」と説得し、飛瑤を家に連れて帰った。

李芳は秦飛瑤を秋蘭といっしよに住ませ、軽はずみなまねはしなかったが、あるとき性欲がどうしても抑えられず、飛瑤の部屋に来てみたところ、ちょうど行水の真つ最中。そのほっそりした白い胴のくびれに欲情が燃え上がり、飛び込んでいつてむりやり犯してしまった。

いよいよ科挙の最終試験のシーズンがやってきた。試験は首都で行われるので、地方の受験生は長期の旅をしてやってくる。李芳も梅悦庵とともに使用人の李旺を連れて上京した。その旅の途中、宿泊した宿の女主人、江婉娘こうえんじやうをものにしたのである。江婉娘も寡婦だった。彼女は李芳との結婚を求め、彼も合格のあかつきには迎え入れようと快諾する。

李芳ほどの強運の持ち主はいないだろう。最終試験の難関を突破し、なんと首席で合格したのである。しかし同行した梅悦庵は落ちてしまった。ともあれ二人は故郷に帰る。その途中、彼らは追い剥はぎに襲われ、使用人の李旺が殺されてしまった。二人は九死に一生を得て逃げ帰り、梅悦庵は突然脱俗の志を立て月姫と素英を李芳に託して、山に入り世捨

て人になってしまった。

李芳は約束通り江婉娘と結婚し、それまで愛した女性たち、すなわち羅翠雲、秋蘭、小娟、聞玉娥、蕭月姬、梅素英、秦飛瑤を迎え入れた。妻妾あわせて八人、子供は六人生まれ終生仲良く暮らし、長男が成人したのは家業を継がせ、李芳は妻たちを連れて山に入り、仙人となってどこへともなく去っていったという話。

男の理想の一生である。

＊提舉——宋代に定められた官位。特殊な業種の事務管理をする。宋代には水利提舉、塩茶提舉、元代には医学提舉、宝鈔提舉などがあつた。

陽をもって陰をおぎなう

「陰陽互採、以人補人」で言うならば、男が「陰をもって陽をおぎなう」ばかりでは不公平である。歴史上には「陽をもって陰をおぎなう」強い女性がいたはずだ。

それが夏姫である。

春秋時代、当時最も強大な勢力を誇った楚の国に、陳の国から孔寧と儀行父という大夫が亡命してきて、楚の国の支援を要請した。というのも、陳の大夫である夏徴舒が、君

主平国（靈公）を殺害して帝位を篡奪したというのである。楚の莊王は内実を探りに人を派遣したところ、一人の多情の女の姿が浮かび上がった。

その名は夏姫、君主殺しをはたらいた夏徵舒の母である。夏姫は鄭の穆公の娘で、陳の大夫、御叔に嫁して夏徵舒を産んだ。御叔はのちに死し、若い身空で残された彼女は、多情な身をもてあまし、君主の平国と通じたうえに、孔寧、儀行父とも不倫し、日々淫蕩生活に明け暮れた。

多情の母を持った夏徵舒は、屈折した性質をそなえるようになった。長じて大夫の位についたが、あるとき、平国が彼の出生に問題があると公の場で言及したことを深く根にもち、ついに国王暗殺の事態にいたったのだ。

夫なきあとの三人の男との関係だけでなく、夏姫にはまだ過去の罪状があった。腹違いの兄二人とも通じていたのだった。一人は靈公、もう一人は子公という。兄妹の関係はいちじるしく人倫に反する行為である。夏姫が二〇歳になるまで嫁に行か



夏姫と夏徵舒（宋本『列女伝』）

なかつたのも、靈公が手放すのを惜しんだからだという。美貌の妹をめぐつて兄と弟は陰悪な仲になり、ついに弟が兄を殺すという流血事件にまで発展した。夏姫に天性の淫婦という悪名がつけられたのはこの事件がきっかけだった。

莊王は陳の朝廷がすでに内部崩壊しているのを知ると、さっそく征伐に乗り出し、夏徴舒に逆賊の汚名を着せて捕らえ、車裂きの極刑に処した。夏姫も捕らえられたが、引き出された彼女を見て、案の定、莊王もその色香にまどわされ、側にはべらせようとした。だが、莊王の側近、大夫の巫臣によつて強く反対され、思いはかなわなかつた。

夏姫は、將軍、子反に下賜されたが、巫臣はそれでも安心できないと、さらに子反を説得して別れさせ、今度は同じ將軍でも、古い先短い連尹襄老の妻に迎えさせた。連尹襄老はまもなく晋国との戦で死んだ。

夏姫の多情は収まることなく、今度はその遺児・黒要に手をつけたのである。

毒婦・夏姫の悪名はさらに高まつた。

ところがここで話は大転換。夏姫に惚れた男が出るたび、いちいち諫言していた当の巫臣が夏姫の色香にまどわされていたのである。とうとう夏姫を手に入れるためには、国も地位も捨ててもいいとまで考えるようになった。

巫臣は、晋国が連尹襄老の遺骨返還を申し出ているという偽りの情報を流布させ、莊王

に夏姫出国の同意を得た。夏姫は楚国を出ると、鄭ていの国へ逃げ、そこで巫臣の来るのを待った。数年後、機が熟したと見た巫臣は楚から亡命し、鄭の国で夏姫と落ち合うことに成功した。

しかし、楚では重臣・巫臣が亡命したとあつて、大騒動になつてゐた。国への裏切りばかりでなく、女まで騙だまし取られたと知つた子反が激怒。巫臣の一族を皆殺しにしてしまつたのである。

その計報ふほうを耳にした巫臣が今度は復讐ふくしゅうに燃え上がった。晋王に、呉この国と連合して楚を討つ策を献じ、みずから指揮をとつて何度も楚に攻め込んだ。楚の国は頻繁に侵略を受け、国勢が衰えていき、ついに中原ちゅうげんにおける主導的勢力は失われた。

以上は『春秋左氏伝』に記された故事である。

国の命運を変えた夏姫は、「乱国淫女」として語り継がれ、明代の『列国志伝』『新列国志』、清代の『東周列国志』に小説となつて登場する。物語のなかの夏姫は、史書の夏姫より性愛描写がデフォルメされ、大衆好みにスクヤンダラスな表現になつていった。清代に禁書とされた艶情小説『株林野史』（ホルノ、しゅりんやし）には、夏姫がいかにもテクニシャンであつたか、詳細かつ刺激的に描かれている。

夏姫とはある仙人から二種類の秘薬をさずかったという。一つは開牝丸かいひんがんといい、飲むと花園の中の滑りがよくなり、たとえ処女でも交わりに痛みがともなわない。もう一つが緊きん牝丸ひんがんといい、数粒飲むと花園の門がきつくしまり、処女と同じようになる。これこそ女にとっては最終兵器、男にとっては命取りになりかねない凶器。

秘薬のおかげで性の達人になった夏姫は、毎日励んでもまったく疲れを感じず、男たちの陽気を吸い取って、五〇歳近い年になっても一八、九歳の処女のようなういしさを保っていた。

一方、相手役の巫臣も一晚に一〇人もの女性と交わって精液を一滴たりとも漏らさないというほどの房中術を身につけた男として登場する。最強の女と男がベッドの上で秘術の限りをつくして挑みあうというストーリーになるのである。

結末は、巫臣が亡命先の晋の国で、公主を誘惑したかどで殺され、夏姫はかつての仙人に助けられ、天上界に昇って仙女になる。どんな悪女でも惚れた男の目には仙女に見えるものだ。



清代の春宮画『帝王臨幸之春冊』(部分)

第7回 尼僧の淫乱な犯罪

華やかなる不倫・不貞

子孫繁栄のためならば、妻は何人いてもよいと儒教では説かれていると述べた。しかし、中国数千年の歴史で民を治め国家を治める理論の基礎にされている儒教思想には、一種の禁欲主義がしかれてもいる。つまり儒教では、子供をつくる目的以外の色欲は非常に有害なものとして規定しているのだ。儒教ではこう言う。

倫理を守り、欲を減ぼす。

飢えて死ぬのは小事、節を失うのは大事。

明代の史料にこのような話がある。ある夫を亡くした女性が、夫の遺体を故郷に送る旅

の途中、泊まった旅館の亭主ともめごとを起こしてしまった。事の起こりは亭主が何気なく彼女の腕を引いたことだった。女は屈辱を受けたと怒り、貞操を失ったとしてその腕を切り落とし、身の潔白を示したという話である。

では、昔の人がみなそれほどまでに貞操であつたかという、かなり疑わしい。記録に残されたのは、あえてはめたたえるほどもずらしいことだつたからだとも言えるのである。さまざまな史料や言い伝えを集めてみれば、貞節とは対極にある姦通かんつうがじつは日常的だつたことを、あんがいかんたんに知ることができるのだ。

儒教倫理の実践者として国の模範であるべき皇帝や皇族の私生活は、相当目にあまるものだったようだ。だからこそ、現代から考えると必要以上と思われるきびしい制約が課せられていたと考えることもできる。

上述した寡婦の腕切り事件は明代だが、明代の役人たちも上は大臣から下は小役人まで、世の秩序を守るどころか花柳界に入りびたり、女遊びに明け暮れた。

明代の書で、雑文を集めた『堯山堂外紀』ぎやうざんどうがいきにはこんな笑い話がある。

政府高官の楊榮ようえい、楊士奇ようしき、楊溥ようぼ（あわせて三楊さんよう）はしばしば妓院ぎいんへ入り女遊びをしていた。ある日、三人は売れっ子の妓女、齊雅秀せいがいしゅうを呼んで、酒の相手をさせようとした。ある人が齊雅秀にこんな話を持ちかけた。

「どうだい、あの三人の役人を同時に笑わせることができるかい」

齊雅秀は「お部屋に入ると同時に笑わせてみせますわ」と答え、わざと遅れて行つた。三人は彼女が遅れてきたのでおかんむりである。齊雅秀あわてずさわがず答えた。

「本を読んでいて、途中でやめることができなかったのよ」

三人は聞いた。

「そんなに夢中になる本とは、いったい何の本だ」

「信じてくださいますかしら、貞女の本ですわ」

三人は爆笑した。妓女のくせに貞女の事績の本を読むとはたいしたお笑い草だというわけだ。しかし、笑ってから考えた。もしかすると、これは自分たちをからかっているのではないかと。すると急に腹が立つてきて、ののしった。

「メス犬のくせに生意気な！」

齊雅秀はすぐさまやりかえした。

「私がメス犬ならば、みな様は公こう猴こうではありませんの」

公こう猴こうとはサルのこと、しかも公こう侯こう（高官）と同じ発音だ。権勢をふるう三人はかよわき一人の遊女にしてやられた。

清代には張亮采ちやうりやうさいという学者が『中国風俗史』という書物を書いている。それにはこんな記載がある。

上は王家から下は下級の士大夫しだいふの家まで、房事の不行状は怪しむに足りぬほど多い。息子と母親が姦通し、孫と祖母が関係するばかりか兄嫁を妻とするなど、かくのごとき怪事醜聞が世間で黙認され、あまつさえもてはやされる昨今である。世間の人々は恥というものを知っているのであるのか。上に好む者あれば下ははなはだしくなるもの。民の淫乱は怪しむにあたらぬ。

張亮采は紀元前の春秋時代のエピソードを用いて当世を風刺したのだ。春秋時代だろうが清国時代だろうが、男女の自由奔放な性の実態は変わっていない。

春秋時代に続く戦国時代の末期に書かれた史書『韓非子かんびし』には、こんなおおらかな話が記されている。

燕国えんの人、李季りきはよく家を留守にして出かけた。妻は浮気者でそれをよいことに男と密通まおとこ たわむしていた。ある日、間男まおとこと戯れている最中、李季が帰ってきたとの下女の知らせが

入る。突然のことで、脱出策に困ったところ、下女が大胆な名案を思いつく。

「いつそ裸のまま帰ったらいいわ。みんなで、そんなものは見ていないと言えよ」

李季は真つ昼間に全裸の男が家から飛び出すところと出つくわす。思いもかけない出来事に呆然自失となつて、家人に尋ねるが、そんなものは知らない、何事もなかったという返事。これは病気で悪霊を見たのだと信じ込んだ李季は、悪霊退散のために、家畜のフンを体中に塗りつけた。

この話は、妻の密通を非難するというより、間抜けな夫をからかうような落ちになつてゐる。当時はのちの時代より倫理観念がきびしくなかったのだろう。

また史書『漢書』『地理志』には秦の国では男女が「密通を好む」こと、鄭の国では風紀が乱れていること、燕の国では客の接待のために自分の妻を同衾させたこと、また結婚の祝いの夜に、来客の男女がみな自由に交際したということなどが書かれている。

だいたい、儒教の教祖たる孔子ですら、現在で言う「非嫡子」だとされている。司馬遷の『史記』によれば、孔子の父は最初、施という名の女性を娶ったが、生まれる子供が女ばかりなので妾を入れた。だが、それでも思うように男子が生まれない。最後に顔徴在

という女性と逢^あひ引きして、天才の孔子が生まれたというのである。出生が「正統」でない孔子が、家族倫理を打ち立てたのだから、おもしろい話である。

桃色尼僧の犯罪

中国の大宗教には、儒教、道教とならんで、仏教がある。

儒教では性行為を子孫繁栄のためと定義し、道教は健康と不老不死のために行えと唱えている。しかし、インドから入った仏教は人間の本来持っている性欲を否定し、禁欲を徹底させようとする宗教だ。中国の仏教では出家した者は「八戒^{はつがい}」（八つの戒め）を守らなければならぬ。その一つに「淫の戒め」がある。そのために出家僧は結婚をしない。

だが、現実はどうだったのか。中国の小説には、出家して男性とは隔絶された寺に住まう尼僧たちが、桃色事件の立て役者として多く描かれている。どんなに宗教が高潔であっても、人間はしよせん愛欲をなくすことはできない。出家者といえども、ほんとうに僧侶になりたくて入った者ばかりではない。いろいろな事情があつて仏門に入つた者もある。若い身空で世捨て人の生活はできない。何かのきっかけがあれば奔放な行動に出ることもありえるのだ。

明末の文学者、馮夢龍^{かうほうりゆう}が編纂した『醒世恒言^{せいせいこうげん}』は、庶民の生活実態を生き生きと伝え

た白話小説（口語で書かれた小説）の集大成として世に知られている。そのなかには淫乱で破天荒な尼僧たちを描いた物語がある。

明代、江西省臨江府新淦縣に、赫大卿という遊び人がいた。ある日、派手な服を着て、美人を探しに郊外へ出かけた。ぶらぶら歩くうち、非空庵という尼寺の前に来た。非空庵には美人の尼さんがいるという噂をかねてから聞いていた彼は、なんとここにあったのかと心躍らせて門をくぐった。すると、噂にたがわず、絵から抜け出たような美人の尼が迎えに出た。尼は空照と言ひ、もともと好色だったため、魚心あれば水心というわけであちまち二人は意気投合、二人の下女も呼んできて乱痴氣騒ぎをはじめた。

ところで、空照が住んでいる西部屋の反対側の東部屋には、もう一人性欲旺盛な尼さんがいた。名を静真と言った。彼女が隣部屋の情事を察知しないはずがない。世間にはらずと脅し、静真は空照に赫大卿を自分のところにもよこすことを約束させる。

赫大卿は、尼寺の門をくぐったのが運の尽き。四人の女を相手に日に日にはげしさを増すラブゲーム。思いつくあらゆる淫乱の秘術が次々ためされ、情欲はとどまるところを知らない。赫大卿が逃げないように、彼が眠っているあいだに尼たちは髪をつるつるにそり落としてしまった。

精力絶倫を自慢する赫大卿だったが、欲情炎々の四人の女にもてあそばれ、たちまち枯れ木のようにやせ衰え、あたら命を落としてしまった。

死に際、赫大卿は、身につけていた鴛鴦おとりの腰飾りを尼たちに託し、自分が生きていることの証拠として妻に渡してくれと頼む。もちろん、これら非情の尼たちが彼の遺言に従うはずがない。腰飾りは投げ捨てられ、赫大卿の遺体は尼の僧衣を着せられて、寺の裏庭に埋められた。赫大卿殺しはこれで万に一つも知られるはずがなかった。しかし、世に完全犯罪はない。

ある日、左官屋が寺の修理に来た。彼は敷地内で偶然、鴛鴦の腰飾りを見つけ、拾って自分の腰に下げて帰ったのである。左官屋はその後、赫大卿の家にも呼ばれ、腰に例の鴛鴦の飾りを下げて修理に来たのだった。腰飾りに気づいた妻は、失踪した夫のことを調べてくれと左官屋に頼み、左官屋は寺で、静真に折檻せうかんされて恨みをいだいていた下女から真相を聞き出すことに成功し、さっそく赫大卿の妻に知らせる。

寺の裏庭の搜索がはじまった。すると、死体が見つかった。尼のなりをしているが、下半身を調べると男であることがわかった。すわ、わが夫赫大卿だと役所に訴えでるが、なんとある老僧がかけつけてきて、それは自分の弟子で、長いあいだ行方不明になっていた去非きよひだと訴えたからたいへん。一つの遺体に二者から名乗りがあがった。裏庭の遺

体は赫大卿かそれとも去非か。お白州しらすで、赫大卿の妻と老僧はたがいに譲らず、いつまでたつても決着がつかなかった。

一方、主犯の空照と静真はあわてて逃亡し、極楽庵ごくらくあんという尼寺に隠れていた。しかし追っ手から逃れることはできず、発見され、極楽庵のほかの尼僧とともに身柄を拘束され、お白州へ引き立てられた。遺体がだれかをめぐって両者が言い争っているとき、声がかかった。

「師父しふ、私は生きております」

なんと、極楽庵から引き立てられてきた尼僧の一人が去非だったのである。彼は赫大卿と同じように、淫乱な尼につかまり、そのまま尼僧の姿にされて幽閉され、毎日夜伽よとぎをさせられていたというのである。去非のこの一言で、遺体の謎なぞは解け、二人の失踪事件はその場で解決した。

中国のこのような小説は、『論語』や『易経』えいぎきょう、また王朝の歴史など学問として正統とされる「正史せいし」と対極に位置される「稗史はいし」と呼ばれるジャンルにある。稗史というのは、世間の噂話や風聞を集めたもので、古代には世間の声として王に上申した。『醒世恒言』に集められた話は決して荒唐無稽こうとうむけいなでつちあげではない。おそらく当時、大きな話題にな

つた実際の出来事を記載したものである。現代でいえば週刊誌的な話題や新聞の社会面の記事を集めたものといっている。そこからは「正史」からは見えてこない現実社会が見えてくる。

『醒世恒言』の編著者、馮夢龍という人物は特筆にあたいする。彼は蘇州そしゅうの裕福な家庭に生まれ育った知識人で、明から清へ王朝が交替する大転換の時代に生きた。当時、蘇州は絹の生産基地として、また国内外の物流センターとして空前の繁栄を謳歌おうかしており、馮夢龍は華やかな花柳界に遊びほうけ、プレイボーイとしても知られていた。裕福な家庭の男子はみな科挙合格をめざし、社会的地位を求めるものだが、明の体制は崩壊寸前、知識人としての才能を生かす方向が見いだせなかったのだろう。彼は結局、編纂、出版の仕事にたずさわるようになり、科挙受験用の参考書や、『醒世恒言』をはじめ『古今小説』『警世通言』などの通俗文学の書を数多く編纂した。かつて「稗史」の社会的地位は低かった。当時どれほど一般民衆の支持を得たとしても、一流の知識人としての馮夢龍の心情はいかななものだったろうか。現在、彼の手によって残された多くの通俗小説はたいへん価値の高いものである。

*腰飾り——腰帯に下げるアクセサリーで、荷包かほう、香包珮こうほうはいなどという。玉や香木に彫刻を

したものや、金糸・銀糸に珊瑚さんご、瑪瑙めのうなどの寶石をあしらったものがある。絹布に精緻せいしな刺繡ししゅうをほどこしたものは小物や香を入れた。

女流詩人、情熱に死す

時代はさかのぼり、怪尼僧、空照や静真に勝るとも劣らない女性が、唐代に実在した。それが女流詩人、魚玄機ぎょげんきである。

彼女の詩にこんな言葉がある。

易求無価宝（値段がつけられないほど高価な宝でも、手に入れようと思えばすぐ手に

入る）

難得有心郎（しかし心ある男を得るのはむずかしい）

魚玄機は、都長安ちやうあんの妓楼ぎろうの家に生まれ、幼いころから詩文を好む才女だった。両親は将来「揺錢樹ようせんじゆ」（金となる木）にしようとして詩文の家庭教師をつけ腕をみがかせた。やがて才能のある美少女玄機の名は長安に知れわたり李億りおくという素封家の妾めかけになった。最初、魚玄機は李億に愛され幸せな夫婦の生活を送ったが、正妻の李夫人りふんきは愾い気がはげしく、つね

に魚玄機につらくあつた。李億としても一家の主人としての体面が保てず、魚玄機を手放さざるをえなくなった。李億の寵愛ちようあいを失つた彼女は寄る辺なく、仏門に入る。上記の詩はそのとき創作したものだ。

僧院での暮らしはいつさいの禁欲を要求されるが、彼女は男との縁を切ることができず、名門の子弟や名士らとつきあい、次々男を替えていった。玄機の愛し方は強烈だった。相手のすべてを自分のものにしてしまわなければ、絶対にいやだったのだ。

最後には、一人の男をめぐつて、自分づきの侍女と三角関係になったことがわかり、残酷にも侍女を鞭打むちつて殺してしまつた。そして、彼女自身も侍女殺しの罪により処刑されてしまふのである。まだ二五歳であつた。

魚玄機はあまりにも自由奔放な恋愛ゆえに短く燃え尽きた情熱の詩人だった。日本の明治の文豪・森鷗外もりおうがいはその強烈な生涯に感動し、名作『魚玄機』を生み出した。

同じ唐代には、詩人・李商隱りしよういんを愛した三人の女性、宋華陽そうかよう、盧飛鸞ろひらん、盧輕鳳ろけいほうも有名である。彼女たちも尼僧だった。それぞれ李商隱を同時に愛し、密かにつきあっていたという。だが、盧飛鸞、盧輕鳳の二人は伝染病で死んでしまつた。李商隱は二人を追悼する詩をつくっている。この詩は「無題」とされているが、李商隱にはめずらしく悲痛なまでの恋心を表わし、いまでも中国では一般に親しまれ、多くの人が口ずさんでいる。

相見時難別亦離（出会うことはむずかしく、また別れることもむずかしい）

東風無力百花残（東の風に力なく、百花はしほむ）

「明月」をめぐる

中国人は、思想的には儒教で固くしばられていると思われがちだが、性愛に関しては、じつは伝統的にもこのように自由奔放なのである。ちよつと話は横道にそれるが、性交の仕方として、昔から中国では肛交（アナルセックス）がわりあいよく行われていた。体位などについても、民族によってある種のタブーがあるものだが、アナルセックスは中国ではさほどタブー視されていなかったのである。

たとえば宋代の学者、劉斧（りゅうふ）は『青瑣高議（せいさこうぎ）』なる一書を著し、このような話を載せている。

北宋時代、成都（せいと）の知事として派遣された張（ちやう）という人物の話。成都というのは中国のかなり内陸に位置する四川省（しせんしょう）の省都である。その当時、情勢が不穏で各地が戦乱に見舞われていたため、家族を連れて行くことができず、単身赴任し、任地では身の回りの世話をする侍女を数人買った。張は四年の任期中、優秀な成績をあげ、都に転勤となった。任地を

去るとき、侍女たちの母親を呼び、結婚の支度金を援助してやった。また、「ウエンボー穩婆」に女たちの体を調べさせたところ、全員処女だったという。

ウエンボー穩婆というのは産婆の意味だが、赤ん坊を取り上げるだけでなく、女性の体を検査し、発育状態や妊娠状況、健康状態などを調べることを専門とする老女である。昔、女の肉体的価値は穩婆の目利きにかかっていた。ウエンボー穩婆は後宮において重要な役割を担う。皇后や貴妃になるには穩婆による徹底した身体検査を通過しなければならない。容姿はもちろん、ふだんの所作の美しさも点数に入れられ、全裸にしたうえ髪飾りをすつかりとり、肌のつやや肉付き、乳房の発達ぐあい、陰部、こうもん肛門も調べられ、髪は脱毛がないかどうか点検され、足の裏、脇の下まで見逃さず、優良であるとの認定が下れば、後宮入りとなる。

とにかく、女性専門の身体検査のプロ、ウエンボー穩婆が保証したくらいだから、張知事が侍女たちを慰み者にしなかったのは確かだ。この話が世間に伝わるやお代官様はなんと清廉潔癖なことよと人々は感激し、評判になった。

しかし数年たち、張に仕えていたある女がふとこんな秘密を漏らした。じつは張が女色を好まないなどという話はまったく逆で、むしろ色欲が深いというのである。昼間は笑いもせず、聖人君子を装っているが、夜になると侍女たちをはべらせて代わりばんこに添い寝させていた。張はいわゆる「後庭花」が好きだったのである。表門ではなく裏門を使っ

ていたのだ。侍女たちが処女だったのも当然である。

中国の艶情小説にはアナルセックスの描写がけっこう多い。『金瓶梅』に登場する王六児は正常位が好きではなく、いつも肛交か手淫だった。彼女は馬のように四つん這いになって男に後ろを向け、陽物を肛門に入れさせた。抽送すること二〜三〇〇回、尻はゆれて音を立てる。その一方、彼女は片手で力いっぱい陰核（クリトリス）をこすり、快活な淫声をあげるのだ。

女性の臀部は、かつて「明月」「花枝」「玉樹」という言葉でたとえられた。

アナルセックスが伝統的にタブー視されていなかった中国では、この風俗が現代にも続いており、中国社会科学学院の研究員による性生活調査によると、このタイプを好む男性がかなり多いということだ。もっとも女性のほうは好まない場合が多く、男性の要求を拒むことができずに応じているというケースがほとんどである。



『花堂錦陣』（明代）「後庭宴」

第8回 動物にたとえる

中国的動物占い

「空を飛ぶものは飛行機以外、水中を泳ぐものは潜水艦以外、四つ足は机以外、何でも食べる」などと、まるでゲテモノ食いだと揶揄やゆされる中国人だが、たしかに食物に対するタブーも、セックスの行為と同様に少ない。逆に言えば、食文化がそれだけ豊かで、自然界を有効利用しているともいえる。

中国人は自分自身を想像上の動物である龍りゅうにたとえ、「龍的伝人」(龍の末裔まうえい)と称するが、人名にはよく動物が使われる。なかでも小虎シャオフ、小鷹シャオインなどがポピュラーだ。日本人の名前にトラとかタカなどはあまり使われないようだ。

また、ことわざにも動物を織り交ぜたものがある。たとえば、

狼装得再順、也変不成羊　オオカミがどんなに従順を装っても、ヒツジにはなれない

（悪人はどうつくろつてもわかるの意）

老馬蹄下不迷路　老いた馬は道に迷わない（経験があることの意）

駱駝死了也比馬大　ラクダは死んでも、骨は馬より大きい（規模が大きければ落ちぶ

れたといえども、それなりの力は残るの意）

人の身体的特徴もよく動物にたとえて表現する。たとえば、そばかすはスズメの羽の斑^{はん}点^{てん}に似ているので「雀斑^{チユエバン}」という。猩^{しやう}紅^{こう}熱^{ねつ}という高熱の出る病氣も、全身がサル（猩^{ヤシチニフオン}）の尻のように赤くなるところからつけられた病名だ。日本語で癩^{てんかん}癩^{かん}と呼ぶ病氣は、中国語で羊顛^{ヤンチンフオン}癲^{ふん}と呼ばれる。全身の震えるようすがおどろいたヒツジを連想させるからだ。ヒツジは氣の弱い生き物で、いつも集団で行動し、びっくり仰天するとぶるぶる震え、パニックにおちいると体が硬直してバタリと倒れてしまうことがある。

中国では人相見でも動物の形状を基準にしているからおもしろい。人相見の記録として有名な『神相前篇^{しんさうぜんぺん}』という書物があるが、そのなかの「相行論^{さうこうろん}」（歩き方論）という一節には、こういう解説がなされている。

歩き方がトラや龍のように、さっそうとしている人は出世する。
 歩き方が牛や亀、アヒル、ガチョウのような人は財産家になる。
 歩き方がサルのように、せせこましい人は出世できない。

体位をたとえる

動物でさまざまなことを形容したりたとえたりする傾向は、セックス表現でも同じだ。

鶏姦チーチエン……男性のホモセクシャル

牛児ニウアル（ウシのこと。中国西北部の方言。ロバや鳥ともいう）……ペニス

蛙口ワゴウ（カエルの口の意）……ペニスの先

跑馬パオマー（あばれ馬）……遺精

猫マオ……売春婦（四川省の方言。広東省では鶏ともいう）

狐狸精フーリジン（化け物ギツネの意）……尻軽女

引蜂招蝶インフオンチャオタイエ（蜂を引き、蝶を招く。花から花へと渡り歩くの意）……男の浮気

これは特殊な言葉ではなく、わりあいよく使われるものだ。しかしすでに死語となって

しまったものもある。たとえば「花鳥使」^{かちょうし}は、皇帝の夜伽^{よとぎ}のための妃を選ぶ役割のことであった。また貴族の女性が遊び相手の男を物色することを「選亀」^{せんき}（亀選^きび）と言った。また、クリトリスは、古代の性学書に「臭鼠」^{しゅうそ}と書かれている。あの小さく丸く、つるつるとしたものが古代の人の目にはかわいいネズミに見えたのだろうか。

古代の中国ではまた陰戸のことを「鶏冠」^{けいかん}（鶏のトサカ）と言っていた。そこで現代の性学者は、古代中国の未婚女性はよくオナニーをしていたのではないかと推測している。なぜかという、オナニーを何度もしていなければ、ヴァギナが鶏のトサカのようににはならないからだというのである。

おなじみ『金瓶梅』にも、生き物で男女の情愛を描いた興味深い場面がある。

淫乱な女主人公・潘金蓮^{はんきんれん}が夫・西門慶^{せいもんけい}と酒を飲みながら、片手で西門慶の一物をまさぐったが、物はぐにやりとして全然力がない。西門慶は言った。

「おまえがいつもそいつをもてあそぶから、疲れて起きあがれないのだ。少しは控えめになつてお願いしてみるんだな」

潘金蓮はまずズボンの紐^{ひも}でモノをしぼり、頬でこすり、そのあと口に含んでしばらくもてあそぶ。するとついにそそり立ち、二人は昼に引き続きベッドに入って雲雨の一夜をす

ごした。小説では詩でこのように表現している。

簾帳みすを透し玉体は雪のように白く

口は桜桃のように赤く、手はヒエのように細くやわらか

一脈の泉、その音の滴滴てきてきと

雨情ひるがえ吻合うこと色の迷迷めいめいと

翻ひるがえり覆いかぶさるさまはあたかも魚の藻もを含むよう

ゆつくり進み軽く引くのは猫が鶏をねらうよう

霊れいき亀かんすいせんが甘泉水を吐くまでは

月の女神はあえて離れない

魚、猫、鶏、亀という動物を使って、情愛の燃え上がるにまかせたはげしい快樂の情景をみごとに描いている。

古代の房中術にも動物を使って想像力をひろげた例がある。たとえば唐代の書『洞玄子』を見てみよう。この本は房中術の聖典バイブルともいわれる貴重な文献で、宋代に散逸したと

『洞玄子』の体位

- 1 叙綢繆（^{てんめん}纏綿と叙する）……親密であること。正常位
- 2 申縷縷……固く結ばれること。対面座位
- 3 曝鰓魚……日にさらされたエラ。背後位
- 4 麒麟角……^{きりん}麒麟の角。騎乗位
- 5 蚕縷綿……^{まゆ}繭の糸を巻きとる。正常位
- 6 龍宛転……とぐろを巻いた龍。正常位
- 7 魚比目……ヒラメのように目が二つ並んだ魚。^{そくがい}側臥位
- 8 鶯同心……つがいのツバメ。正常位
- 9 翡翠交……カワセミの交わり。正常位
- 10 鴛鴦合……オシドリの合。背後位
- 11 空翻蝶……舞い飛ぶ蝶。騎乗位
- 12 背飛鳧……背面飛びをするカモ。騎乗位
- 13 偃蓋松……枝を低く這わせた松。正常位
- 14 臨壇竹……祭壇に臨む竹。立交位
- 15 鸞双舞……二羽の舞う^{ほうおう}鳳凰。正常位
- 16 鳳將雛……鳳凰が雛を抱く。大女小男に向く（体位は不明）
- 17 海鷗翔……飛ぶ^{かもめ}鷗。立交位
- 18 野馬躍……はねる野生馬。正常位
- 19 驥騁足……駆ける^{しゅんめ}駿馬。正常位
- 20 馬搖蹄……あがく馬。正常位
- 21 白虎騰……飛ぶ^{びやつこ}白虎。背後位
- 22 玄蟬附……木に止まる黒いセミ。正常位
- 23 山羊対樹……木を突くヤギ。背後位
- 24 鵝鷄臨場……戦いにいどむシャモ。騎乗位
- 25 丹穴鳳遊……丹穴に戯れる鳳凰。背後位
- 26 玄溟鵬翥……海原の上を高く飛ぶ大鳥。正常位
- 27 吟猿抱樹……木につかまって鳴くサル。騎乗位
- 28 猫鼠洞穴……一つ穴に住むネコとネズミ。騎乗位
- 29 三春驢……春三月のロバ。背後位
- 30 秋狗……秋の発情期のイヌ。背後位

いわれる幻の書物だったが、近代の漢学者、葉德輝（しょうとくき）（一八六四—一九二七年）によってほぼ復元された。そこには古典的な体位が三〇種類記されているが、そのうち二六種の名称がみな動物にちなんだものである（前頁表参照）。

中国古典における性交の表現は、動物をたとえに用いることで、じつに躍動的なイメージがつくられる。日本の古典でも四十八手といわれる体位の表現に動物名が使われてはいるが、多くは「窓の月」や「時雨茶臼」しぐれちやうすのように、環境を描いて情緒を出しており、文化の違いを考えさせられる。

第9回 秘具・小道具

女性用

真生しんせいという名の男が主人公で、七人の女性と恋愛する物語、清代ポルノの艶情小説『灯月縁とうげつえん』はすでに紹介したが、その第三回に老女と娘がゆでたニンジンを小道具にする場面がある。真生の恋人のうち、崔恵娘さいけいじようは彼が花柳界で出会った最初の美人妻だった。ある日の深夜、恵娘の家で真生と愛の交歓をし、あまりの気持ちのよさに淫声をあげた。ちようどそのとき恵娘の侍女の靈芸れいうんと厨房ちゆうぼうの老婆がそれぞれ自分の部屋にいて、こっそり聞き耳を立てていた。靈芸はまさか厨房の老婆も聞いていたとは知らず、興奮したまま寝ていた。小説はこのように続く。

しばらくして靈芸は寝返りをうち、遠く外の部屋からはまだはげしく揺らす音が聞こ

えてくる。おかしいのはあの老婆がまるで雲雨にぬれているように、うんうんと一人であつてゐるようなのだ。よく聞いてみると、オメコの中をせわしなく突いたり抜いたりする音が聞こえ、最後に老婆の吟々ぎんぎんと笑う声がある。「あの老い先短い婆さんとやるような男がいるのかしら」と、靈芸はいぶかしがり、起きあがつて老婆の部屋に入り、寝台の側に立つて聞き耳を立ててみたが、蒲団は動いているが、どうも二人いるようではないので、いきなり聞いてみた。

「おばあさん、興奮して眠れないのよ。どうやったら自分でいけるのか教えてよ」

と言いながらベッドのなかに手を入れ、股間にある物をつかんだ。そのとたん、笑い崩れてしまった。ほかでもない、ゆでたニンジンなのである。長さは八寸ほど。老婆はちょうど両膝ひざのあいだに手を入れ、ニンジン握にぎつて陰門に突つ込み、忙しく動かしている最中だった。ちようど気持ちよくなつてきたところで靈芸に見つかり、思わず笑つて言つた。

「いたずらっ子め。言いがかりをつけおつて。眠れないのなら、この老婆といっしょにやるかい。あの部屋からうれしそうな声を聞いたらがまんもできないだろう。さあそこに寝てごらん。気持ちよくしてやろうじゃないか。あとでわしにもゆつくりとやつておくれよ」

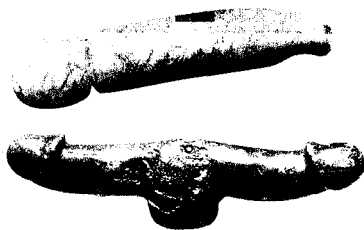
霊芸は返事もせず、さっさと蒲団にもぐりこみ、両足を大きくひろげた。老婆は例のゆでニンジンを挿入し、小刻みに一〇〇〇回も突くと、霊芸はたまらなくなり、叫んだ。「ああ、たまらない、ニンジンで死にそうよ」

老婆は彼女がエスカレートしてくると手がだるくなるのもかまわず、さらにはげしくぬき差しした。

小説にこのような描写があることから見て、中国では昔、女性が道具を使ってオナニーをしていたことがわかる。

ほかにも自慰の小道具には銅や石、木などでつくられたものがあり、男根そっくりにつくってあった。俗に「角先生」(ミスター角)と呼ばれたが、なかには両端に精巧な亀頭かめこうがついて、全体が弓なりになっているものがあり、二人の女性が同時に使ったもののようなものだ。

明代の小説『株林野史』しゅりんやしの第七回にも「広東勝」カントンぽうという自慰の小道具が出ている。あまり詳しく触れられていないが、長さは四、五寸で、陽物の形をし、使う前に湯にひたして温めると



(上) 宋代、玉製
(下) 宋代、玉製(二人用)

膨張して堅くなる。材料や作り方は不明である。

角先生は艶情小説によく登場するが、考古学的な出土文物にも実物がある。最古のものは漢代の中山靖王、劉勝の墓から出土した。もつとも角先生以外、文献や小説作品には女子の自慰の道具の描写はほとんどない。広東勝のように名前だけ残されていて、実物がわからないものが多い。また肛門の自慰の道具に関しても記述は発見されていない。

女性の自慰の小道具は希少価値があるが、中国にはたいへんめずらしい家具がある。

「美人椅^{メイレンイ}」と呼ばれる木製のひじかけ椅子である。見た

目はふつうの椅子と違いはない。しかし両端のひじかけの幅がふつうより広く、長さも長い。女性が座ってひじかけには足をかける。すると太股が左右に大きく開き、陰部がすっかり見えるようになる。性交に用いてよし、觀賞して楽しむにもよし、セックスの楽しみに用いる便利な家具である。美人椅^{メイレンイ}は少なくとも数百年の歴史があると思われるが、実物は希少である。その一部が上海の中国古代性文化博物館に収蔵されている。

また女性用の道具には「懸玉環^{けんぎょくかん}」というリング状の



美人椅（足乗せに工夫がある）

秘具がある。性交のとき陰戸につけるといのだが、どのような効果があるのか不明である。

男性用

男性用の小道具は、自慰のものは文献上の記録も実物もまったくない。おもしろいのは性交の小道具はたった一つの実物も発見されていないのに、史料や小説には頻繁に記述されていることである。種類も女性用のものよりずっと多い。惜しいことに、昔の人はその使用の過程は記述するが、使った感覚や、素材やつくり方などを記録していないので、解けない謎がたくさん残されている。

男性用の性交の小道具は六種のものがよく知られている。「銀托子」^{ぎんたくし}「白綾帶子」^{はくりようたいし}「相思套」^{そうし}「硫黄圈」^{りゅうおうけん}「封臍膏」^{ふうせいこう}「勉鈴」^{べんりん}の六種である。

「銀托子」はその名称でわかるように銀製であろう。しかし考証家によっては銀は使にくいので、じつは玉製ではないかとされている。形は輪になっていて、性交のとき陰茎の根につける。これを用いることで陰茎は長さ太さが増し、血流が増えて圧力が高くなり、射精を遅らせるということだ。銀托子には女性のクリトリスを刺激する効果もあり、女性の快感を増す。

「白綾帶子」は一種のテープで、性交を持続させ陰茎の長さを増やすというものだ。使用するには一端を陰茎の根に結び、もう一端を腰に結ぶ。白綾の帯には媚薬びやくがしこんであり、陰茎にしみて持続力と強度を増す。

『金瓶梅』には銀托子と白綾帶子がよく出てくる。たとえば第七三回にこういう記述がある。ある日、潘金蓮はんきんれんが酒を飲んだあと気分が盛り上がって、西門慶せいもんけいを誘う。が、西門慶は別の女性と寝たばかりで、疲れていた。だが潘金蓮にだだをこねられてむげにもできず、言うことを聞いた。小説はこう描写している。

西門慶は潘金蓮に聞いた。

「あの白綾帶子はどこにやった」

潘金蓮は「蒲団ふとんの下じゃないの」と言いながら取り出して西門慶に見せ、そのまま彼の陰茎の根もとを縛り、もう一方を腰にきつく縛った。潘金蓮が陰茎をいじったりなめたりすると、それは青筋を浮き上がらせて勃起ぼっきし、鉄のように堅くなり、さきほどより長くなり七寸あまりになった。潘金蓮は西門慶にまたがり、太くたくましい亀頭を自分の陰戸にあてがい、西門慶の首に手をまわし、彼女の腰を抱かせた。潘金蓮が腰を左右に揺らすと、あの大きく太い陰茎が徐々に陰戸の中に入っていく。潘金蓮は言った。

「あなた、触ってみて。あなたの大物がすっかり入ったわ。私の下のほうもいっぱいよ。気持ちよくない」

西門慶が触つてみると、たしかに根もとまですっかり入っており、二つのこうがん辜丸が残されているだけである。心こいやく言いがたく気持ちよかった。潘金蓮は続けて言った。「やっぱり夏がいいわね。冬は寒いわ。服を脱いで灯火の下でやれないわ。あなた、この帯は銀托子よりよくつてよ。銀托子はあそこに当たると死ぬほど痛いもの。ほら、帯はいいでしょう。あれが太くなつて、もうおなかを突き抜けそうよ」

小説は続いて二人の濡れ場を描写しているが、上に引用したなかで二つのことがわかる。一つは白綾帯子に男性の性交能力を高める効果があるうえに、性交しやすくする。もう一つの銀托子は女性側に痛みがあつて、潘金蓮には氣に入られていないことである。実際、『金瓶梅』のなかで、銀托子に言及するのは潘金蓮



『金瓶梅』第七三回、白綾帯子をためす

一人にかぎらず、数人の女性が性交するとき、西門慶にはずしてくれと頼んでいる。理由はみな陰戸に当たって痛いからだというのだ。しかし彼女たちのもっともな頼みを西門慶はほとんど断っている。どんな道具を使うにしても、男女双方の合意がなければ価値がない。銀托子も同じである。しかし、逆にこう言うこともできる。

銀托子は男性にとつてかなり大きな満足と快感が得られたのではないか。だから女性の要求を断つたのである。

続いてあと四種の道具について述べよう。

「相思套」は外に突起がついたコンドームに似たようなものである。突起が陰道を刺激し、女性の快感を増す。また、陰茎は感度が落ちるので、射精を遅らせる。

「硫黄圈」は亀頭につけて直径を大きくするリングである。陰道を押しひろげて、亀頭の刺激が小さくなるので性交時間が長く続く。名称から推して、硫黄でつくられたらしい。硫黄は摩擦で熱を帯び、陰道を刺激することができるようである。

「封臍膏」はじつは道具ではなく、塗り薬の一種である。性交の前にへそに貼ると精力増強になる。精力剤ではなく秘具に入れたのは、封臍膏だけで使われることがなく、ほかの器具といっしょに使って初めて効果があるからである。明代の学者、陳希夷ちんきいの『房術玄機中萃纂要』きやうしゅんすいさんようには、薬の成分として陽起石ようきせき、蛇床だじょう、香附子かうぶし、韭子いしが各一錢（一・六グラ

ム)、土狗七つ、穀なしの大風子五分(だいふうし)(○・八グラム)、麝香五分(じやこう)、硫黄五分があげられ、これらを細かく砕いて丸薬にし、油紙にぬって貼りつけ、絹の帯で縛る。話によると一〇人の女性と続けても漏らさないという。薬効を消すには冷水を一口飲む。

最強の道具、ミャンマーの鈴

「勉鈴」は「緬鈴」(べんりん)ともいった。この道具は全六種の道具のうち最強で、それだけに論議も大きい。勉鈴とは何か、どう使うのか、いつから流行したのか……という問題に関して古今を通じて論議されているがまだ明らかになっていない。現在、性学界では、男性が性交に用いるという意見と、女性の自慰の道具だという説、女性の性交の道具だという説の三つに分かれている。女性の自慰の道具だとする説は、清代の有名な学者、趙翼(ちようよく)の雑記『簷曝雜記』(えんぱくざつぎ)の勉鈴に関する記述にもとづいている。それによると趙翼はそれを見ており、このように記述しているのだ。

緬甸(べんてん)(現在のミャンマー)というところに淫性のある鳥があり、その鳥の精液は人間の性交の快楽の助けになる。鳥が精液を石に残したら、ごく薄い銅片でそれを包んで鈴のような形につくる。それを緬(勉)鈴という。一度故郷に帰ったとき、ある人が緬鈴

を売りにきた。鈴は桂円けいえん（龍眼）くらいで、接いだところがなく、本物かどうか疑った。しかし手で握るとわずかに熱を持ち、振動し、音が鳴りだした。緬鈴を机の上に置くとやんでしまう。まことにめずらしいものだ。私には使い道がないので、売り主に返してしまった。

趙翼の前にも明代の書籍『演載記』てんさいき（楊慎ようしん著）に似たような内容の記述があり、同じく明の『南中紀聞』なんちゅうきぶん（包汝楫ほうじよしゅう著）にも見られる。ただ昔の本の記述は非科学的なので、こういう鳥なのか特定できない。

こうした文献の記述から解釈すると、勉鈴は女性用の自慰の道具と考えられる。勉鈴を陰道に入れ、熱で振動すると快感が得られるはずだ。かつて駐日オランダ大使をつとめた中国文化の専門家、R・H・ファン・フリーックの名著『古代中国の性生活』（松平い子訳、せりか書房、一九八八年）も同じ視点に立っている。しかしフリーックは、勉鈴に入れたのは鳥の精液ではなく水銀の粒のようなものではないかと考察している。日本の「琳りんの玉たま」の原型ではないかとある。「琳の玉」は「張り形」に類する女性の自慰の器具である。薄い銀の板でつくった中空の球体で、ふつうは二つ一組で用いる。一つには水銀の粒が入っており、もう一つには金属のリードが入っていて、振動したりぶつかったりする

と震えて音がする。それらを腔ちゆうに入れ、薄紙で口をふさぐ。太股かどももを動かしたり体を揺らしたりすると玉が動いて音をたて、性的快感をもたらす。

明代の艶情小説『繡榻野史しゅうたのし』『杏花天きようかてん』にも、女性が勉鈴を使って自慰をする場面が描かれている。たとえば『杏花天』に登場する名妓めいぎ、雪妙娘せつみょうじやうは勉鈴をたいへん気に入って、「得意丸」と称してつねに手放さなかった。得意丸を陰戸に入れるとくるくると動きまわり、ころころと鳴り、全身から力が抜けてしまふと描写している。

勉鈴には民間にもいくつかの伝承があり、たとえば雲南省には「鵲不停じやくふてい」という奇妙な形の木から勉鈴をつくるという話が伝えられている。その木にはふつうの鳥はとまらないうという。ただ鵲がくという鳥がこの木に巣をつくって性交する。その精液が漏れて木につくとそこにこぶができる。現地の人はそのこぶをとって玉をつくる。玉は人の肌に近づくとひとりではねだし、女性の陰戸に入れるとはげしくはねるという。

『金瓶梅』の第一六回には勉鈴の描写がある。この部分は女性の性交の道具だったことの根拠となる。西門慶が淫婦、李瓶児りへいじの家に一晚泊まって帰ってきて、潘金蓮が着替えを手伝ったときのことである。

潘金蓮が西門慶の白綾しらあやのあわせを脱がせると、袖そでからころんと何かが落ちた。大きさ

は丸くらしい。手にとってみるとずっしり重く、しばらく見たがどういふ物かわからず、聞いた。

「ねえ、これは何なの。持っていたら重くて手がしびれてしまったわ」

西門慶は笑って言った。

「君は知らないのかい。勉鈴というのだよ。緬甸ミャンマーでつくられるもので値段は銀四、五両もする高価なものだ」

「何に使うの」

「それを炉（膛のこと）に入れて、事をするときすばらしいのだ」

「じゃ、李瓶児とこれを使ったというの」

西門慶が昨夜の情事を一通り話して聞かせると、潘金蓮はさっそく淫心を起こし、急いで門を閉め、昼間から衣を解いて快樂におぼれた。

しかし、勉鈴が男性の性交の小道具だという根拠もある。『瀛涯勝覧』えいがいしやうらん（馬歡ばかん著）にその記述がある。著者の馬歡は、明代、アラビアまで数度の航海を行った冒険家、鄭和ていわの通訳をした人物で、鄭和に随行して三度大航海の旅に出ている。『瀛涯勝覧』は彼が海外で実際に見聞したためずらしい事物を記録した本で、ちまたの噂話を集めた雑文集のたぐいと

は大いに違う。彼が緬甸ミャンマーに行ったときの記述としてこういうものがある。

「男子は二十数歳になると茎物の皮をニラほどの細いナイフで切り、錫すずの玉をその中に十数個植え込み、薬で閉じる。傷口が治るまで外出はしない。茎物に入れる錫の玉はブドウの粒ほどの大きさで、植え込み専門の店がある。国王や有力者、金持ち金は金の玉を植える。玉の中には砂粒が入っているので、歩くときサラサラと美しい音がする。玉を植えない男子は下等と見られる。たいへんめずらしいことだ」

また、元代の外交官、周致中しゅうちちゅうの『異域志いいきし』や、明の沈徳符しんてくふの『万曆野獲編ばんれきやかくへん』にも同じような内容の見聞が見られる。

右の記述によれば、ミャンマーの勉強は桂円や鞆丸ほどの大きさがなく、男性性器に植え込む玉とされている。性学者の調査によると、このような習慣はすでにミャンマーではなくなっているという。しかし、台湾では復活しており、「入珠ルーチュー」という名称で呼ばれている。

一九九〇年代のはじめ、台湾にこんな報道があった。

結婚して二二年になり二男一女に恵まれた男性がいた。彼は性的にさらに強力になりたいたいと思い、妻に内緒で性器の外皮に磁器の玉を植えた。しかし事は思うようにならず、性交のたびに妻が痛みを訴える。妻は夫に玉を除去してくれるように頼んだが、聞き入れら

れず、最後は離婚訴訟を起こし、勝訴した……。

ここで総合的に見て仮の結論を出すとするれば、勉鈴と呼ばれる器具は、たしかにあったとも言えるし、なかったとも言える。しかし勉鈴の名声はすでにその存在を超えている。というのは古代中国で男女ともに人気のあった秘具にはかならず勉鈴という名が冠せられていたからである。

*R・H・ファン・フリーック——1910～1967年。オランダ生まれ。幼少時代を蘭領東インド（インドネシア）で過ごす。ライデン大学で日本と中国の文学を専攻し、ユトレヒト大学でも学ぶ。1935年から駐日オランダ大使館員として来日。戦後1965年には駐日大使として再来日。日本語、中国語、チベット語、サンスクリット語、イタリア語、マライ語、アラビア語など十数カ国語を駆使。中国文化に精通し高羅佩という中国名を持つ。『琴道』『秘戯圖考』など学術的研究の実績はもとより、中国の古典小説の手法を踏まえた創作探偵小説『デュー判事』シリーズを著し、十余カ国語に翻訳されている。

*鄭和——1371～1435年。航海家。もとの姓を馬というイスラム教徒。明の永楽帝の時代、宦官^{かんがえ}として仕える。祖父、父ともメッカに巡礼し、アラビアの事情に精通し、7回にわたり船団を率いてアラビア、アフリカへ航海する。

煬帝の御女車

最後に、中国史上、淫蕩で名をなした隋の煬帝の「三種の神器」を紹介しよう。

第一が「御女車」である。これは何稠かちゆうという人物が献上した品物で、名称からわかるように女子を御する車である。車の中に女を入れると、中の仕掛けが自動的に動いて女の手足を縛り、動けないようにするのである。もちろん皇帝が使うものなので、内装は宮殿のように豪華絢爛けんらんにつくられ、車の外には鈴がつけられ動くときは涼やかな音が鳴って、中で発せられる声を消す。煬帝はこの車がたいへん気に入り、言った。

「この車があればどんなに遠くまで出かけるとしても、途中で無聊ぶりようをかこつことはないだろう」

その後、何稠は「任意車にんいしや」なるものも発明し、献上した。車の中で女を抱いて寝ると自動的に振動するというものだ。煬帝は至高の宝を得たようによろこび、何稠に金銀の褒美をとらせたという。これが第二である。

第三が「烏銅鏡うどうきやう」である。煬帝は宮廷画家に命じて、数十枚の春宮画を描かせ、寝台の周囲の壁に掛けさせた。それを見ながら貴妃たちと楽しむのである。そこへある役人が高さ五尺、幅三尺の「烏銅鏡」を数十枚献上し、壁や天井に貼るように進言した。美女をもてあそびながらそれを鏡に映して見ることができるので、煬帝は大よろこびし、言った。

「絵がどんなにうまく描けても、絵は絵にすぎない。しかし鏡は真実の動きを映す。この価値は絵の何万倍になろう」

烏銅鏡を献上した役人はもちろん、山ほどの報奨を賜った。

煬帝の性生活を題材にした明の小説『隋煬帝艷史』には「御女車」を得た煬帝が、宮中の童女、月寶げつひんを車に乗せてためした情景が描かれている。車が来る前日の晩、月寶をためそうとしたところ、泣き叫んで言うことをきかなかったので、この車でためしてやろうという考えになった。

翌日、車が献上されると、煬帝は夜まで待てず、すぐに後宮に持っていく、月寶に言った。

「この車は何稠が献上したもので、きれいにできている。おまえといっしょに乗って遊びに行こう」

何も知らない月寶は乗り込んだ。煬帝はすぐに臣下に言つて車を出させた。車が押し出されるのと同時に金の鉤かぎ、玉の軸が出てきて月寶の手足を捕らえて動けないようにしてしまった。

「これはおもしろい」と、煬帝は笑つて言つた。「これで飛んで逃げることもできない」

と、月賓の衣をほどきはじめた。月賓は打ちはらおうとしたが、手足が動かせず、あわてて叫んだ。

「やめて、殺される」

煬帝は月賓が恐ろしがつているのを見て興奮し、衣を脱がせると思うぞんぶん花をまさぐり蕊を散らした。月賓は痛みで息もつげず、全身に玉のような汗をかき、息も絶え絶えに叫んだ。

「お許しください」

「昨夜のことがあってだれが哀れむと思うのか」

月賓は泣き声をあげながらも笑顔をつくり、懇願するが、煬帝はそれを聞かず、ひたすら女の香肌を楽しんだ。月賓は憂いを含んだ笑顔をつくり、その苦しみの光景はまるで雨に打たれる梨の花のように可憐にして無力、魅力は昨夜の何倍も増した。

第10回 小さな足と粽

伝統のフェティシズム・足

日本で一般に粽ちまきというと、五月の端午の節句に食べるササの葉にくるまれた餅菓子だが、中国で最もよく知られている粽ちまきというのは、しょうゆなどで味付けした糯米もちをササの葉に三角形に包み、紐ひもでぐるぐるしばり、蒸しあげたものをいう。具には落花生やブタ肉、シイタケなどが入れられ、一つか二つ食べれば昼食にちょうどいいくらいのポリウムがある。町の食品店でも売られるが、家庭でつくることもあり、きれいな三角形にするのはけっこうむずかしい。

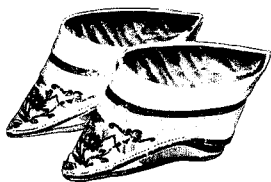
ところで、この粽の形を見ればたいいの中国人ならば、すぐ女性の足を連想するだろう。日本人には想像もつかないだろうが、昔の中国人女性の足は、大きさも形も、さらに触った感触まで粽にそっくりだった。

一九四九年、中華人民共和国成立以後、政府によって纏足てんそくの弊風へいふうはきびしく取り締まられ、九〇年代後半になってから、中国でもついに纏足女性の姿は見られなくなってきたが、ついこのあいだまで、小さな足で歩く老婦人たちをどの街でもよく見かけたものだ。それほど、かつては女性の足を小さくすることが広く行われていたのである。

三十数年前、私が小さかったころ、ある老婦人の纏足の素足を見てしまったことがある。友達の一人を遊びに誘おうと、その子の家に行ったときのことだった。友達を呼ぶことしか考えていなかった私は、ノックもせずにドアを開け、勝手に部屋の中に入った。すると友達はおらず、彼のおばあさんが足を洗っていたのである。

私はギョツとしてしまった。

そのおばあさんが纏足の小さな足でヨチヨチ歩く姿はふだんからよく見慣れていたが、素足のところなど見たことがなかった。靴を脱ぎ、布をはずしたおばあさんの足は、まるできつく絞ったタオルのようだったのだ。足全体が信じられないほど小さく縮められ、甲の部分が不自然に高く変形し、指は親指をのぞく四本が足の裏に曲げこまれ、ほとんど張りついているのである。とうてい人の足とは思えない肉塊は、見るにしのびなかった。



纏足靴

びつくりしている私を気づかってか、おばあさんは「いいんだよ」とやさしく私を許してくれた。

友人のおばあさんのように足を小さくするには、骨のやわらかい三、四歳の小さなころにせしゅつ施術しなければならぬ。包帯状の布でぎりぎり縛りあげ、何十日もかけてつくりあげる。もちろん、親が強制的に自分の子供に対して行うものである。いまなら児童虐待にあたるひどい行為だが、昔は女の子ならば当然させなければならぬことだった。纏足をしないほうが親のつとめを果たしていきなれないのかわからなかっただろう。

纏足とは、一言でいえば、人類史上世界のどの国でも行われたことのないきわめて特殊な性風俗である。現代社会の視点で見れば、あまりにも残酷な弊風だった。このような風習が続いたのにはそれなりの理由がある。

佳人は奥の間で金蓮きんれんをしぼる。才郎来たりてうれしさ隠せず

お嬢さん、あなたの金蓮はなんて小さいのか

冬に採ったタケノコのように

あるいは五月端午の三角粽のように。ほんのり甘い香り

それとも六月の仏手柑^{*ふつしゅがん}、愛らしくもあり小さくもあり

佳人は聞いて頬を染め

花をむさぼり色を愛するいやしさよ

今夜はあなたと枕を並べ、小さき金蓮はくちびるに

どんなに香るかどんなに甘いのか、採られたタケノコためしてごらん

これは清代、蘇州^{そしゅう}で流行した端唄^{はうた}である。仲むつまじい男女の恋のささやきを歌にしたものだ。歌詞のなかで「金蓮」というのは纏足した小さい足の美称である。足の形状を粽やタケノコにたとえ、香るとか甘いとか、口へ運ぶとか、遊び方を示しているが、字面をそのまま読んでも意味不明だろう。しかし、金蓮を女性の乳房とか性器に置き換えてみれば、わかりやすくなる。

纏足はふつうは「小脚」^{シヤオチヤオ}（小足）といい、美しい表現を用いるときは「金蓮」という。

しかも最高に美しい纏足は「三寸金蓮」^{さんすんきんれん}という美称が用いられた。つまり、美しい足は長さ三寸（約九センチ）が理想だったのだ。金蓮という美称はある故事にもとづいている。昔、南唐^{なんとう}という国（九三七〜九七五年）の李後主^{りこうしゅ}という王が、寵愛^{ちようあい}する舞姫、宵娘^{ようじょう}のために黄金で蓮の花をつくらせ、その上で舞わせたというのだ。舞姫はちょうどバレリーナ

のようにつま先だつて軽やかに舞を舞つたのだろう。それがほんとうだとしても、なぜ蓮なのか。蓮は古来より女性生殖器を暗喩する意匠であつた。

中国の民間伝統工芸に「剪纸」と呼ばれる切り絵細工がある。中国旅行のお土産で買った人もいるだろう。巧みな技でいろいろな物語や吉祥のシンボルを切り抜き、かつては窓や門などに貼り、装飾にした。そのなかに「魚戲蓮」（蓮の花に戯れる魚）とか、「鳥穿蓮」（鳥が蓮の花をつつく）、「蓮生貴子」（蓮の花から子供が生まれる）などといったシンボリックなパターンの図があるが、これらの蓮はみな女性性を暗に示している。

蓮の花といえ、仏教との関連が考えられるが、中国で蓮と女性が結びつくのも仏教文化の影響があることはまちがいない。仏教で蓮の花は永遠の涅槃、女性の胎内をシンボライズするものである。

中国の仏典『華嚴經探玄記』では仏教徒が身につけてはいけない「四徳」を蓮の花にたとえ、蓮のようなくは「香」「浄」「柔軟」「可愛」であれと説いている。また、セックスの指導書『仏教秘密相經』には「我が身の金剛杵を蓮花にあてがい……」としている。もちろん「金剛杵」がペニスで、蓮花がヴァギナであることは明白だ。



魚戲蓮（剪纸）

蓮花が胎内へ続く女性性器だということはわかったが、なぜ纏足と結びつくのだろうか。それは緊束きんそくした足が第二の性器だったからにほかならない。

＊仏手柑——中国南方の柑橘類で、香りの強い白い花をつける。春に結実する黄色の果実はいく筋にも裂け、握った手のようになる。観賞用に供される。

足の遊び、足の楽しみ

足を緊束することで女性性器がよくなるという説がある。つまり小さい足の女性は、立つときにはいつもつま先立ちになるので、自然と太股かとももや腰の筋肉に力が入り、鍛えられる。だからセックスのとき陰部の締めまりがよく、まるで処女のような感触になるというのだ。

いわば纏足は第二の性器としてつくられたものなのだ。だから昔、女性は他人に絶対素足を見せることはなかった。足を見せることは性器を見せることと同じくらい恥だったからである。あのときのおばあさんも、私が子供だったから許してくれたのだろう。

纏足はかなり嗜好度しこうどの高いフェティシズムに属する性風俗である。纏足の快楽については、昔から楽しみ方を解説した専門書があった。清代の『香蓮品藻こうれんひんそう』では、「金蓮」に「三貴」なる三つの基準を設けて、そのよしあしを評定している。その三つとは、

肥 軟 秀

最初の「肥」は、「肥是腴潤」ひぜ ゆじゆんすなわち「肉づきがよくすべすべしている」ことを意味する。次の「軟」は「軟則柔媚」なんそくじゆうけんすなわち「やわらかく美しい」こと。最後の「秀」は「秀方都雅」しゅうほうとがで、すなわち「きりりとして品がいい」ことである。

「肥」と「軟」については外見なので、つくることができるが、「秀」は天性のものだから得難いとしている。

またこの本には、纏足をめぐる場面設定も提示している。

掌上	手の上
肩上	肩の上
秋千	ブランコの上
被中	布団の中
灯中	灯のもと
雪中	雪のなか
簾下	カーテンの下

屏下 ついたての下

籬下 まがきの下

「被中」がどういふ場面なのかはわかりやすいと思うが、「掌上」「肩上」はどうだろうか。あえて触れないでおきたい。「灯中」と「雪中」は寒暖の景色の違いがあつておもしろい。「簾下」「屏下」「籬下」はすその下のほうにチラリと見える色気が感じられる。

纏足はさすがに歴史が長いだけあつて、「玩蓮」^{がんれん}すなわち楽しみ方、遊び方がずいぶん昔からきわめられていた。そのテクニクの数々を文献から集めて整理してみた。

耳の楽しみ

聴 足音を聞く

目の楽しみ

矚 遠くから見る

窺 盗み見る

看 じつと見る

視 観察する

鼻の楽しみ

嗅 鼻を素足にあててかぐ

吸 鼻の穴につま先を突っ込んで吸い込むようにかぐ

口の楽しみ

吮 つま先を吸う

吞 すっかり口に含む

食 指のあいだに食べ物をはさみ、

それを食べる

舐 なめる

噛 軽いかむ

咬 強いかむ

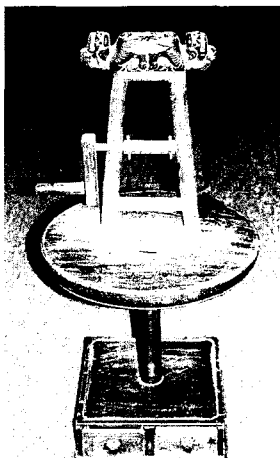
テクニク（手以外）

挟 脇の下で足を強く挟む

擁 胸に足を抱きしめる

搦 両足を肩に乗せる

挑 片足を肩に乗せる



足乗せ台。棒には縛り布を巻く

暖 冷えた足を股間で暖める

提 彼女の足を自分の足に乗せて持ち上げる

テクニック（手）

握 握る

捏 つねる

搔 足の裏をかく

捻 つまむ

捉 強く握る

撈 布団の上から捕まえる

挙 いきなり捕らえて上へあげる

挖 ほじる（足の裏に折り曲げられている指のあいだに

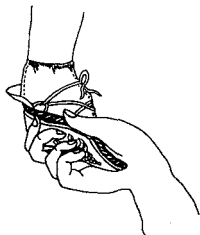
手の指を入れたり、彼女のつま先で自分の耳をほじ

らせたりする）

脱 脱がせる（靴、靴下を脱がせ、縛り布をほどき素足

にすること）

纏 着せる（上記の逆）



握る



靴をとる

洗 洗ってあげる

剪 切る（爪を切ったり魚の目をとったりすること）

懸 縛り布でつるす

打 棒でたたく

扶 彼女を支えて歩く

拉 引く（足を人力車の柄に見立てて引っ張る）

玩 もてあそぶ（自分の手の代わりに彼女の足でオナニーをする）

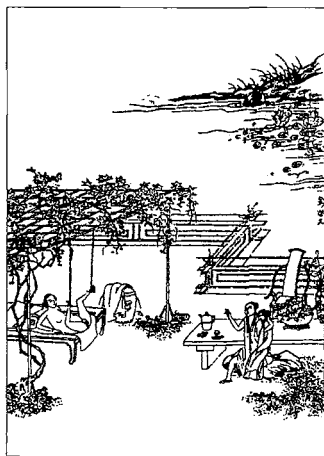
たかが足とは言えないほど豊かな遊戯がある。さて、「懸」というテクニックが出てきたが、これは足を縛っている長い布をロープのようにして足を縛り、上からつるして遊ぶ遊戯である。『金瓶梅』の第二七回に、まさにこの場面がある。あらすじを紹介しておく。

真夏のこと、葉の茂る葡萄棚ぶどうの下で、西門慶と潘金蓮が涼みながら酒を飲んでいたが、酔った潘金蓮は、眠くなってきたと、服をすっかり脱ぎ捨て、裸で横たわる。それを見て西門慶も裸になり、彼女の下半身を足の指でまさぐっていたが、小さな靴をはいた潘

金蓮の足を見て一興を思いつき、靴と靴下を脱がせ、縛り布をするする解き、その布で足を縛って葡萄棚につるしあげた。素っ裸の彼女は両足を高々とつるされて、何もかも丸見えである。だが潘金蓮はぐっすり寝入っており、目を覚まさない。西門慶は氷の鉢からスモモを取り、彼女の花蕊かすいめがけてポンポン投げ入れた。これは「肉壺つばの投げ入れ」という遊びである。そのうちくたびれた西門慶はしばらく椅子に座ってうたた寝をするが、また目を覚ますと今度は、花蕊にスモモを次々詰め込みはじめた。すでに二時間以上足をつるされていた潘金蓮は、失神してしまう。

『金瓶梅』には纏足靴の遊びも描写されている。第六回、淫婦、潘金蓮が西門慶といっしょになりたい一心で、夫の武大郎ふだいろうを毒殺し、病死ということで葬式を出し、喪中に嬉々ききとして西門慶と密会する場面である。

西門慶は、部屋びやうの壁に琵琶びわがかかっているのに気づき、一曲やってくれないか



『金瓶梅』第二七回、潘金蓮、葡萄棚で酔う

と潘金蓮に注文する。

「昼夜のあとの乱れ髪……」

と、潘金蓮が弦をつまびきながら、歌うその声のなまめかしさに西門慶は身震い。ひとと潘金蓮を抱きしめ、雪のように白いうなじに接吻を浴びせる。そして小さな足をおおうかわいいう絹靴を脱がせると、その中に杯を入れ、酒をそそいでぐつと飲み干した。

この遊びは鞋杯あいはいという。靴が杯の代わりになるということは、いかに靴が小さいか、またいかに足が小さいかを証明しているようなものである。潘金蓮はもちろん大よろこびだ。男にとつての鞋杯遊びのおもしろさはまた格別であろう。なにしろ第二の性器たる纏足を包んだ小靴は、女陰を覆うパンティのように性的刺激を与えるものだ。

前述したように、昔の中国人女性にとって最も恥ずかしいところは足だった。『金瓶梅』第二七回に出てきた「懸」の話でも、潘金蓮は素っ裸になって陰部までさらしても靴は脱がなかった。当時は性器よりも足のほうがはるかに隠蔽性いんぺいせいを持った秘



靴型の酒杯

部だったのだ。封建時代、犯罪者には鞭打ちなど残酷な刑罰が処せられたが、女性の犯罪者には人前で裸足になるという罰があった。裸足で法廷に立たされ、人々の見せ物にされ、靴が町中で人から人へと渡された。女性はたとえ無実の罪が認められて釈放されたとしても、一度世間の恥さらしにされてしまった以上、生きていくことができず、みずから命を断ったという。『櫟社瑣記』^{れきしやさき}には、明の嘉靖年間^{かせい}（一五二二―一五六六年）、浙江省の総督、胡宗憲^{こそうげん}が罪に問われて獄につながれ、彼の妻と娘が同罪の嫌疑で調べられたおり、このような恥辱を受けたという記録がある。

また現代中国語には「破鞋」^{ポーション}（破れ靴）という言葉がある。これは浮気性の女をさすもので、女性の不行状を非難するときに使う。これも纏足の靴に由来するものだろう。

第11回 宦官の話

榮耀榮華への裏道

封建時代の中国で、榮耀榮華えいようが欲しければ、役人になって出世し、高位高官になることだった。いったん、高級官僚の位につけば、金も物も向こうから懐に入ってくる。こんな夢のような生活を獲得するには、小さいときから四書五経と呼ばれる儒学の経典を丸暗記し、八股文はつこぶんと言われる特殊な文章を書く訓練をし、数々の試験にパスしなければならない。それが科挙と呼ばれる制度である。試験は少年時代に受験する「童試どうし」から、地方試験である「郷試きやうし」、最後は都の紫禁城で行われる、皇帝ご臨席の試験「殿試てんし」まで全部通らなければならぬ。科挙合格に至るまでは莫大な資金と時間を費やさなければならなかった。科挙の試験地獄がどれほど過酷なものだったのかは、清代しんの小説『儒林外史じゆりんがいし』によく描かれている。この小説は科挙合格をめざさずさまざまな知識人たちの悲喜こもごもの人生をつ

づっているのだが、たとえば人生の大半を受験に費やし、五四歳の高齢にして初めて予備試験に合格した男がうれしさのあまり精神錯乱きよくらんしてしまう話は、当時としては笑うに笑えない切実な話だった。

世の中には表もあれば裏もある。立身出世して栄耀栄華を手に入れるためには、勉強などしなくても、裏道が用意されているのだ。方法はいたってかんたん。自分の生殖器をスッパリ切ってしまえばいいのである。纏足同様、去勢手術もたいへんな苦しみをとまなうが、権力をものにするためにはずっと近道だ。

男としての生殖機能を失わせ、後宮で働く男たちは宦官かんがんと呼ばれる。後宮には皇后をはじめ、多くの貴妃、女官ら数千人の女性たちがいるほか、下は厠かわやの掃除から、上は皇帝の側仕そばえまで数百人も宦官が働いていた。広大な紫禁城の後宮で、本物の男は皇帝ただ一人である。

後宮に仕える男は去勢しなければならぬ。去勢して初めて皇帝に重用されると言い換えることもできよう。その根拠はいったい何なのだろうか。

第一に、選りすぐりの美人ばかりを集めた後宮だから、ふつうの男では色欲の誘惑に耐えられないという理由がある。また、一方では、皇帝以外の男をめぐって女官たちが争ったりすることのないようにという考え方もあるだろう。しかし、一〇世紀、南漢国なんかんこくの君主

が言つた説がいちばん妥当ではないだろうか。彼はこう言つた。

「人はみな結婚し家庭を持つものである。皇帝に仕える者に家庭があつたとしたら、みな自分の子孫のことを優先的に考え、すべてを捨てて君主に仕えることをしないだろう。生殖機能を失えば、みな君主のことしか考えないはずである。君主のために日夜身を粉にして奉仕する宦官こそが、君主にとって最も安心して信頼できる臣下になるのである」

つまり、宦官は家畜化された人間なのである。

先ほど生殖器切断手術が苦痛をとまうと述べたが、またたいへん危険な手術でもあつた。具体的にどのような手術を施したのだろうか。おもしろいことに、中国には去勢手術についての詳しい記述がほとんど見あたらない。しかし、幸いにも、一九世紀半ば、北京を取材したステントというイギリス人が、手術の現場を目撃し、細かく記録している。一人のイギリス人の好奇の目があつたおかげで、我々はいへん貴重な事実を知ることができるのである。

それによると手術を受ける者は、下腹部と腹の上部を包帯でかたく縛られ、陽物を胡椒入りの湯で洗われる。ここでほんとうに後悔しないかどうか、最後に意思確認をする。それでもよいとなれば「刀子匠タオツチヤン」と呼ばれる執刀人が鎌状かまの鋭い刃物で、陽根と陰囊いんのうを勢よく切り落とす。そのあと尿道に栓を詰め、止血される。これより三日間は水分はいっさ

い飲んでではない。激痛とかわきに苦しむこと三日間。尿道の栓を抜いて、噴水のように尿が流れ出れば手術は成功する。もしそうでなければ手術は失敗、まもなく死ぬ運命だ。またステントの報告によれば、切断されたペニスは「宝」と呼ばれ、腐食防止処理を施してから容器に入れ、密封して高い棚に安置しておくのだという。これが出世祈願なのだということからおかしなものだ。そして、本人が死んだら、切断したペニスは元通りに縫いつけられる。

術後、尿道の機能が回復するまでのしばらくのあいだは、遺尿が止まらない。ズボンを濡らして垂れ流し、行く先々で臭いにおいをまきちらすことになる。哀れなていたらくをさらす新参者は、毎日のように古参の宦官に「汚い」「臭い」とののしられ、折檻されたということだ。

ペニスをなくした宦官は体に異変が起きる。下半身に皮下脂肪がたまり、胸部の筋肉が落ちて、腹や腰がでっぷりとし、重心が下に降りてくる。どんなにたくましい体型だったとしても、小股でよろよろと歩くようになり、老婦人さながらになる。容貌もすっかり見違える。ヒゲはもちろん生えなくなり、声も男性的でなくなり、ちやうど女がかすれ声で泣いているようになる。また、肌も男っぽいごつごつした感じから、つるつるとし、締まりがなくなる。こうして外見的には男か女かわからない人間になるのだ。

こんな惨めで苦しい思いをしてまで、人は栄誉が欲しいのだろうか。じつは、宦官の多くは自分の意思でなったのではなく、子供のころ親によって宮廷に入れられてしまったのだ。子供をそんな目にあわせるとは、なんと残酷なことかと思うだろうが、理由は主に貧困である。宦官の「産地」はだいたい福建^{ふっけん}、広東^{カントン}、広西^{こうせい}で、昔は全中国のなかでも貧しい地域であった。我が子が飢えて死ぬより、宮廷に入れて一生食べさせてもらえるならば、そのほうがずっといいというわけだ。また、なんとか生き延びたとしても、貧乏人の男は一生嫁がもらえない。どうせ死ぬまで独身でいるならば、男性のシンボルなど無駄だ。宮廷にいたほうが栄耀栄華を獲得できるかもしれない。それは先祖代々夢見たことだ。

生きるために、栄耀栄華を得るために、女は足を縛り、男は男根を断った。

ところで沿海地区の福建省にはおもしろい風習があった。福建は昔から水運と漁労が盛んで、人々の生活は船と切っても切れない関係にあった。板子一枚下は地獄となる船の上、女を乗せると海の女神が嫉妬^{しと}するといので、漁師や船員の性欲を満たすために美しい男が用意された。男色の風習は海の男からはじまったのだ。容姿端麗の若い男はスカウトされて宮廷入りすることもあったという。……もつともそんな時代はすでに過去のもの。いまや沿海地区の福建省や広東省は、改革開放後、最も豊かな地区になった。

宦官の偉業と悪行

明代、朝廷の公式記録『皇明実録』（こうめいじつろく）には、「宦官になれば、その恩恵は九族にまでおよぶと聞き、数百人の男がみずから去勢した」という、信じがたい記録が残されている。欲のために悪魔に影まで売り渡す男たちの狂気がうかがえる。

宦官のなかには宮刑きゆうけいに処せられた人間もいた。宮刑というのは、刑罰の一つで、死刑に次ぐ重い刑罰である。肉体を傷つける刑罰としては、最も軽いものが入れ墨、そして鼻そぎ、足切りがあり、次に宮刑すなわち男根を切断する刑となる。宮刑を受けた有名人というと、『史記』（しき）を著した司馬遷しばせんがいる。彼は前漢時代の武帝（おてい）（在位前141〜前87年）に仕えた役人だが、国家の防衛問題について友人の弁護をしたことが皇帝の逆鱗げきりんにふれ、宮刑に処せられてしまったのだ。彼は男性の尊厳である肉体の一部を切断されるというこのうえない屈辱を著述の原動力として昇華させ、四二歳から歴史書の執筆にとりかかり、苦節一二年、五四歳のとき不朽の名作『史記』を完成させた。

宦官で偉大な業績を残した人物は司馬遷ばかりではない。紙を発明した蔡倫さいりんもその一人である。司馬遷の生きた時代、書物はみな木簡もっかんといって木や竹の札に書かれ、すだれのようになぎ合わされた巻物になっていた。紙の発明は書物の軽量化と情報の普遍化の

うえて非常に大きな貢献をしたわけだ。

蔡倫は、司馬遷から下ること約二〇〇年、後漢時代の人物である。彼の最初の官位はしょうこうもん小黄門といい、皇帝のお手つきの宮女に仕える役だった。このような仕事は宮女の慰み者とされることが多いので、見かけの美しい若い宦官がまわされた。蔡倫もまた色白で美しい青年だったのだ。彼が仕えたのは宋貴人そうきじんという宮女である。彼女は蔡倫をいたく気に入り、入浴のとき挑発して誘いをかけたが、まだ二〇歳そこそこの蔡倫はおそれをなして逃げてしまった。恥をかかされたと思った宋貴人の讒言ざんげんで、彼は秘書監という部署にまわされたのである。しかし、この一件が幸いし、宮女の恨み辛みのとどかない静かな部署に落ち着いたおかげで、彼は紙の製造という偉業をなしとげた。

もっともこのような知識人は非常にめずらしいのであって、前述したように、宦官のほとんどは無学な者ばかりだった。これら宮廷内の、男でなくなった男たちは宮廷内のあらゆる仕事にたずさわった。

調度品の製作、馬や象などの動物の飼育、食事の賄い、皇帝の印章や公文書などの保管、清掃、衣服の製作や管理、宮廷音楽の演奏と演劇の上演、ちり紙の製造、宝飾品の製造など何でもあった。これらの仕事の部門のうち最も人々に恐れられたのが、東廠とうしやうである。現代ふうにいえば秘密警察である。宮廷内の諜報機関ちやうほうとして暗躍し、嫌疑だけでどんな

大臣や高官でも逮捕することができた。彼らは皇帝の威光を笠に着て権勢をふるい、私腹を肥やすことができた。

最も権威があつたのが司礼監である。これは大臣らから上奏された上奏文に、皇帝の返答としての指示を代筆する部署だ。皇帝の側仕えなので、その意思決定に大きな影響力を持つている。影の内閣とも呼ばれた。

次に力を持つていたのが内宮監、国家が行う土木事業をつかさどる部門だった。利権があつたので、大いに権勢をふるつた。

宦官の職務のなかで最も興味を引くのが、皇帝の閹房をつかさどる敬事房である。具体的にどんなことをしたのか、ちよつと紹介しておこう。

皇帝は晩餐をとるとき、夜伽をさせる后妃を指名する。敬事房の宦官は、大きな銀の盆に象牙製の名札を数十枚載せて、食膳を運ぶときにいっしょに持つてくる。名札には黄色や赤、青などの色がつけられているが、色は后妃の身分を表わすものだ。宦官がひざまずいて盆をささげると、皇帝がお氣に入りの后妃の名札を取って裏返しにする。すると宦官はさつと下がり、指名された后妃のところへ行き、身を清めて香りをかもししておくようにと指示する。

一方、皇帝は寝台に入ると、素足を布団からのぞかせるようにして待つ。やがて裸にさ

れ、羽毛布団にくるまれた后妃が宦官に背負われて運ばれてくる。彼女は皇帝の足のほうからすると布団の中にすべりこみ、寵愛を受ける。

皇帝のセックスの時間は、健康を考えて制限されている。時刻になると宦官は「時間でございます」と三度呼びかけ、何が何でも后妃を連れて帰る。

宦官はこういう場面に立ち会い、どんな気持ちで皇帝の秘事を見ていたのだろうか。性交に必要な肉体の一部はすでないが、性欲がなくなったわけではない。

日本の徳川將軍のための愛の園、大奥には添い寝の制度があったということだ。敬事房の宦官は皇帝の夜の秘事をかいま見ることはできたが、行為のあいだは部屋の外にいなければならなかった。大奥の添い寝は、寝物語に妻妾さいしやうがまつりごとの話を持ち出すことを防ぐためだったというが、將軍と女性との濡れ場を一晚中見ていなければならなかったとは、まことに残酷なことではないか。

宦官は家畜化された人間だと述べたが、じつのところ、歴史をふりかえると多くの王朝は宦官のために衰亡し、ついには滅亡している。皇帝の意のままに働く奴隸となった人間が、栄華をきわめた一大王朝を内側からくずし、歴史を大きく変えてしまうのだ。宦官こそ諸悪の根源だったという意見はいまも圧倒的だ。たとえば、秦王朝しんの宦官、趙高ちやうこうは、みずから天下を掌握しようとたくらんだ大胆不敵な宦官だった。

紀元前二一〇年、秦の始皇帝は巡幸の途中、病に倒れ、みずから命運尽きることを感じ、遠く離れた長男の扶蘇ふそを第二代皇帝にするとの遺書をつくり、臨終を迎えた。始皇帝の臨終には、末子の胡亥こがい、丞相じやうしやうの李斯りしが立ち会い、胡亥の家庭教師をしていた趙高もその場にいた。彼は胡亥が無能であることを知って、野心家の李斯と手を組み、天下を我がものにしようとたくらんだ。始皇帝が作成した遺書は握りつぶし、長男の扶蘇が朝廷に貢献していないという理由をつけて死を賜り、後継者として胡亥を指名するという内容の遺書を捏造ちやうぞうした。趙高は胡亥をロボットにしようとしたのだ。さらに、胡亥にとって代わるかもしれない他の一二人の公子たちも次々殺してしまった。これで後顧の憂いはないかのように見えたが、全中国を初めて統一した秦帝国は、胡亥が即位したのちも内紛が絶えず、たった二代で滅亡してしまった。

宦官というと、日本人は中国の特異な歴史として認識しているが、中国人の私としては、日本にはなぜ宦官制度がなかったのかという疑問をいだかざるをえない。ある中国の学者は、刑罰に由来する宦官は、もともと異民族との戦いの歴史から生まれたもので、征服した民族に対して行ったのが起源とされている。その点、日本ははい時期に民族同化がなされ、去勢という過酷な刑罰を用いる必要がなくなったのだと主張している。

それは一理あるかもしれないが、私は男性生殖器に対する文化的価値観の違いがあるのではないかと思うのである。中国人は男根そのものをあくまで個人の所有物だと認識しており、その存在価値は氏族の繁栄や性の快楽にあると考えているが、日本人は生殖器を宗教的な崇拜の対象として考え、神様のようなものとして感じているようだ。塞の神とか道祖神という形をとり、男根の形をした石彫や自然石を道ばたや村の入り口に立てる風習は、中国人の目にはとても不思議に見える。男根が人々の幸せを守ってくれるというのだから、とてもおもしろい。

ところで、纏足が、人の体の一部に執着し、性的興奮を覚えるというフェティシズムの範疇に入るのはまちがいないが、一部を失わせてしまう宦官というものも、ある意味ではネガティブなフェティシズムだとは言えないだろうか。切り落とした生殖器を「宝」と名付け高い棚に供えるという行為がその表われである。こうやって我が身から切り離すことで、ふつうの男性にはありえない人生が展開したのだ。あるいは栄耀栄華をきわめ、あるいは蔡倫のように美人たちの淫乱のパートナーとなり……。

第12回 奉仕する美しい男たち

強い女たちと面首

「面首^{めんしゅ}」というのは男妾のことである。「面」は顔、「首」は髪を意味し、容貌がよく髪が美しい美少年のことを言ったが、のちに女性に尽くす愛人の代名詞になった。

男が性欲のはけ口のために女遊びをするように、女にも性欲があればもちろん男遊びをするものだ。こういう女性の遊び相手をつとめるのが「面首」である。男遊びができる女性といえ、皇室出身の貴族とか、権力者の妻や娘である。

「面首」についての記録は、中国では古くから数えられないほど多い。たとえば南北朝時代、宋の皇帝・劉子業^{りゅうしぎやう}の妹にあたる山陰公主^{さんいんこうしゅ}がその一人だ。

あるとき、山陰公主は、兄皇帝にこんな文句をつけたものだ。

「私と陛下とは男女の違いはあれども、いずれも同じ先帝から生まれた子にございます。」

どちらが濃い、薄いはごさいませんでしょう。宮中には六つの宮があり、一〇〇〇人を超える美人が住まい、陛下お一人に尽くしております。なのに、この私には駙馬ふば（皇帝の娘婿のこと）たった一人。不公平でございます」

劉子業は妹の言うことももつともだと思ひ、三〇人あまりの美男子を選び遊び相手にしてやった。だが、山陰公主はすぐに遊び飽きてしまい、劉子業の部下の褚淵ちよえんという高級官僚に目をつけ、下賜を願った。劉子業からもらいうけるや、十数日間たてつづけに交わりを迫った。褚淵はとんだ配置換えにほうほうのてい。山陰公主の淫猥いんわいの炎に焼き尽くされる前に逃げなければならぬと、病氣を理由に脱出した。

春秋時代、秦国の宣太后せんたうこうは愛人の面首を、自分の死後殉死じゆんしさせようとした。死後の世界にまで連れて行かれそうになったあわれな面首は、名を魏醜夫ぎしゆうふという。史書によると、容姿は見映えがよくなかったが、ベッドの上の技にたけており、宣太后の寵愛を受けていた。だが、宣太后が死に瀕ひんして魏醜夫を陪葬はいそうさせたいという意向を聞くにおよび、仰天した魏は、庸芮ようぜいという宮廷官僚に頼み、許してもらえるように懇願した。

そこで庸芮は太后に言った。

「人は死んだあと七情六欲の感覚を持っているのでしょうか」

太后は答えた。

「むろん、なくなる」

庸芮は一步突っこんで尋ねた。「さすが、太后様は英明でいらっしゃる。ですが、それならば、なぜに太后様は、いま生きている人間を連れて行こうとなさるのでしょうか。死後も生きているときと同じようであるならば、太后様があの世にいらっしゃったとき、生前あなた様の行状をいらだたく思っておられた先王陛下とあいまみえたあかつきには、きつときつい仕返しがあるのではありませんか。しかもあの醜夫まで連れて行かれるのはどんなものでございましょう」

宣太后は長々とため息をつき、魏醜夫を殉死させることを思いとどまった。

女帝の淫乱

「徐娘半老」という言葉があるが、これはスキャンダラスな中年女性のことをいう。この成語は『梁書』『后妃伝』という史書の記載から来ている。

南北朝時代の南朝の一つ、梁に元帝と呼ばれる皇帝がいた。元帝には徐という美しい妃があつたが、徐妃は元帝を好まず、枕をとものにしようとしなかった。徐妃はあるとき元帝が自分を召していることを知り、顔の半分だけ化粧をして行つた。なぜなら元帝が独眼竜だったからである。元帝はこのようなあからさまないやがらせを受けても、彼女を罰しよ

うともしなかった。

しかし、徐妃はもともとセックスが嫌いだったわけではなく、性欲が抑えられなくなる
と、こっそり面首を呼んだ。徐妃の男妾の一人は瑤光寺ようこうじに養われている道士だった。また
のちに、元帝の近臣である季江りこうも目に止まり、召し出されてしまった。季江はまさか小柄
な徐妃の体にこれほどの淫欲のエネルギーがあるとは思ひもかけず、感嘆してこう言った。

はくちやく
柏直の犬は老いたりといえどもまだ狩りに使うことができる（柏直狗虽老犹能猎）

しやうりつよう
蕭溧陽の馬は老いたりといえども駆ければはい（蕭溧陽馬虽老犹駿）

徐妃は老いたりといえどもなお色欲旺盛おうせいである（徐娘虽老犹尚多情）

柏直と蕭溧陽は漢の將軍で、その飼っていた犬、乗っていた馬が丈夫だったように、南
朝の徐妃もたくましくお盛んだという意味だ。この言葉が後世に伝えられるうちに「徐娘
半老」という四文字に凝縮されて有名な成語になった。

中国史のなかで最も有名な面首が馮小宝ふうしょうほう、張易之ちやういし、張昌宗ちやうしやうそうという三人である。彼ら
の仕えた女主人こそ、ほかならぬ中国史上唯一の女帝、則天武后そくてんぶこうである。中国の歴史上、
朝廷で皇帝をしのぐ権勢をふるった女性は少なくないが、帝位についたのは彼女一人であ

る。則天武后は最初、寵愛を受けた先帝の喪に服するために尼僧にさせられていたが、ふたたび後宮にもどり、事実上唐王朝から帝位を奪い、皇帝の座についた。政治家としても大いに実力を発揮し、農業の発展、文化の振興、賢人の採用、国土拡大などに貢献し、唐王朝の繁栄と長命の基盤を築いた。「太陽の国」とさえ呼ばれた唐は、当時、世界をリードする文化の先進国だった。

これほど偉大な力を発揮する女性ともなれば、「英雄色を好む」の道理にしたがい、性欲のほうも烈火のごとくはげしかった。

武后は六七歳で帝位につくとともにベッド上の相手も失ってしまった。彼女が帝位継承のチャンスをつかんだのも、数年前、夫の高宗帝こうそうていが崩御ほうぎょしたからである。

どうしたらいいか。まさか婿を取るわけにもいかない。

そこである人が面首を探してきた。最初の面首が、道端で薬を売っていた馮小宝である。馮小宝は背がすらりと高く、人目を引く顔立ちをしており、相撲をとらせるとなかなか強かったという。薬売りは表向きの看板で、歌のうまさと口達者なところにものをいわせ、金持ちの女をたらしこむのが得意だった。



則天武后

則天武后がまず一回ためしてみたところ、さっそく御意にかなった。進退に趣あり、攻めるも守るも自在、疲れさせることがない。七〇歳に近いというのに、武后は身も心もとろけてしまい、そのまま一〇日間も政務を捨ててベッドにいつづけになった。

「このような逸材はまれであるよ」と、武后は感嘆してやまなかった。

武后はいちおう体面をとりつくりうため、馮小宝の名前を変えさせ、剃髪ていはつさせて僧侶そうりよとすることにし、宮廷に入れて昼間は僧侶としての仕事をさせることにした。夜はもちろんベッドに呼ぶわけである。

明代の艶情小説『如意君伝』（ホルノ）は、まさに則天武后と面首とのかたちを描いたものだといわれている。物語の登場人物、薛敖曹せつこうそうは馮小宝をモデルにしたものだ。物語では薛敖曹の「元手」について、このように描写している。

敖曹は年一八、身の丈七尺あまり、色白くして顔美しく、眉目秀麗、腕力あつて敏捷びんしやう。経史に通じ書画をよくし諸芸に秀でてゐる。酒は一斗を飲んでも酔わない。その肉具の壮大にして異常。故郷の少年らはみなそれを知る。敖曹に会えば酒を飲ませて一物を披露させて、戯れる。敖曹いわく。

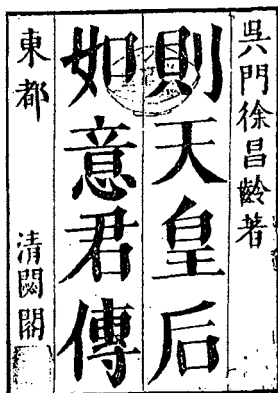
「ぼくはこの物のためにいまだ人間らしい楽しみを知らないのです。どうにもならない

ときにはむしろ苦しみでしかありません。諸君の楽しみとなるだけでしょう」

その肉具を出せば、頭は拳こぶしほどもあり、四つ、五つのくぼみがあつて、怒るにおよんでくぼみから隠れた肉がまるで蝸牛かたつむりの殻から出るごとくもりあがる。胴の部分は腕ほど大きくなり、根から頂点までミミズのような節が二十余条も浮き上がる。

少年らはそれを見て驚き、升に粟あわを入れてその首に掛けてみた。その力すばらしく、みな感嘆絶倒した。青楼せいろうではものめずらしさで見に来る妓女きじよはいるものの、そのもののためしてみようという者はない。しかし、そこに老いたる淫者いんじやがあり、ためしてみようという。これはうれしいと薛敖曹はよろこんだものの、さまざま方法を尽くしてみたが、ついに入らず。敖曹の肉具、その名のすばらしさは天下に聞こえるというのに、婚姻する者がなく、つねに嘆息し生きるに悲しみの感あり。

そのあと、小説では、ある宦官かんがんが薛敖曹を則天武后に推薦するわけだが、「元手」の描写はデフォルメされているものの、実際、標準以上



日本で模刻出版された『如意君伝』（18世紀）

でなければお側には上がれないだろう。

武后はこうして若い男からエネルギーを吸収し、陰の不足を陽でおぎない、おかげで齒も丈夫、髪もふさふさとして、なかなかの色気があり、三〇すぎくらいにしか見えなかつたということだ。

史書によると、馮小宝のほうは女帝の寵愛をよいことに、おごり高ぶって眼中に人なきがごとくとなり、宮中を乱したかどで死を賜ることになった。

則天武后は馮小宝に続き、張易之・張昌宗という兄弟を寵愛した。

この二人は貴族の出で、最初に弟の張昌宗が接見された。そのとき彼は弱冠二二歳、武后は七二歳である。姿かたちは美しく、文筆の才能があり、音楽に通じている。武后はさつそく夜伽を命じたところ、たおやかにして、吸いつくような肌触り、きしゃな体到大満悦だった。

張昌宗は老いたる女帝にみずからの玉杵ぎよくしよを献じたあと、さらに自分の兄を推薦した。

「兄の易之は陽具が私を越すほどもあり、媚薬びやくに通じております。ぜひ一度おためしください。私の言葉に嘘うそのないことがわかりただけでしょう」

翌日、張易之を呼んでみると、たしかにその技浅からず、陽具はすこぶる大にして、体たい軀はたくましく、すっかりご満悦であったという。そのとき張易之は二四歳。兄弟二人は

その後、則天武后のセックス・サービスに八年間尽くしたということだが、二人に関しては信じがたい記録が『新唐書』に記録されている。この書物はれっきとした史書であり、通俗小説や、噂話などを集めた野史とは違って、「正統」とされることしか記録されていない。その正史に張兄弟の母親の話があるのである。

張兄弟の母の臧氏ぞうしは生まれつき淫乱で、宮廷の高官、李迥秀りけいしゅうと不義密通していた。しかし李は臧氏が老いてくるといやになり、だんだん避けるようになった。臧氏はもちろん快く思わず、不機嫌になった。張易之が武后の夜伽よとぎのときにこの件を訴えたところ、同情を得ることに成功し、勅令にて「李迥秀私臧」という命令が出されてしまった。現代なら、国家元首のサインが入った総理府人事院の発行の正式文書によって、一老婆に対するセックス・サービスの命令が出されたということになる。

このような話が正式な史書に載せられているということは、よほどの事件だったからだろう。たしかに前代未聞であるばかりでなく、その後もこのような記録は見あたらないう。面首好きの則天武后でなければ、こんな勅令は出さない。

また、さらにおどろくのは、武后は男妓院すなわち、男妾養成学校をつくっていたということだ。広く美男子を集め、自分用に養成したのである。男妓院は「控鶴監こうかくかん」といい、「面首三千」と形容された。学長および副学長には張兄弟があたった。この歴史は清代の

文人、袁枚が、『控鶴監記』^{＊えんばい こうかくかんき}を著して後世に伝えているが、ほとんど史料は残っていない。清代の小説『載蓮船』^{さいれんせん}には武后が尹若蘭^{いんじやくらん}という人物を各地に派遣して天下の美男を集めさせる話が描かれている。尹若蘭は全国から一〇〇人あまりの美少年を集めてきたが、武后の氣に入る者が一人としてなく、結局全員故郷に帰ってしまった。

尹若蘭は武后に聞いた。

「モノを選ぶにはどのようにすればよろしいでしょうか」

「おまえも陽具に関心があると知つてよろこばしいかぎりじゃ。ならば私のわずかな経験を話してきかせようぞ。男の陽具は造化の靈氣と生育にある。陽氣が集まれば肋骨^{ろっこつ}以上の強さがあり、剛にして柔、堅くまた倒れない。男女が交われれば一つは陰陽の氣がたがいにおぎない不老長寿となる。二つには子供がさずかり祖先祭の香の絶えることがない。三つには雲雨の交歡の楽しみが得られる。年を増した女は夜間に失禁することがあるが、色を得られればそれも止まる。一五歳の成人を迎えた女子で病のある者は、亀（男根）をもつて癒すことができる。夫を失つて体を悪くした女、夫婦喧嘩^{げんか}に明け暮れている者も、陽物の神通力をもつてすれば、たちまち健康と生きる歡び^{よろこ}を見つけることができるだろう。

けれど人は服を着ているので陽物のよしあしを見ることができぬ。じゃが私は物の大小、細粗を見分けることができる。それには鼻を見るのだ。鼻が高く突起しているものは陽物

も大きく太い。鼻が肉厚で赤みがかっているのは酒飲みの男で、陽物は早漏、使い物にならぬ。酔いつぶれて床の上の暖かみを知ることができようか。これが亀を見分ける秘訣である」

これほど自信にあふれた則天武后だったが、人間年には勝てない。体力の衰えは権力の衰え。それまで武后を笠に着て権勢をものにしていた男妾たちも、どんどん追い討ちをかけられていった。

張兄弟はその後、どうなったかというところ、彼らもやはり馮小宝の轍を踏み、権勢を笠に着て横暴をふるい、朝廷の人々の反感を買うこととなった。史書によると、張易之は保養のためといって、グルメをきわめるために、不可思議なことをいろいろやったということだ。たとえば大きな鉄の籠をつくり、アヒルと調味ずみのスープの入った銅の盆を入れ、下から炭火であぶる。アヒルはあぶられて走りまわり、のどがかわくと盆のスープを飲み、だんだん力尽きて焼け死ぬ。こうすると羽を抜く手間もはぶけ、中から味がしみて、おいしいダック料理ができるというわけだ。グルメもここまでくるとおぞましいかぎりではないか。

武后は八〇歳になって重病におちいり床に伏してしまった。もう張兄弟と雲雨の情をかわすこともできない。武后の死の直前、面首の二人は宮廷反乱罪で誅殺された。武后が

どれほど助けたいと思つてももう力が残つていなかった。

*氏——氏姓のこと。昔、女性は家系図に名前が入れられなかったので、実家の姓にそえて王氏のように出身氏族の姓しか記録されなかった。王家の娘が張家に嫁ぐと王張氏とも呼ばれた。

*袁枚——1716～1797年。清代の詩人で随園老人と称した。浙江省の出身で、乾隆年間に進士になり、地方の知事を務めたが、退官後は江寧こうねいに庭園「小倉山」を建築し、エッセイ集『随園詩話』や小説『子不語』などを著した。

第13回 ホモセクシユアル 幸せな同性愛者

傾国傾城の美少年

戦国時代、晋しんの国が男色を利用して虞ぐの国を破ったという話がある。

虞の国王は男色だった。しかし、宮きゆう之奇しきという有能な大臣がいたために、外敵の侵入からはしっかり守られていた。そこで晋の国は一計を案じ、美しい稚児ちごを数人送り込んで、国王を惑わせた。国の密命を受けていた美少年たちは、王を寵絡ろうらくすると、次に宮之奇の悪口を吹き込み、信頼関係を崩すことに成功した。賢い宮之奇は、亡国の危機を察知し、すぐに逃亡した。これを待っていたのは晋の国である。待機させておいた大軍を出動させ、一気に虞を攻め滅ぼしてしまった。

この話は中国ではけっこう知られている。国を滅ぼす美女を傾国の美女というが、送り込まれた少年たちは傾国の美男というべきか。

中国皇帝には同性愛者が少なくない。いちばん多かったのは漢代だろう。ほとんどの皇帝は「後庭」の趣味を持っていた。「後庭」とはもともと奥の宮殿につくられた庭園のことをさす言葉だが、肛門を暗喩している。たとえば文帝は鄧通を愛し、恵帝は閔孺を、景帝は周仁、昭帝は金賞、武帝は韓嫣というように、皇帝は後宮三〇〇〇の美女があつてもなお飽き足らなかつたのか、美少年も愛したのである。なかでも有名なのが、哀帝と董賢だ。顔立ちの美しい董賢は、孤独な皇帝の心をいやすやさしい言葉で哀帝に取り入り、たちまち寵愛を獲得した。二人はもはや皇帝と臣下の身分を超えて深い仲となり、まるで新婚夫婦のように昼も夜もつねにいっしょに過ごした。

ある日のこと、哀帝が昼寝からふとめざめると、董賢が自分の袖の上に頭を乗せて眠っていた。哀帝は袖を引いて起こすにしのびず、ハサミで袖を切った。

この話もたいへん有名で、のちに男色の相手をする少年のことを「断袖」といい、同性愛のことを「断袖之飲」と呼ぶようになった。

貴族文化の華やかかなりし魏晋南北朝時代となると、男色の風潮は広まり、隠すことなく公然となされるようになった。史書『王史』の「魏彭城王韶」にはこのような話がある。

北齊の文宣帝は韶という名の大臣を非常に好んだ。ただしこの大臣は顔中ヒゲを生や

した巨漢だった。文宣帝はそのヒゲを剃らせ、紅おしろいをぬらせた。そして派手な女の衣装を着させ、金銀のアクセサリーをつけさせ、嬪妃のように公然と連れ歩いた。

男色は帝王や貴族たちばかりのものではない。清代の学者、王応奎の書『柳南随筆』にはこんな興味深い話が載っている。

明代の農民反乱軍のリーダー、張猷忠は、李二畦という少年を寵愛していた。李二畦は色気のある美男子だったが、戦闘では勇敢にはたらく兵士でもあった。色と力を兼ね備えたゲイボーイというところ。のちに官軍に捕らえられたが、官軍の指揮官・黄得功も李の魅力に勝てず、男妾にしようとした。しかし、李二畦は張猷忠への忠節を守り、黄になびかなかったので、ついに殺されてしまった。李二畦こそは人々に長く讃えられている……と。

ほとんど貞女の話である。

許季芳と尤瑞郎の恋物語

ところで、子孫繁栄を至上とする中国で、同性愛はどう考えられていたのだろうか。これが意外にも、否定的でなく、積極的に肯定しないまでも反対論はさほど多くないのである。中国の伝統的な性学理論の核心は「採陰加陽」の四文字にある。前述したように男性は性交のさいに射精をしないようにすれば、女性の陰の気を吸収でき、それによつて長命が得られるという考え方である。もし射精を頻繁にしまうと、陽の気を失い、陰の気でバランスをとるところか、病気をしやすくなり、短命となる。

このような理屈でいうと、同性愛では「採陰加陽」にはならないし積極的に肯定できない道理だが、なぜか禁止もしていない。というのは男同士のセックスのとき、射精して陽の気を失つても、相手から同じ分の陽の気を得ることもできるので、プラスマイナス・ゼロとなるわけである。レスビアンも同じ原理だという。

中国の艶情小説にもホモセクシユアルを題材にしたものが少なくない。たとえば『弁而釵』『宜春香質』『龍陽逸史』（いずれも年代、作者とも不詳）などがそうだ。これらのなかでおもしろいものがあるので、一つ紹介しよう。

話は、おそらく明代であろう。男色が盛んだった福建の興化府莆田県のこと。許季芳という秀才がいた。白玉のように色白で、唇は朱を引いたように赤く、子供のときから他

に抜きんでる龍陽りゅうよう（男性の同性愛者）だった。このような美少年が女性にもてないはずがない。しかし、彼は女に興味がなかった。なぜかと問われると、七つの理由があつて女が嫌いだと、常々人に語っていたという。

その一、化粧をすること。欺瞞ぎまんである。

その二、足を縛り耳に穴を開けること。不自然である。

その三、乳房が突起している。こぶのようで気持ち悪い。

その四、外出するとなればやかいだ。つるから下がったヒョウタンじゃあるまいしア
クセサリーをいろいろぶら下げて歩く。

その五、子供ができればつきまとわれ、自由がない。

その六、月経になると、服や席を汚す。

その七、子供を産むと女陰がゆるんで締まりが悪くなる。

ずいぶん勝手な論理だが、男色の話となると喜色満面となる。

「男子の姿こそ美というべし。それぞれに分あり、嘘偽りが無い。頭からつま先まですべて自然のまま。私とともに旅するならば、つねに信頼しあい、束縛もなく、純心な若夫婦のようになるだろう」

ある人が、彼のこの論を聞いて、尋ねてみた。

「なるほど、あなたのおっしゃる通りかもしれません。しかし、『純心な』という表現はどうでしょうか」

許季芳は不服そうに答えた。

「それを好まない者は不純だと思うでしょうが、好む者は、香りならば特別な香りをかぐことができ、味ならば特別な味をあげわうことができるのです。このような道理は知る者でなければ理解できないこと。俗人にはむずかしいでしょうね」

さすがにいちばんの美男子だけある。相当な自信だ。

同じころ、莆田県にもう一人の美少年がいた。名前を尤瑞郎ゆうすいろうといい、弱冠一四歳。眉は新月のように細く長く、目はいつも秋波を送っているごとく、口はさくらんぼ、腰は柳のようにしなやか、外見は少女と変わらない。どれほど美しいか説明のしようがないのである。なんといつてもその白い肌の美しさは、形容する言葉がない。雪のようだといえば、そのねばりを形容することができず、白粉おしろいのようだといえ、その光を形容することができない。

許季芳はこの尤瑞郎にかなり惚ほれ込んだ。尤瑞郎が東へ行けば東へ、西へ行けば西へ、どこへでもついていき、そのうち尤瑞郎が大小便をもよおすと許季芳ももよおすようにまでなってしまうた。

尤瑞郎も一途に許季芳を愛していたが、ある日突然、父親によつて家から出られないように閉じこめられてしまった。というのも尤瑞郎の父親の経営する米屋が、この数年赤字続きで、多額の負債をかかえ、生活が貧窮していたからである。父親の妻妾二人は世を去ったが、埋葬する金がないので棺桶かんおけに入れたまま家に置いてあつた。父親はこう考えたのである。借金の返済と葬儀の金は、自分の息子の身でつくるしかない。美男で大モテの尤瑞郎のこと、男妾として町中引く手あまただった。それを見込んでか、父親は強氣に出て銀五〇〇両もの大金を要求し、そうでなければ息子をだれにも渡さないと言ひふらして歩いたので、人々はびっくり仰天。

ふつう、妾を買うには多くても数十両が相場だったのである。まさか尤瑞郎の肛門が金銀でできているわけではあるまいにと人々は噂しあつた。

尤瑞郎は許季芳に会えないというので、半月もしないうち、まるで深窓の令嬢のように恋煩わすれいになり、医者にかかっても治らず、占いも効果がなかった。

さすがに許季芳は天下第一を誇る男色家である。彼の家は土地と家屋を含めても銀一〇〇〇両に満たない。しかし、彼は考えた。この家産を売り払つてかの人が得られるならば、楽しく数年をすごし、そのまま飢え死にしても本望ではないかと。

彼は家財を売り、五〇〇両を父親に渡し、尤瑞郎を娶めとった。尤瑞郎は許季芳と会つと葉

も飲まずに病はたちまち癒えてしまった。

許と尤の二人の新婚生活はまるで魚と水のように親しく、まるで膠にかわか漆うるしのようにピッタリと寄り添い、纏綿てんめんとした愛の日々であった。許季芳は尤の父親も引き取り、死ぬまで最後の世話をしたという。

ここまで読むと、同性愛とはいえ思わず胸を打たれる人情話だ。しかし、話はこれで終わりではない。精彩部分はこれからなのである。

尤瑞郎が許季芳のところに嫁入りしたのは一四歳のときだった。人道レシタオ（男根）は小指ほどの大きさしかなく、許と寝るときも女と同じで、何事もなかった。しかし一年をすぎたころ、突然そり立ち、まるで火を噴くようになり、やがて抑えることができなくなった。そして五本の指でそいつをこすることは、だれからも教授されることなく自然に覚えた。許は彼が疲れないようにと、しばしば仕事を代わってやった。だが、いつも事が終わるとき、なぜか季



『花宮錦陣』（明代）『翰林風』

芳が長々と嘆き声をあげる。尤瑞郎がなぜかと聞くと、許季芳が答えた。

「これは私の敵なのだ。将来、君と別れることがあるとすれば、かならずこれが原因となるだろう。そう考えるとつい嘆いてしまうのだ」

瑞郎はびっくりして言った。

「ぼくたち二人は生きているときは同衾^{どうきん}、死ぬときは同穴^{どうけつ}でしょう。なぜそんなことを言うのですか」

「男子は一四歳から一六歳までの三年間はまだ子供が抜けきれず、二心を抱くことがないので、友人として心が通いあい、夫婦のように心落ち着いて一体となることができ。しかし、腎水^{じんすい}（精液）が通って色恋に目覚めると、女性を思うようになるのだ。いったん女性に心が移れば、世の男は敵同然。書物にも、妻を娶れば親しさゆえに孝は衰えたとある。妻をもらうと自分の両親ですら忘れてしまうのだ。まして友情など続くわけがない。君のモノは一日、一日と成長している。私との縁は一日、一日と少なくなっていくのだ。君の腎水が増えていけばいくほど、私のよろこびは消えていくのだ。そう思うと、心痛み、嘆いてしまうのだ」

許季芳はここまで言うのと、わっと声をあげて泣き出した。

尤瑞郎は彼のこのようすを見て、しばらく考えて言った。

「それは違います。もしうわべだけのおつきあいならば、妻を娶れば自然と会わなくなるでしょう。でもぼくは終身あなたに従うつもりでまいりました。世の女子を見て、なぜ色心を起こすでしょうか。偶然そんな氣を起こしたとしても、一時の氣晴らし、心配いりません」

許は言った。

「氣晴らしというのがまさに、氣持ちが離れていくことの前兆なのだよ。君にはまだわかるまい」

「まさか、そんなことはありません」

「いいかい。老人の肌の色は壮年のようではなく、壮年の肌の色は少年のようではない。それはなぜだと思うかね。まさに腎水の増減が色の盛衰に関わっているのである。君のいまの美しさは、まだ元の陽を出していない、ちょうど花のつぼみの美しさだ。精液はまだそこに集まっているので、色も美しく、香りも濃厚なのだ。それがいったん開いて精液の出ていくところができれば、色は日一日と薄くなり、香りも一日ずつ落ちていき、だんだんと干からびていくのだ。君が漏らしたものは無用の物とは決して違う。その輝き、色つやも、底の部分が一分なくなれば、上の部分も一分減る。これは君一人だけでなく、人はだれでもそうなのだ。壮年、老年の日を迎えない者はいない。まさか少年のままでいるは

ずはない。ただ、私は君を愛しているのだ。だが、季節はめぐる。そのときになれば、自然のなりゆきに任せるしかない」

尤瑞郎はこの話を聞き、恐ろしさにぞっとし、心の中で自問自答した。

「いまこうして彼がぼくを熱烈に愛してくれるのは、ぼくの体が若く、色香があるからだ。しかしこの色香も元陽（精氣）がなくなってしまうばたちまち衰えてしまう。ぼくが彼を振ったりしなくても、彼がぼくのことを捨ててしまうのではあるまいか」

そして許に言った。

「ぼくはまさかこのモノがそのように悪いものとは思っていませんでした。どうかご安心ください。ぼくはこれからしつかりします」

数日のち、許季芳は朝早く家を出ていった。尤瑞郎は起きて髪をくしけずりながら、ふと鏡を見ておかしなことに気づいた。

「顔がなんだか以前と違うようだな。おとといは白さに紅が透けて見えたけれど、今日は白いところが増えて、紅の色が減ってしまったようだ。あの人が言ったことが当たったのかしら。ちょっとばかり漏らしたただけなのにこんなにひどいことになるとは。あの人はぼくのために家産を売ってしまい、財産をなくしてしまった。あの人がいなければ、両親の埋葬もできなかったし、この大恩に報いずに、ただ年をとってしまうなんて……」

尤瑞郎は小物入れの箱を取り出し、蓋を開け、中からナイフを出した。いっそ股間の一物を断ち切ろうと思ったのだ。いつも愛の戯れのときに使っている春凳を用意すると、梁から紐を垂らし、あおむけに横たわった。紐に自分のモノを結びつけ、つり下がるようにし、紐のもう一方を握りしめる。と、右手で持ったナイフでひと思いにばっさりやってしまった。モノは紐に引つ張られて宙にぶらさがり、彼は激痛のあまり失神してしまった。許季芳が帰つてくると、梁からナスのような肉塊がぶらぶら下がっているのが見えた。つまんでみると、なんと彼の「敵」ではないか。許季芳は仰天し、へなへなと腰が抜けてしまった。やがて胸をたたき、足を踏みならして号泣した。自分が言ったあのことで、瑞郎をこんなことをさせるほどに追い詰めてしまったのだ。許季芳はあわてて医者呼び、薬を買い、治療に全力を尽くした。

不思議なことに、ふつう指の一本を折ったくらいでも、治るまでしばらく時間がかかるのに、まるで神の助けでも賜ったように、一月もたたないうちに傷口が治ってしまったのだ。さらに摩訶不思議なことに、傷跡が徐々に変形し、ちょうど婦人のメノコのようになったのである。尤瑞郎はもともと女性の



春凳

ような体つきをしていたが、一物がなくなり、なんの異物もなくなったので、いつそのこ
と女になろうというわけで、婦人の服をまとい、髪をたばねて大きな髻まげを結び、きれいに
化粧をほどこした。また瑞郎の「郎」を「娘」に改め、尤瑞娘と称することにした。中国
語の「郎」ラウと「娘」ニヤは発音がよく似ているので、違和感はない。決心して女の道を選んだ
尤瑞郎は、一歩も門の敷居をまたがず、奥にこもつてしとやかにすごした。もともと聡明
なだけに針仕事も教えられる前に覚えていき、毎日起きれば縫い物や刺繡ししゅうにはげみ、賢夫
人の鑑かがみとなった。

＊魚と水——水を得た魚、魚心あれば水心などと言うが、「魚と水」は切り離せないことの
たとえである。中国語では「魚水情」と言い、男女の関係が緊密であることを示す。また
「水魚之交」は、君臣関係、友人同士、軍と人民など公的関係の緊密さをたとえる。

第14回 後宮の女たち

快樂を提供する佳麗三〇〇人

もし、来世があつて生まれ変わることができるならば、どんな境遇に生まれるかと思ふことはだれでもあるだろう。ふつうは社会の底辺に生まれるより、上層階級に生まれるかと思ふものだ。そうはいっても、中国皇帝に生まれることほど哀しいものはない。どの王朝も、だいたい三代目が最盛期にあたり、それをすぎると皇帝たちはほとんど政治に関心を持たなくなり、墮落していく。

帝王であれば、もちろん働く必要はない。だれも自分を指さして非難する人はいない。すべての人が自分にかしずくのである。しかし、皇帝といえども人は人、これほど孤独な生活はあるまい。そのストレスを解消するために、中国皇帝たちは奇想天外な遊びをした。その第一は酒池肉林である。歴史の第二ページを飾る暴君、殷の紂王が考え出した遊

びである。いまから三〇〇〇年ほど昔のこと、酒の池をつくって船を浮かべ、当時は最高級食品だった干し肉を木の枝にかけて肉の林とし、そこへ数千人の男女を裸にして、酒を飲ませ、淫乱な遊びにふけることを許したのである。そんな光景をながめながら、彼は天下の美女、姫だうき己と淫行の数々を楽しんだ。

のちに「肉林」は淫行の場の意味に転じた。二〇〇〇年あまりにわたる歴代皇帝の楽しみは、まさに美女の肉林というご馳走ちそうを堪能することだった。その場を提供したのが後宮という空間である。もちろん、後宮の目的は次の代の皇帝を産ませるために女性を住まわせることだったが、皇帝のお手つきになって出世の足がかりにしたいと思う上級階級の家庭から女子が次々送り込まれていくうち、後宮は主に皇帝の楽しみのための「性生活」の場となったのだ。

後宮の制度は周代しゅうに基本的なスタイルがつけられ、その後、秦しん、漢かん、隋ずい、唐たう、宋そう、元げん、明みん、清しんというように数千年の長きにわたり継承されていった。その間に数の増減はあったが、あくまで周代のスタイルがモデルとなり踏襲されている。

それによると天子には一人の「皇后」と、三人の「夫人」、九人の「嬪」ひん、二七人の「世婦」せふ、八一人の「御妻」ぎよさいを立てるとある。このランキングはちやうど朝廷の官位に相当し、皇后が天子（皇帝）と同格で、以下夫人は「公」（総理大臣）、嬪は「卿」（大臣）、世婦は

「大夫」(次官)、御妻は「士」(部隊の司令官)にあたる。うち、夫人は「母儀」(母)の手本とされ、「婦礼」(婦人の礼)を制定した。嬪は四徳の教育を担当した。四徳とは婦徳、婦言、婦容、婦功をいい、りっぱな婦人としてふだんの言動やみだしなみなどの手本を示すのである。世婦が冠婚葬祭を管理し、御妻は天子の宴で側仕えをし枕をともした。これ以外にも女史、女祝、典婦などたくさんの方がおり、後宮のさまざまな仕事に携わった。皇后を除く女性たちはまとめて「后妃」と総称され、ランクが下がるほど人数は増え、全体としてはピラミッド型になっていた。

后妃の人数は、時代とともに皇帝の肉欲が膨らんでいったのか、爆発的に増加していき、漢代には何千人という単位にまで膨張し、それが後宮の常識と化してしまった。

唐の詩人・白居易が天下の美女・楊貴妃を歌った『長恨歌』のこの一句は有名な。

後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身に在り

唐の後宮には三〇〇〇人も女性の女性がいたが、楊貴妃はそのすべてを退け、皇帝の寵愛を独占したというわけである。

西晋の武帝・司馬炎(二三六―二九〇年)にいたっては、呉の国を滅ぼし、その後宮の

美女数千人を全員引き取ったため、西晋の後宮は一挙に一万人以上にふくれあがってしまった、まるで性の底なし沼のようになってしまった。

仮に一〇〇〇人の女性をたんねんに毎晩訪れるとしても、一〇〇〇人目の女性は三年近く待たされるわけである。したがって、ほとんどの女性は皇帝の顔も知らず、女のようにこびも味わうことができないまま、高い壁に囲まれた薄暗い宮殿の一角で、虚しく情熱と青春の華をしぼませてしまう運命をたどるのだった。

武帝はそれでも后妃たちとの夜のつとめにはげんだが、あまりの多さに疲れてしまい、別の方法で遊ぶことにした。車をヒツジに引かせ、行き先はヒツジに任せ、行った先の女性と夜をすごすというものだ。後宮に閉じこめられて性に飢えた女性たちは、なんとか皇帝の寵愛を得ようと、ヒツジの好物の竹の葉や塩水を自分の部屋の入り口に置き、エサで引きつけて皇帝を呼ぼうと考えた。

武帝の欲深さは一人でも足らず、毎年八月には宮廷の役人を各地に派遣して美女漁りあさをさせた。一三歳以上、二〇歳以下で容姿端麗な女性を見つけると、同行させた相性占いの道士に占わせ、相性が合えば、すぐに「奉召入宮ほうしやうにゆうきう」の令を下す。本人の意思や家族の同意などいっさい無視である。

中国皇帝の夜伽の貴妃選別には肖像画も用いられた。女性が後宮に入ると、宮廷画家に

肖像を描かせ、それが皇帝に送られる。皇帝は毎日、肖像画を見てどの女性をベッドに呼ぶか決めるのだった。だが、毎日何点もの肖像画が並ぶのであるから、選にもれる女性もたくさんいる。

後宮に入つたからには、皇帝の寵愛を受けなければ、人生の落伍者になつてしまふ。だからどの時代も后妃たちのあいだでは、皇帝の寵愛をめぐつてすさまじい競争が展開され、ときには血なまぐさい闘争が裏で行われた。後宮の女性は権力者の寵愛を獲得できるかできないかで、一族の栄達も決まるからである。

このような過酷な競争を勝ち抜いて皇帝の寵愛を受け、しかも中国の絶対権力を掌握した西太后は強運の上にも強運を持っていた女性だ。西太后はあまりにも有名だが、ここでは彼女に負けず劣らず女の競争を勝ちぬいた明の万貴妃という女性の話をしよう。

中年女、万貴妃の非情

明王朝のとき、後宮にはなんと五万人もの女性がいた。

まんびじん

万美人は二〇歳のとき後宮に入つたが、美しくはあつてもこの人数では皇帝の目にとまることがすらむずかしい。それから二九年間、ただむなしく年をとるばかりだった。

だが、万美人の幸運はある夏の日に訪れた。万美人は朋輩の宮女と戯れているうち、う

っかり池に落ち、ちようどそこへときの皇帝、憲宗けんそうが通りかかり、目にとまったのだ。五〇歳近い年だとはいえ、薄絹が水にぬれて体にはりつき、男を知らない女の体はなまめかしくも美しかった。

憲宗は二〇歳前、子供っぽさの抜けない男だった。だれもが思いもかけなかったことに熟年の女の色気にたちまち心を奪われてしまったのだ。

一躍、憲宗の寵愛を獲得した万美人は、まもなく貴妃に冊立さくりつされ、彼女のために万雲宮が建設され、そこに住まう身分となった。この三〇年近く、飼い殺し同然にされてきた彼女は、いまこそ天下の栄耀栄華を得てやろうと、今度は最高位をねらった。言うまでもなく女の最高位は皇后である。

彼女は憲宗に讒言ざんげんして皇后をおとしめようとした。作戦は功を奏した。まだ若い皇帝は、熟女の手練手管にすっかり寵絡され、皇太后に皇后の廢位を願ひ出た。

さて、これで皇后の座が得られるかと思つたが、年をとりすぎているということ、それは実現しなかった。皇后の座がだめとなれば、子供ができない以上、次は憲宗の心変わりが心配である。貴妃の身は、皇帝の気持ち一つで運命は逆転する。なにしろ五万人いるのだ。やはり憲宗は若い瑜妃ゆひのところに通うようになった。そのうえ、柏妃はくひが太子たいしを産み、惠妃けいひが皇子（男子）、寧妃ねいひが公主（女子）を出産するという最悪の事態が起きた。

万貴妃は嫉妬の炎を燃え上がらせ、目にもの見せてくれようと、妊娠した瑜妃を折檻して流産させ、太子や皇子は毒を盛って暗殺した。万貴妃の仕業であることは明々白々である。しかし、情弱な憲宗は一人くやし涙を流し、嗚咽するばかりだった。

五〇を過ぎた万貴妃はどうなったかという、だれからも相手にされず、孤独をかこつて近衛兵の少年と密通したことが明るみに出て、とうとう憲宗からも見捨てられ死を賜った。

これは小説『明宮十六朝演義』の一部である。史書によると、高齡の万貴妃は一人男子を出産したが、不幸にして夭折し、その後はふたたび妊娠することはなかったということである。そんな不幸が彼女を残忍な性格にし、ほかの貴妃が産んだ子供を次々殺害するにおよんだのだろう。

憲宗のあと、帝位を継いだのは孝宗である。彼は張という宦官によつて救われた憲宗の唯一の子供であつた。張はむごい万貴妃をみかね、ある后妃の産んだ子供をひそかに保護し、育てていたのだった。万貴妃の死後、六歳になってようやく実の父親に迎えられ、即位したのだった。

産んでは殺す

清末の西太后も男子を出産したことで、後宮の地位を固めることができたのだが、万貴妃の話でも、男子出産をめぐって貴妃たちの熾烈な闘いが繰り広げられることは、男子継承を朝廷の基本としている宮廷では当然の展開である。

次の話は男子を産んでも地位を確立できなかった女性の話である。

時はさかのぼって四世紀の東晋時代、簡文帝・司馬昱をめぐるとある話である。気の変わりやすい簡文帝は男子欲しさに皇后を次々廃立したが、どうしてもできなかった。悩んだあげく、道士や占い師を呼んで方法を尋ねた。ある道士が、后妃のなかに顔の黒い長身の女がいるので、その女性と交合すれば子を得られると話した。簡文帝はさっそく言われたとおり、そのような女性を探させたところ、李という后妃がそうだとわかった。そこで彼女の部屋に直行したが、何しろ美人ではないので、李后妃には目もくれようとせず、やることだけやって去ってしまった。

道士の言うとおり、見事、李后妃は妊娠し、のちの孝武帝・司馬曜を出産する。ところが李后妃は太子を出産したというのに、皇帝の寵愛を受けることができず、孤独な半生をうつつと過ごしたのであった。そもそも簡文帝が欲しかったのは男子であって、彼女で

はなかった。哀れな李后妃である。

ところで孝武帝はろくな死に方をしなかった。彼は父親の簡文帝に負けないくらい好色で大酒飲みだったが、ある日、したたか酒に酔って、寵愛する張后妃に「朕ちんには数え切れないほどの美人がいる。そろそろ女を取り替えてみようか」とふざけて言った。張后妃は氣位の高い女性で、面子メンツをつぶされたとはかりカッとなつて孝武帝を布団で押さえつけ、窒息死させてしまった。口は災いの元、絶対権力者の皇帝にしては、たいへんめずらしい死に方である。

後宮は性欲に加えて陰謀うずまくおぞましい世界だった。皇帝の目にとまることも至難の業だが、次は男子出生をめぐつて口封じまで行われる。李后妃は簡文帝にないがしろにされたとはいえ、寿命をまっとうできたのだから、まだ幸せなほうだった。たとえばこんな例がある。

南宋なんそう（四二〇～四七九年）の明帝みんてい・劉彧りゅういくは、陽萎ようゐ（インポテンツ）でたいへん悩んだ皇帝だった。とにかく男子が生まれなければ、皇帝というより男としての面子が立たない。そこで弟の妾のだれかが妊娠するとすぐに自分の後宮に入れ、子供が生まれると後顧の憂いをなくすために、母親を殺してしまった。

後漢の宮廷を牛耳っていた策謀家の呂太后は冷酷無惨なことで有名だ。彼女は恵帝りゅう・劉

盈えいの張皇后ちやうこうに子供ができないことを心配し、ある后妃の子供を騙だましとって、張皇后の産んだ子だと偽った。なにしろ、張皇后は呂太后の力で皇后の座についた女性である。呂太后としても、自分の推薦した皇后が子のないために廃位されると大いに困るのであった。子供を産んだ后妃は呂太后によって謀殺ぼうさつされた。

后妃たちの男狩り

后妃たちは女ばかりの後宮でどんな生活をしていたのだろうか。性的不満や癒されない孤独、嫉妬でもんもんと日々を過ごし、ときには兵士や官吏などと不義密通したり、同性愛にふけたであろうことも想像に難くない。後宮の頂点に立つ皇后さえも例外ではなかった。

*ほくぎ 北魏せんにの宣武帝せんおていの胡皇后こは、しばしば不義密通をして物議をかもしていたが、宣武帝崩御ののちは、梓すがはずされ、ますます不倫にいそしんだ。まず目にとまったのが、將軍・楊大眼たいがんの息子で、美少年の楊白花ようはくかである。彼に密通を迫ったが、皇后の寵愛に驚いた白花は、身の危険を感じて遠く南梁なんりやうに亡命する。楊白花にふられた胡皇后は「楊白花」と題した詩に恋心を託し、毎夜、宮女たちに歌わせ、舞を舞わせた。

陽春二三月

楊柳齊作花

春風一夜入闌闌

楊花飄蕩落南家

含情出戶脚無力

拾得楊花泪沾臆

秋去春還双燕子

願銜楊花入巢里

陽春二月、三月

楊柳ようりゅうがいつせいに花を咲かせる

一夜にして春風、寢室に吹き込む

楊の花、南の家に舞い落ちる

恋情胸に迫るも行くなかなわず

楊の花を手に取り涙を流す

秋が去り春が来て、再び舞うつがいの燕つばめ

楊の花をくわえて巢に入る

それほど思っていた彼女だったが、しばらくすると、大臣の王おう懌えきに情を移した。今度こそ逃げられないよう策を弄ろうしたが、王懌は逃げるつもりなど露もなく、魚心あれば水心で、淫欲の悦楽を満喫した。だが、王懌も行いに配慮が足りなかった。胡皇后と対立する帝党一派につかまり、閹やみから閹へ葬られてしまった。

皇后の不倫といえ、史書『晋書』しんしよにはこういうおもしろい話がある。

西晋の首都、洛陽にハンサムな官吏かんりがいた。ヒラの官吏は薄給だからふつうは汲き々ゆうきゆうとしているのだが、あるときから急に気前がよくなり、しゃれた服を着るようになったので、

上司がどうしたことかと聞いたところ、こんな経緯を話した。

ある日、外でぶらぶらしていたら、一人の老婦人に声を掛けられた。老婦人は「家に病人がいて、占い師に占ってもらったところ、たくましい体の青年を連れてくれば、邪の気を鎮めることができるだろうと言われた」と言い、お金を差し上げますので、おいでくださいと言う。老婦人の言葉を信じてついていったところ、大きな箱に入れられ、上から厚いカバーをかけられ、車に乗せられていずこへかと運ばれた。

「さあ、着きました」との声を聞き、降りてみたら、目の前には華麗にして荘厳なる大宮殿が建っていた。どこかと聞いたたら天上界だと言う。宮殿に入って、香湯で身を清め、美しい服に着替えると、生まれて初めて見るご馳走が用意されていた。それを満腹するまで食べたところ、年のころ三五、六という婦人の前に案内された。婦人は中肉中背、眉が濃くて額にはくろがあった。毎夜、彼は婦人とともに食事をし夜をすごしたが、別れのさい、婦人からたくさんの金と服をプレゼントされたという。

このように事の次第を話していたら、ときの恵帝の賈^か皇后の縁戚にあたる人が入ってきて、一緒に話を聞くうち、その婦人こそ賈皇后に違いないという。『晋書』にはここまでしか書かれていないが、びっくり仰天した官吏の顔が目に見えよう。

*北魏——386～557年。南北朝の北朝の一つ、鮮卑系の拓跋氏の王朝。平城（山西省大同）に都し仏教文化を受け入れ、雲崗石窟などの仏教美術を残した。孝文帝のときに都を洛陽に移し漢族化を進めたところ内部反発を招き、534年に東西に分かれる。が、ほどなくそれぞれ内部の実力者に帝位を篡奪される。

第15回 獸性狂・海陵王の話

ワンヤン・リヤンの蛮行

「獸性狂」という不名誉な称号を獲得した帝王がいる。金王朝（一一一五―一二三四年）（かいりようおう）の海陵王・完顔亮である。金は北方のツングース系の民族・女真族（じょしん）が築いた王朝である。海陵王は金王朝の太祖・完顔阿骨打（わんやんあつた）から数えて四代目の王で、帝位を継ぐはずだった従兄（いとこ）弟を殺し、位についた男である。

彼はクーデターに成功すると、首都を中都（ちゅうと）（現在の北京）に移し、帝位についた。そしてまず考えたのが後宮のことだった。

「皇帝だからといって、国家の事業として美女漁り（めいさ）をするのでは、人民の恨みを買ってしまふ。そんな手間をかけるよりもっとかんたんに済ませてしまふほうがよい」

そう聞くと、まるで賢君のように思えるが、じつは「かんたんに済ませる」とは、なん

と自分の身のまわりの女性にかたはしから手をつけるということだったのだ。部下の妻、親戚の娘、未成年の下女、息子の乳母など、ちよつと外見がきれいだとすぐ肉体関係を強要するのである。たしかに人民から恨みを買うことはなかったが、後世に「獸性狂」というあだ名をつけられた。

獸性狂の蜜行の一つが実の兄・阿骨朵を謀殺してその妻と娘を蹂躪したことだ。海陵王は兄嫁の阿里美^{アリフ}にかねてから目をつけていた。女がほしければ実の兄でも殺す獸性の持ち主だ。阿里美を強姦^{ごうかん}すると、次はその娘で自分には姪^{めい}にあたる一五歳の重節^{チョンサエ}をも手にしようとした。

ある日、海陵王は重節の部屋に押し入り、重節をとらえてむりやりベッドへ引きずっていき、上着をはいだ。やわらかい二つの乳房に顔をこすりつけ、手で重節の下着を引き下ろすと、下部を吸った。海陵王の唇と齒は、尿やおりもの、陰毛にまみれた。海陵王は犯しながら聞くにたえない淫乱^{いんらん}な話をしてきかせ、指を少女の小さな陰戸のなかに突っ込み、かきまわす。淫水がとろとろ流れ、指を動かしながら恍惚^{こうこつ}としてうめき声をあげる。重節は恥ずかしさのあまり手で顔をおおい、いやがった。海陵王はそれを見てさらに興奮し、陽物で陰戸を突き、イヌのように腰を動かした。鮮血のしぶきがシーツを染めた。重節は苦しみのあまり哀願したが、海陵王は蝶^{ちょう}が花をむさぼるように一晚中重節を責めさいなん

だ。

母娘おやこを自分のものにした海陵王は、阿里芙アリフを「賢妃けんひ」に、重節チョンヂェを母親より上位の「淑妃しゅく」に冊立さきりつした。二人はそれぞれ海陵王の娘を産んだ。賢妃の娘は自分の娘だとしても、淑妃の娘は海陵王の娘でもあり孫でもある。

少女狩り特別法

少女がとくに好みだった獸性狂・海陵王は、少女狩りに都合のいい「特別法」を編み出した。大臣をはじめ宮中の役人のすべてに対し、娘を持つ者はその子が一五歳になったらただちに報告し、后妃こうひ候補として準備せよというものだった。もし王の許可なくして嫁がせた場合は、皇帝欺瞞きまん罪に問われ、一族全員に死刑が下る。

しかも、海陵王は娘が処女であることを証明する保証書までつくらせて提出させた。もし、そうでなければ首が飛んだ。

蕭拱しょうこうという大臣がいた。彼には娘はいなかったが、妻の妹で蜜勒ミローという少女を扶養していた。海陵王が見逃すはずがない。令を下して蜜勒を后妃にしまった。

ところで、海陵王は処女との交合に一つのこだわりを持っていた。それは抵抗する女性への執着である。女性の抵抗がはげしければはげしいほど燃え上がり、たつぷり前戯を楽

しんだあと本番に突入する。で、処女膜出血が見られたら興奮は最高潮、飽食する野獣のように雄叫びをあげる。

そのあと、盛大なパーティーを開き、「破瓜」のよろこびを祝うのである。

しかし、蜜勒はあまりの恐怖に抵抗もできず、ただ体をぶるぶる震わせるだけだった。不満の色を浮かべながらも海陵王は陰戸を突いた。

出血がない。

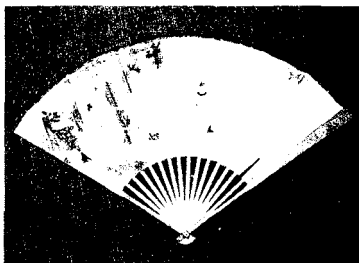
ついに怒った海陵王、破瓜のよろこびを奪ったのは蕭拱に違いないと思いこみ、蕭拱を殺し、その妻を文之という役人にやってしまった。そのときの言い草が人をばかにしている。

「以前、おまえの妻を譲ってもらってすまなかったな。その代わりに蕭拱の未亡人をやろう」

海陵王は文之の妻も奪っていたのだ。

海陵王はクーデターで帝位についたが、クーデターで殺されるはめになった。彼の死体はすぐに焼かれた。

海陵王ほど悪名高い皇位は中国史上あまりない。しかし、彼は意外にも文才のある詩人だった。彼の書いた「鵲橋仙」



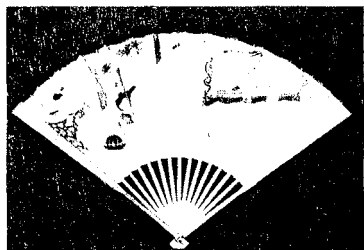
扇子（表）

や「昭君怨」は後世の詩人たちに伝誦され、いまに伝えられてゐる。彼は初めから悪人だったわけではない。子供のころは神童と呼ばれる天才少年だったのだ。ある日、皇帝の前に連れていかれ、詩を書くように命じられた。即興で書かせ、その実力をはかろうというものだ。彼はさほど考えることなく、用意された扇子をとり、筆をとってさらさらと詩をしたためた。

大柄たいへい 手中にあれば

清風 天下に満ちる

扇子の「柄」(要)を「柄政」(まつりごとをとる)にたとえ、政権をとって自分の理想、つまり「清風」を実現したいと、子供らしい純粋な野心を表明したものだ。だが、その風は清くなく、「穢風」であつたことは悲しむべきことだ。



扇子(裏)

第16回 強くなる薬、媚薬

起陽の丹薬

漢方薬は、日本では植物が主な材料になっているが、少ないが鉱物も含まれており、動物や昆虫もかなり利用されている。タツノオトシゴやサソリなどはあるいは知っている人もいるかもしれないが、ゴキブリなども薬になるのである。たいした薬効はないが頻尿に効くという話だ。女性はゴキブリを見ると悲鳴をあげたりするが、私などは子供のころから見慣れているから平気だ。あのころはゴキブリを見つけると叩き殺して干し、二〇か三〇集めて薬屋に持って行って売り、小遣い稼ぎをしたものだ。

漢方の精力剤というと、むしろ動物が材料になっているものが多い。漢方では「物之生ぶつししょう克く」^{（一）}と言ひ、動物の特質がそのまま効果となると考えられている。たとえばキツツキは木をつつくので、歯の治療になるとか、コウモリは暗いところを飛ぶので、目の病気に効く

とかいう理屈である。もちろん、男性のインポテンツには動物の生殖器が薬材となる。台湾で生産されている「健陽鞭」チエンヤンビエツンという商品は、寒帯・温帯・熱帯に生息する数種の強健な動物の生殖器を乾燥し、ブレンドしてつくられた漢方薬だ。広告にはこうある。

ひようがんぜんせん
剽悍善戦

たくましくよく戦い

しやうむてき
所向無敵

向かうところ敵なし

いかにも効き目抜群のようだが、果たしてあのバイアグラを超えるものかどうか、筆者はどちらのためしていないので不明である。

明代の艶情小説『昭陽趣史』ポルノは、漢の成帝せいていの淫蕩生活いんとうを小説にして描いている。そのなかの一段に、成帝が媚薬びやくを服用する話がある。終日淫楽にふけり疲労困憊こんばいして陽物が立たなくなり、宮人に命じて薬を探させた。

あるとき、宮人が一人の術士を連れてきた。術士は祖先伝来の妙薬があるので、皇帝陛下に献上したいと言う。成帝は思わず喜色をあらわし、ほんとうに起陽に効果があるのかと尋ねた。術士は言った。

「臣しんがお持ちしました丹薬たんやくは、その名を慎恤膠しんじゆつこうといい、一〇〇日間火中で煎いつてつくら

れたものです。これを服用すれば堅挺けんていして漏らすことがありません。漏らすときには二口の冷茶を飲めば精は自然に漏れるでしょう」

それを聞いた成帝は術士に白銀一〇〇両を褒美としてとらせ、薬を受け取る。よく見れば馥郁ふいくたる香りがただよい、色つやも美しい。成帝は至宝でも得たようによろこび、愛妾あいしやうの合徳にも見せたところ、合徳も大よろこびして言った。

「このようによい香りがするのならば必ず効力があるはずですわ。陛下、何百粒もあるのでしょうか」

「一粒もためしていないうちから、何百粒もいるかどうかはわかるまい。まずこれを飲んでみよう」

成帝はその一粒を飲むと、合徳と酒を酌み交わした。と、薬効があらわれてきた。半時もちたぬうち、しなびたナスのようになっていた陽物が徐々にせりあがり、たちまち鉄の棒のように硬くなったのである。成帝はがまんできず、宮女を下がらせると、服をぬぎ、合徳を抱き上げてベッドに入り、狂ったように愛撫あいぶし、陽物を陰戸に突き入れ、激しく抜き差し。合徳はうっとり目を半開きに、陰戸のなかが火のように熱くなってくると、淫乱の気を燃え上がらせ、がばっと起き上がると成帝を倒し、馬乗りになって上下に抜き差し。十二分に甘美を楽しみ、やっと心身ともに爽快すうかいになる。成帝は合徳が興に乗っているので、

今度は酔翁椅すいおうい（リクライニングチェア）に抱いていき、一〇〇回あまり抜き差し、合徳は「ああつ、いいつ」と叫び声をあげ、どくどくと淫水を垂らす。成帝は遊び疲れ、宮女に冷たい茶を持ってこさせ、二口飲むと薬効がたちまち解け、精水が漏れて陽物はぐにやりと倒れる。合徳が言う。

「この薬はほんとうに効くわ。陛下、明日にでももっとたくさんお買いなさいませ」

「もちろんだとも」

と成帝は言うのと、二人はよりそって眠りについた。

そののち、合徳は自分の快樂のために、成帝に七粒も続けて飲ませたために薬が逆に害をなし、成帝は精を出し切って死んでしまうのである。合徳は後悔し、血を吐いて死ぬ。

小説には誇張したところもあるが、古代のその他の文献から見て、漢代にはすでに媚薬が用いられていたことは確かなようである。

歴史上、媚薬が最も発展したのが明朝である。上は帝王、士大夫しだいふから下は大商人や地方の豪族まで、色欲を満たすため長寿を得るために、上等の媚薬を得ようと惜しみなく財産をつぎこんだ。

明朝には李時珍りじちんの著した漢方の原典『本草綱目』ほんぞうこうもくがあるが、記載されている薬材の半分

近くは壯陽補腎すなわち男性の強壯に有効なもので、充実した性生活に役立つものである。いかに媚薬に関心が持たれていたかがわかる。参考にその一部を紹介しよう。

五味子

チヨウセンゴミシの実

竜骨

動物の化石

茺蔚

ヤマグミの実

蛇床

オガセリの実

海馬

タツノオトシゴ

白礬

みょうばん

*李時珍——1518～1593年。湖北省の生まれ、薬物学者。家学として薬学を学び

臨床を重視して医療を革新した。伝承の本草書を収集・整理し、民間で発見された薬物を加えて27年の歳月をかけ新たな分類法にもとづく『本草綱目』を著した。

成功例と失敗例

漢の成帝をはじめ、媚薬のために命を落とした帝王は少なくないが、最も多かったのが明朝である。穆帝は明朝の歴代皇帝のなかでも能力のあった青年王であったが、若くして

この世を去った。死因は媚薬の飲み過ぎだった。陽物が昼夜にわたって勃起したままで、精力がそこに集まった結果、体が虚弱になり死んでしまったという。さらに世宗と光宗も、特別に処方した丹薬のために死んだといわれている。

媚薬にはさまざまな種類がある。なかでも漢代の「慎恤膠」、魏晉南北朝時代の「五石散」、唐代の「助情花」、宋代、明代の「顫声嬌」「膈膈臍」、清代の「阿肌蘇丸」がとくに有名である。

前述した『昭陽趣史』に出てくる「慎恤膠」は今日知りうるかぎり最も古い媚薬として知られているが、成分などは調べる手だてがない。宋代の小説集『太平広記』（全五〇〇巻）にはその薬に関しての記述があるが、それによれば男女とも久接不敗（長時間行っても衰えない）となり、深く愛すること膠で張り合わせたようになる」と説明されている。「五石散」は紫石英、白石英、赤石脂、鍾乳、石硫磺の五種の鉱物でつくられた薬で、媚薬としては精力増強に過激なほど効果抜群である。しかし副作用もきわめて強烈だった。口が渴き、唇に水泡ができ、運が悪ければ悪性腫瘍が全身にでき、肉が腐って死んでしまう。

『太平広記』にはこのような故事が記されている。ある将軍が五石散を十数回服用してみたが、精力増強になんらの効果もなく、全身がおそろしく冷え、酷暑の夏に服を何枚も着

重ねなければならなくなった。そこである名医を呼んで診させたところ、病人は寒がっているが、体の内部には熱がこもっているの、湯を沸かし蒸気を出させ、真冬には体に水をかければよいという。その年の十一月、雪と氷におおわれた極寒の日に、名医は二人の人間を使って將軍の服を脱がせて裸にし、氷のように冷たい石の上に寝かせ、冷水で頭から洗わせた。桶二〇杯ほど水を使ったところで、將軍は唇を震わせ、失神してしまった。

將軍の家族はびっくりして泣きながらやめさせようとしたが、名医は手を休ませず、棍棒を持ってかたわらに立ち、家族が近づくとそれを振り回して追い返した。さらに桶一〇〇杯分の水をかけたところ、將軍はひくひくと動きはじめ、背中に熱がもどってきた。しばらくすると生きかえり、暑くてたまらないから冷たい水が飲みたいという。名医が冷水を渡すと、將軍はごくごく一升も飲み干してしまった。將軍は全快したのである。

その後は、軍事にたけたばかりでなく、色欲は旺盛で、冬でも短いシャツ一枚で、たいへん健康になったという。

「顫声嬌」は主要な成分が雄蚕蛾、つまり蛾になったカイコ、カイコガの雄である。カイコガは古代の医学書にも、氣熱が淫で、精力増強に効果があり、交接して疲れを知らないと記述されている。成分には雄蚕蛾以外に五味子、鳳仙姑などが含まれ、男性が服用して交接すると、女性最高潮に達し、嬌声をあげるのもこの名がついた。

漢方といっても、材料は植物ばかりではない。動物も薬材として用いられる。「膈肭臍」はオットセイのペニスが用いられたもので、効果は「慎恤膠」と変わりないという。しかし偽物も多く、一〇〇のうち一つの本物があればいいというくらいだ。真贋の判定には雌のオットセイをその上に乗せ、乾燥して縮んでいる陽物が膨張するかどうかで見るといい。次のような古い話が伝えられている。江西省のある財産家は、多くの妾をかかえていたが、精力が足りず、妾全員と交接することができない。そこで執事が毎年オットセイのペニスを求めてきて「膈肭臍」を調合した。財産家は服用したあと精力絶倫となった。だがあまりに薬効が強烈で、体温が上昇し、嚴冬のころにも帽子をかぶる必要がないほどの暑がりになったという。これは熱病の一種だったらしく、長生きできずに死んでしまった。

美女名の処方箋

宮廷で用いられた媚薬には有名な美人や帝王の名がつけられた。たとえば「西施受寵丹」は春秋時代の絶世の美女、西施の名を借りた薬で、成分は丁香、附子、良姜、宮桂、蛤蚧、白礬、山茱萸、硫黄で、これらを碎いて丸薬にし、空腹のときに白湯で三粒ずつ飲む。すると交わつても漏らさず、強靱になるという。

「貂蟬対炉入戸丸」は『三国志演義』に登場する美女、連環の計のヒロイン貂蟬にちな

んだ薬である。成分は柯子皮、枯礬、皮椒末、晁腦、桃毛、母丁香である。これを碎いて大豆くらいの丸薬にし、一粒を女陰に入れると、しまりのある名器になるといふ。

「楊貴妃小浴盆」は唐の玄宗皇帝に愛された楊貴妃にちなんだ。成分は宮桂、木別子、白礬。五碗の水を入れて煎じ、水が三碗ほどになったらできあがる。この液体の薬はセックスの前に性器によくこすりつけて洗うようにする。薬効はすばらしく、言葉で言いあらわすこともできないという。

「元順帝御製金槍不倒方」は帝王の名が冠せられた精力増強剤である。成分は丁香と姜蚕が二錢（約三グラム）ずつ、陽起石、木香、乳香が各三錢、乾燥させた葱が一本。これらを碎いて丸薬にし、一回三丸、温めた酒で飲む。薬効はあらたか、飲めば漏らすことがないという。薬効を解くには冷水を飲めばよい。ほかに「隋煬帝幸群女通宮春」とか、「安祿山徹夜恣情散」「安樂公主如花夜夜香」などといったいかにも効き目のありそうなネーミングの媚薬は枚挙にいとまがない。

明朝には房中術の専門家で陳希夷という人物がいた。彼は『房秘訣採戰春方薬性歌』という歌をつくって薬材を記録した。全編は長いので、一部を紹介しよう。

洞房何薬可興陽

海馬相兼石燕強

蛤蚧丁香共巴戟

熟地茺莢五味良

堅強更有破故紙

能今快美羨蛇床

硫黃性熱宜輕用

木香麝香用參詳

人竜木鱉絲瓜子

乳香沒藥是奇力

……

歌詞には「海馬」「石燕」「蛤蚧」「丁香」「熟地」「茺莢」「蛇床」など、媚薬の定番の薬材が見える。昔の中国人は媚薬開発に非常に熱心で、研究もたいへん深い。

明朝の学者で徐応秋じょおうしゅうという人物がいた。彼が著した『玉芝堂談薈ぎょくしどうだんわい』という書物には、明の太祖朱元璋しゅげんしやうの娘、宝慶公主ほうけいこうしゅのことが描かれている。公主の夫は陰津月水いんしんげつすい（経血）を食することを好んだという。もちろん、太祖の娘の家なれば大富豪の家であり、妾は一〇

○人を超える。その一人一人の月水を食することを、六十余年も続けたというのである。

明朝中期、たいへん奇妙な媚薬が流行したことがあった。「紅鉛こうえん」という名で、主な成分が少女の月経血だというのである。しかも、限定された少女のものでなければならなかった。まず、少女の容姿がよくなくてはならない。目元すずやかで白い歯をしており、髪は黒くつややかで、肌はきめこまかく、中肉中背、顔立ちの整った者というのだ。

しかも生後第五〇四八日目（一三〜一四歳）の最初の月経のものでなければならぬという。昔の中国では女子の初潮がそのころだという定説になっていたからである。実際その日にちようと初潮が訪れる少女はきわめてまれだったため、びたりと合った場合にはそれこそ真正銘の至宝として尊ばれた。

少女の経血は五〇四八日目の初潮が最も貴重で、第二、第三回目がその次、第四、第五回目となると効果が薄くなるとされた。

至宝の経血が得られたのちは、非常に複雑な工程をへて小さな丸薬をつくる。服用は一年に二度、三年から五年をへだてて再び二度目、三度目を服用する。明代の医学書『しゅうみょうほう衆妙方』によれば、服用ののち氣力煥發かんぱつになり、精神が通常でなくなるという。効力はたった一服か二服で、植物を材料にした薬の一〇〇服分にもなるという。

これほどまでもはやされた紅鉛だったが、清朝になってからはすっかり忘れられてし

まった。もちろん、現代医学の観点からいえば経血にはなんら精力増強の成分もなく、もちろん医学的な治療効果もありはしない。

少女の経血とは別に、童貞の少年を用いることを考え出した人間がいた。明代の史書『万曆野獲編』^{ばんれきやかくへん}には、ある方士^{ほうし}が少年を誘拐し、長期にわたってむりやり強壯剤を飲ませ、その陽物が最大に勃起したとき、刃物でばっさり切り落とし、媚薬の材料にしてしまったという話が載っている。餌食になった少年は一〇〇〇人に達したということだ。げに恐ろしき人の欲である。

第17回 思う人を振り向かせる方法、媚術

愛する男を振り向かせる

中国には古来、多くの媚術があつた。媚術というのは相手の愛情を獲得するために用いる技である。方法は男女で異なる。まず女性の技から紹介しよう。

媚術の基本はまず天干地支と呼ばれる時の数え方である。これは甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸で数える天干の一〇進法と、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌で数える地支の一二進法が組み合わせた六〇進法で、たとえば甲子、乙丑、丙寅……と組みあわせていき、最後が癸亥で一巡する。天干地支で数えると一年は一二カ月で一カ月が三〇日、全部で三六〇日と計算される。すると一二日ごとにかならず子の日があるわけだが、昔、女性たちは、子の日に沐浴すると思う人の愛を得られると信じていた。後漢時代の学者、王充の著した『論衡』には、

子日沐令人愛之 子の日に沐浴すれば男の愛を得られる

とある。千数百年も前にあったことがわかる。昔、性に目覚めたばかりの女の子たちが、片思いの男性と結ばれることを思つて、子の日を指折り数え、こつそり沐浴するところを想像すると、なんともほほえましい。

***愛の鳥** それよりさかのぼること三百数十年、前漢時代には男女の思いをつなげる不思議な鳥がいた。西域の勒卒国ろくそつこくから武帝に細鳥さいちようという鳥が贈られた。郭憲かくげんという学者が著した『洞冥記どうめいき』という書物に残っている記録だが、その鳥はハエほどの小ささで姿はオウムに似ており、声は黄鵠こうこくに似ているという。おもしろいのはその鳥が宮女に止まると、武帝がその宮女に興味を持つという現象が起きたことだ。宮女たちは細鳥の到来を心待ちにした。

細鳥はもはや絶滅したようだが、カッコウやキジバトも女性の願いをかなえる鳥だった。唐代の学者、陳藏器ちんざうきは『本草拾遺ほんざうしゆい』のなかで「布谷カッコウの脳骨を食せば夫婦むつみあう」と記している。また「斑鳩キジバトの頸骨けいこつは夫婦相愛にする。五月五日、男が左を、女が右を持つこ

と」とある。キジバトの骨は五月五日にしか効果がないので、その日に捕らえて殺し、男女で骨を分けて持てば霊験あらたかというわけである。

***愛の虫** 清代の『古今秘苑統録』には「相思虫」なる虫を媚薬にするという記載がある。その虫を捕らえたら火であぶり、次に男女の身につけている短褲パンツを焼いて灰にし、氷水に入れて攪拌かくはんする。それと相思虫を合わせて飯に入れて食べる。次に自分の「生辰八字」を紙に書き、ベッドの敷布団の下にしく。こうすると男はかならず彼女に夢中になるというのだ。「生辰八字」というのは生まれた年や時間から運勢や男女の相性を占う占いで、現在も香港や台湾では流行っている。

虫といえは、虱しらみに似た小さな虫で、いつも雌雄一対なので「隊隊」という名の虫がある。雲南省に生息しており、前述の『本草拾遺』には虫取りを生業なりわいにしている人が「隊隊」を捕らえて金持ちに売ったという話がある。金持ちの家では虫を銀製の小箱に入れ、夜、枕の下に置いた。こうすれば夫婦共白髪になれるということだ。

***愛の草** 魏晉南北朝ぎしんなんほくちようのころは詹草せんそうという植物に媚術の効果があると信じられていた。晋の学者、張華ちやうかの『博物志』には「詹山せんざんの帝女が詹草と化し、その葉はしげり花は黄色で

実は豆ほど、服用した者は男に愛される」とある。

詹草は詹山という山の上に生えている。この草は炎帝えんの娘、瑶姬ようきが死後変身したものだといふのだ。葉が多く、黄色い花が咲き、小豆ほどの実がなる。女性たちはこの実を食べれば恋が成就すると信じていたのだ。詹草が現在の何にあたるのかはわからない。

人間社会の基本は夫婦から。古来より夫婦和合は重要なテーマだったとみえ、世界に知られた仏教遺跡、敦煌とんこうから出土された古文書にも唐代の婦女の媚術が記された写本がある。それによると四つの方法があるという。

一、夫を楽しませるならば、妻ははだして夫のへそをかくとよい。

二、夫に対する尊敬の念を示し、その憐愛れんあいをさずかるには、夫の親指の爪を焼いて灰にし、酒に入れて飲むと効果がある。

三、夫への愛を示すには、軽い苦肉の計を弄ろうするとよい。婦女は自分のまつげを四本ぬき、焼いて灰にしたら酒に入れて飲む。すると夫はかならず情愛の念を生ずる。

四、夫の畏敬いけいの念と愛情を勝ち取るには、自宅の門の前、五寸範囲の泥をとり、包んでしまっておくとよい。たいへんな魔力を発揮するだろう。

夫の氣持ちを引くために妻がいかにか心を砕いていたか、目に見えるようだ。

『金瓶梅』の第一二回には「回背オイベイ」という媚術が書かれている。主人公の西門慶せいもんけいがほかの女にうつつをぬかしているの、頭にきた潘金蓮はんきんれんが流れ者の術士じゅつし、劉理星りゅうりせいに頼み「回背」の術をかけてもらうのである。柳の枝を当事者の男女の形代かたしろに彫り、その上に二人の「生辰八字」を書く。

そのあと七七四九本の赤い糸で二体の人形をくくり、男の人形の目を赤い薄絹でおおい、胸あたりに艾もぐさをつっこむ。そして針で男の人形の手を刺し、膠にかわを足にぬり、心変わりした男の枕のなかに隠す。さらに朱で書いたお札ふだを焼いて灰にし、それを茶にまぜて男に飲ませる。男が形代をしこんだ枕で寝ればたちまち魔力があらわれ、もとのように氣持ちがもどり、夫婦は初めて会ったころのように仲良くなるというのだ。

劉術士の媚術の効き目はあらたかで、翌日からさっそく西門慶は潘金蓮を熱愛しはじめ、連日、昼も夜も再びむつまじいあった。

愛する女を振り向かせる

今度は男性が女性の氣持ちを引くために用いた媚術を紹介しよう。

前述した敦煌文書とんこうの写本には、男性用の媚術が数例紹介されている。

一、夫が妻の愛を得られないのは、妻の身に靈魂がついているのである。靈魂をのぞくには、月の最初の日に東南の方角で桃の枝を一本探してきて、それを人形ひとがたに彫り、妻の名前を書いて廁かわやに置く。そうすると妻の愛情がもどる。

東南は吉祥の方角とされており、桃の木は靈を追い払う力があり、廁の汚辱に靈は耐えられないと信じられていた。

二、天干地支の子の日が女性にとって吉日だったが、男性は庚子こうしの日がチャンスの日だった。その日に彼女の名前を紙に書き、はつきり見えるところに貼っておく。彼女にまだ決まった人がいなければ、かならず自分のことを思うようになる。

三、もし男性が思う女性と雲雨うんうをともしたいと思ったら、やはり庚子こうしの日には彼女の名前を紙に書き、自分の腹に貼る。一〇日もたたないうちに彼女は自分のものになる。

四、もし女性に愛されたいならば、彼女の髪の毛をこっそり二〇本ほど集め、焼いて灰にし、酒に入れて飲む。

昔の中国では、毛髪や爪、桃の木などは媚術の小道具というばかりでなく、漢方としても考えられていた。明の李時珍りじちんの『本草綱目』第三八巻には桃の木の治療例、第五二巻には毛髪や爪が薬材の一つとしてあげられている。

李時珍も媚術をよく知っていたようだ。李は雄ネズミの生殖器が最も効果があったが、それには採取の時期が限定された。一月、二月はいつでもいいが、あとは五月五日と七月七日の二日にかぎり、しかも採取するには北を向かなければならないという。雄ネズミの生殖器は採取したら陰干しし、青色の小さい布袋に入れる。男性は布袋を左腕に結び、女性には右腕に結ぶ。陰陽で分けると左は陽を表わし、右は陰を表わすからだ。李時珍によると、こうすれば男女とも思う人の愛を得られるだろうという。

晋代しんには変わった男性用媚術があった。張翬ちようはいという当時の学者が著した『感應類從志』かんのうるいじゆうしに記載されている方法で、好きな女性の月経帯を盗み、それを焼いて灰にする。その女性が自分の家に来るとき、その灰を敷居にまいておく。すると女性はとどまって帰るのを忘れるという。

『金瓶梅』には、仲人業をやっている王婆ワンポが、女たらしの主人公・西門慶に女を手に入れるための五つの条件を提示している。西門慶は薬屋をなりわいにし、若いときから道楽者

で役人にも顔がきき、裏の道に精通してなかなか権勢があった。街で偶然、潘金蓮と出会って一目惚れ。すでに妻妾を四、五人もかかえていながら、なお潘金蓮を手に入れたという。王婆は潘金蓮の隣で茶店を開いているが、海千山千のやり手で、西門慶のようすを見てあらかた察しをつけ、不倫の仲立ちをしてやろうとしゃしゃり出てきたというわけだ。口八丁手八丁の王婆が出した五条件というのは、潘驢鄧小閑の五文字である。

「潘」とは晋代の有名な美男子、潘安のことだ。彼の美男子ぶりは潘安の歩くところ女性がついてきて離れず、潘安に果物を投げてラブコールする女たちが群がったという。まず男は美しくなければならぬ。

次の「驢」はロバのことである。男ならば顔だけでなく陽物もロバのように長く強くなければ女を満足させられない。

「鄧」は漢代の大富豪、鄧通のことで、この人は文帝に自分の後庭（肛門）を提供し、寵愛を得て銅山を賜り、銅銭を鑄造して大富豪になった。鄧通は現在でも大富豪の代名詞である。王婆は男たるもの財力がなければならぬというのだ。

そして「小」は物事を慎重に行えという意味で、何があっても怒らず、笑って耐えること。

「閑」は時間の余裕のことだ。閑がなければじっくり女とつきあってやることができない。

『金瓶梅』のこの段の描写はおもしろい。当時の男女の性愛文化を反映している。王婆の提示した五つの条件をまとめれば、前の三つは容貌と性的な能力と財力で、小説が書かれたころから四〇〇年あまりたった現在でも、この三条件を男性に求める女性は少なくない。

王婆の言葉を受けた西門慶は、即座に請け合った。

「その五つのことならばみな大丈夫です。容貌と財力は潘安や鄧通にはおよばないが、ふつうの人よりずっと上だ。とくに股間の陽物はかならずや女を満足させる」

一九四九年から、中国で閉鎖的な社会主義制度が実施され、六〇年代、中国人はいままで想像もつかなかったほどの苦しい生活をいられ、結婚相手を求めるのに経済的な条件を出すなど考えられなかった。したがって、結婚は愛情が何より優先された。財産など考える余地はなく、ベッドが一つあればよかった。七〇年代になると愛情優先主義は少々さめてきて物欲が人々の話題にのぼるようになった。

当時、上海の適齡期シヤンハイの若者たちのあいだで「三十六脚」なる言葉が流行していた。脚というのは家具の脚のことである。ベッドが四本、サイドテーブルが四本、鏡つきのクローゼットが四本、引き出しが五つついた小型のタンスが四本、六人用の大テーブルが四本、四本脚の椅子が全部で四つ。合計九つの家具があれば結婚の条件にかなうとされた。当時、

家具はたいへん入手困難で、政府は結婚する青年に「家具購入券」なる配給キップを発行したが、手に入るのは四、五カ月先だった。

八〇年代、鄧小平とうしょうへいが開放式の社会主義制度に方向転換すると、若者たちの結婚意識にも大きな変化が訪れた。当時流行した戯れ歌ざが彼らの本音を伝えている。

一番の美女は米軍に嫁ぐ（欧米人と結婚すること）

二番の美女は国軍に嫁ぐ（国軍とは蔣介石しやうかいせい率いる国民党軍のことで、台湾人と結婚すること）

三番の美女は日軍に嫁ぐ（日本人と結婚すること）

四番の美女は偽軍に嫁ぐ（偽軍というのは日本のバックアップで南京に政権を立てた汪精衛せいえいの部隊のことで、留学帰りの中国人と結婚すること）

五番の美女は共軍に嫁ぐ（共軍は毛沢東の部隊のことで、国内の男性と結婚すること）

この戯れ歌は八〇年代後半の物質主義への傾向をよく表わしており、愛情などは地に落ちたようだ。しかし「五番の美女」といえども結婚相手に対して求める条件が低いわけではない。当時、あるコンピュータ会社勤めの三〇歳近い女性は、自分の夫になる条件とし

て二つのことを提示した。一つは年収が五〇万元以上であること、もう一つが自家用車を持つてゐることである。平均的な月給は一〇〇〇元から二〇〇〇元である。どこを探したら月に四、五万円稼ぐ男がいるというのだろうか。自家用車というのも高額なうえに入手がむずかしい。彼女の夫探しは砂場で砂金の粒を探すようなものだ。

またもう一人、大学を卒業したばかりの女性が男性に「七要」を突きつけた。

- ① 二七歳以下。
- ② 身長一メートル七八センチ以上。
- ③ 学歴は本科以上。
- ④ 月収八〇〇〇元以上。
- ⑤ 英語堪能。
- ⑥ 三LDKの住まい。
- ⑦ 外資系企業のエリート社員。

というものだ。すでに外資企業が林立している昨今、最後の条件はクリアできそうだが、残りの六条件をパスできる人物は一〇〇〇人に一人いるかどうか……。

九九年末、ある新聞に北京大学の学生たちが予測した二一世紀における恋愛スタイルが掲載された。それはとりもなおさず、彼らの将来の愛情生活のイメージである。学生たちはいくつかの特徴をあげた。ラブレターのやりとりや恋人探しがインターネットを通すようになるだろうとか、連絡やラブレターは携帯電話や携帯テレビになるだろうなどといった予測があったが、一部ではすでに現実のものになっている。それ以外に、「月または、人類が生息可能な星を開拓し、恋人の森をつくる。地球人はその土地か川を購入して恋人へのプレゼントにする」という意見はなかなか夢が大きい。「愛を語る詩人に代わって愛を語る演説家が受けるようになるだろう」という予測もあった。これは経済優先の世情を反映したものか、もはやロマンティックに愛の詩を歌うのは時代遅れ、むしろ自分の経済力や仕事の能力をドラスティックに演説し、真正面からぶつかっていいこうといういまどきの若い人の感覚のようだ。

第18回 肉体で観る観相術

顔を見よ

孔子曰く、

生死命あり、富貴天にあり。

また曰く、

君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏るる。

人間はすべて天命を背負って生まれてきた。天下の庶民から最高権力者の皇帝まで、天命から逃れることはできない。そして男女の結びつきも天命によって決定づけられているのである。中国では古代から天命についての研究がなされており、命理学という学問体系にまでなっている。そのなかに「観相」というものがある。日本では一般に人相と呼ばれ

るが、目鼻立ちばかりでなく、表情、声、動作、体の骨格やほくろの場所などをも観察する。人の外見から、いままで生きてきた過去を当て、寿命、家運、財運、出世運、健康などの将来を予想するのである。

梁王朝（五〇二―五五七年）には観相学者として名声を得た陶弘景とうこうけいという思想家がいた。陶先生によると「人命稟于天、則有表候于体」（人の命運は天が定めるもの、それすなわち体に表われている）といい、「骨格を見れば生命がわかり、容貌ようぼうを見ればその人の吉凶が見える」という。

たとえば男性の足の裏にほくろがあれば、その人は勇士になり、左の脇の下にあれば官僚になるとされる。また女性の場合、ほくろが腕にあれば貴妃となり、乳頭にあれば貴子を産むといわれる。

男女の結びつきも観相によって判断できる。

昔、一般庶民も皇帝も、生涯のパートナーを自分の意思で決めることはできなかった。ほとんどの場合、身分などを考慮したうえ、占いで相性を調べ、慎重に決めたものだ。このとき能力を発揮するのが人相見の相士そうしである。中国の長い歴史のなかで最もよく知られている相士が、春秋時代の鄭ていの国の人、姑布子卿こふしけいである。彼は若いときの孔子の人相を見たという。

姑布子卿は、そのとき孔子の顔をじつと見つめ、こう言った。

「頬は堯ぎょう、瞳は舜しゆん、首は禹う、唇は皋陶こうとうと似ている」

堯、舜、禹、皋陶というのはいずれも伝説上の帝王で偉人と呼ばれる。堯は陶唐氏族の首領で、舜は有虞氏族の首領、禹は有夏氏族の首領である。これらの三大氏族はほかの小さい氏族集団と連盟を組んでいた。堯、舜、禹は軍事的盟主についた人物で、禹は次の盟主として夷族の首領、皋陶を後継に推薦したのだが、運悪く先立たれてしまったので、後任は別の人物にゆだねた。

そして姑布子卿は孔子に「あなたは必ず聖人になるだろう」と述べたということだが、たしかにその通りになった。

中国の皇帝には観相に特別の関心を持ち、学問とする人物も少なくなかった。明の成祖、永楽帝えいらくていもその一人だ。彼は観相によって、女性をその体臭で判断した。観相ではよい香りのする女性を貴いものとし、異様なにおいのする女性をいまわしいものとする。皇帝はそれを実践の場で使ったのである。

毎年、真夏に行われる後宮の美女選びには、かならずみずから出席し、陣頭指揮に立ったものだ。美女選びはいちばん暑い日に行われた。全員に厚着をさせてさんざん歩かせ、ぐっしより汗をかかせるのである。その後、息は臭くないか、体臭はどうか、永楽帝はま

るで飢えたイヌのようにくくん女性にの体に鼻をつけてかいでまわり、好みの美人を選んだそうだと。

中国の一大帝国を築いた漢の高祖こうそ、劉邦りゅうほうは、若いとき呂公りこうに見込まれ、娘の呂后を妻とし、そのおかげで大出世をとげた。呂后の父が観相をすることができなければ、劉邦はただの無頼漢で終わっていただろう。

『史記』には劉邦が「家人の生産作業を事とせず」という人物として記されている。劉邦は仕事が大嫌いで怠け者だったようだ。ある日、呂公はけんが沛県はいけん（劉邦の故郷、現在の安徽省宿県）にやってきたとき、歓迎の宴席で劉邦に目をとめたのだった。彼は劉邦に声をかけてこう言った。

「私は観相に関心があり、いままで多くの人の顔を見てきました。しかし、あなたのようなすばらしい相を拝見したのは今日が初めてです。唐突な話ですが、私の娘をぜひ嫁にもらってやってくださいませんか。お気に召せば、これにまさる幸福はございません」

娘とは、のちの呂后である。劉邦がどのような顔をしていたかは『漢書かんじよ』「高帝紀こうていき」に描写されている。それによると、鼻が高く、竜のような広い額をもち、りっぱな鬚ひげを生やしていたという。なおかつ左の股に七二のほくろがあったというが、呂公はそこまで見たのだろうか。

呂公の妻が、大事な自分の娘を街の無頼漢にやっってしまうことに大反対したことは言うまでもない。それまでも県の長官との縁談があつたのに、それを蹴^けつて決めたのがごろつきのような男なのである。反対しないほうがおかしい。だが、呂公は「女子供が口出しすることではない」とはねつけてしまった。

やはり先見の明があつたというべきか。のちの劉邦は挙兵し、秦を滅ぼして漢王朝を打ち立て、輝かしい竜冠を手にしたが、その裏には権謀術策にたけた妻と、呂公をはじめとする呂氏一族の大きな援助があつたことはいうまでもない。

劉邦の熱烈なファンだった毛沢東も、青年時代にある人から人相を見てもらつたことがあつた。一九一七年、師範学校の学生だった毛は、休暇を利用して蕭瑜^{しやうゆ}という友人といつしよに貧乏旅行をしたが、一泊した旅館の女主人、胡玉英^{こぎょくえい}が毛沢東の人相を見たということである。そのことは蕭瑜が回顧録に書いている。

胡玉英はこう言つて、毛沢東の将来を予言したのだった。

「毛さんは総理大臣になれる相と、大盗賊になれる相の二つを持っています。人情味が欠けているようですが、勇氣と大志にあふれています。道は決して楽ではなく、前途多難ですが、五〇歳まで生きることができれば、あとは安心です。妻は六人できますが、子供は少ないでしょう」

なるほど、たしかにそうだった。ただ、正式に妻となった女性は四人である。最初は親が決めた妻で羅一姑、次が毛沢東の恩師・楊昌済の娘、楊開慧、そして賀子珍、最後が延安で結婚した江青である。

下を見よ

観相のなかで、たいへん変わっているのが肛門と生殖器の相である。古典観相經典のなかで最も権威があるのが宋の陳搏が著した『神相全編』である。全体で三〇万字にものぼる大著のなかで、たった二〇〇字足らずではあるが、肛門と排便、生殖器に関する記述があるのである。

一つは巻八「西岳先生相法」で「肛門がよく乾燥している者は富貴榮華を授かる」というもの。もう一つが巻四の「相下部」である。

相下部

谷道急而方者貴。水道寛而円者賤。大便細而方者貴。小便如撒珠者貴。陰生黒子者貴。陰茎聳出者賤。陰頭縮者貴。陰毛逆生者、夫婦不相和睦也。又云…大便遲緩者富貴、速者賤。小便散如雨者貴、直下如筒攢者賤。詩曰…寿夭窮通各有因、相来僻処便

驚人、陰頭有痣人多貴、谷道無毛一世貧。

これをわかりやすく要約するとうなる（全訳しなくても漢字をじっくり見ると理解できると思うので、あえて残しておきたい）。

①肛門は締まっついていて、四角をなすものが貴い。

②肛門に毛のない者は、一生貧乏で終わる。

③男根にほくろのある者は運勢が開ける。

④小便是雨のように散れば貴く、棒状になつて流れ落ちるのがいやしい。

⑤便は細く四角で、ゆっくり出るものが貴い。

女性性器については日本の古典的医学書『いしんほう医心方』に、中国の生理知識として女陰についての記述がある。それによると、古代、中国には、女陰が満月になると大きくなる女性があったとのこと。このときは女性と交わらなければ死んでしまうという。月が欠けると大きさは徐々に小さくなり、もとの大きさになると男と交わる。そうしなければ生きられないという。二週間で男女が入れ替わる一種の両性具有で、陰陽人と呼ばれ、きわめて淫蕩いんどうにして、正常な結婚はできない。

＊医心方——日本に残された中国の房中術書。中国には中世以前、膨大な医学的セックス・ガイドブックがあったことを証明する目録が残っていたが実物は残らなかった。しかし一部は日本に伝えられ、平安時代の漢方医、丹波康頼たんばやすよりが集めて復刻し天皇に献上した。『素女方』『素女秘道経』『玉房秘決』『彭祖養性』などが含まれる。『医心方』は江戸時代に写本が刊行され、近代、中国の学者、葉德輝しやうてくきが江戸写本をもとに原典を再現した。

第19回 陽気な中国セクハラ語

性愛的漢字文化

中国は古来、文字といえば漢字しかない。近代に入ってローマ字化や注音字母という表音記号ができたが、やはり数千年の漢字文明を凌駕する^{りようが}ことはできなかった。漢字はほとんどが表意文字で、小さな四角い空間に書かれた文字が表わす意味はたいへん深い。

たとえば「兄」という字は、この一文字で「自分と同じ親から生まれた年上の男性」を表わす。表音記号のアルファベットの言語ではこのような表現はできない。英語では brother というが、これは「男の兄弟」しか表わさず「年上の」という限定がつけられない。だから「兄」を正確に翻訳するには elder brother などと限定語をつけなければならぬ。

周知のとおり、漢字は概念が高度になると偏とつくりを組み合わせて表現するようにな

る。たとえばへんには手に関する動作を表わす言葉が多い。担ぐ、押す、投げる、採るなどはみな手の動作だ。足を使う動作の言葉は「走」と「足」の部首に集中している。

セックスにまつわる言葉にも、もちろん漢字の単語がある。いったいどの部首にあるかというと「尸」と「毛」の部首に多い。「毛」は理解しやすいと思うが、「尸」は少々事情がある。単漢字の「尸」は手足を伸ばして死んでいる死体の意味だが、その部首に収められている文字のうち、尻、局、屁などは、人が歩く姿を横から見た文字「尺」と九、句、比（放屁の音を表わす）との組み合わせである。「尺」ないし「尸」のこの部分が人のお尻の形なのである。同じ「尸」の部首に収められていても、しかばね屍と尻や屁は由来が別なのである。

セックス関連の漢字は、日本で一般に知られていないものが多い。少し紹介してみよう。

屁……男根。見て字のごとく、股から吊り下がっている物ということだ。

尻……女陰。これも見たまま、ストレートに表現した漢字である。

屣……精液。男女の肉体が重なると、男が漏らすということだろうか。

骸……精液。この文字は分解すると骨、血、水の三文字に分けられるが、第2回で述べたように、精液が血や骨と同じくらい大事なものとして考えられていたことがよくわ

かる。

尿……男根。求めるといふ文字があるといふのは、女性の側から考え出された文字なのだろうか。

毬……男根。中国でも現在では使われなくなった文字。明代の艶情小説『繡榻野史』に見られる。陰毛の上の淫乱なやつとでもいふことだろうか。

毬……男根。尿の戸を毛に替えた文字だと解釈できる。やはり女性から求められる物といふことだろうか。

毬……女陰。毛と皮（皮膚）があるからか。

中国の艶情小説にかならずといつていいほど頻繁に出てくるのが「呂」「中」「串」といふ漢字である。

明代の艶情小説『痴婆子伝』にはこうある。女主人公の阿娜は一二歳で性に目覺めた。彼女が家の老僕の息子で風流男の俊と火遊びをし、セックスの手ほどきを受けるくだりがある。阿娜はまず唇を奪われた。俊と唇をあわせ、舌を入れたり、唾液を吸ったりし、こ

う教えられたのだ。

「これは呂の字を書くといふのですよ」

なるほど、こんなことをするものかと阿娜は甘美に酔いしれながら身をゆだねた。すると俊が迫ってくる。

「では、中の字を書きましよう」

「えっ？」

阿娜に「それはなんのことか」と聞くひまも与えず、俊はすばやく手を彼女の下半身にすべりこませ、濡^ぬれている割れ目に中指をぐつと突っ込み、言った。

「ほら、これが中の字ですよ」

要するに「呂」は接吻^{せつぶん}、「中」は指か男根を女陰に挿入することを表わす。「串」は女二人と男一人のセックスのことだ。

国をあげてのしる

^{クオマー}国罵という言葉はどの辞書にも載っていないが、中国人ならばほとんどだれでも知っている言葉だ。意味はののしりあいのときに使うセクハラ的内容の罵声^{はせい}である。国という字がつくのは、国をあげて中国人全員がののしるという意味である。

この言葉は、意外なことに中国を代表する文豪、魯迅^{ろしん}によってつくられた。魯迅がなぜそのような言葉をつくったのか、不思議に思うかもしれない。だが、中国人は魯迅をして

嘆かわしいと言わしめるほど、人前で口汚くのしり、おおっぴらに喧嘩けんかをする。中国人はそれが当たり前になつていたので、とくにめずらしいとも思つていないが、中国人のはげしい口喧嘩を見て、たいていの外国人はびっくりする。国罵クオマーは国の恥なのだ。

私の友人のある日本人は、中国旅行中に見たバスの車掌と乗客のはげしい口論の光景をおどろいたように話してくれた。バスが停留所に止まったとき、降りてきた乗客が車掌と窓越しに大声で怒鳴りあつていたというのだ。何が原因か知らないが、混んだバスの中、どのみち不愉快なことはかりである。車掌は相手につばをペツと吐きかけ、バスを発車させたが、乗客も引つ込んではいない。バスを追いかけながら大声でののしつてゐる。日本ではどんなに血氣盛んな地方でも、走るバスを追つてまで喧嘩をする人はいないだろう。友人は中国語に堪能だが、車掌と乗客が何を言つてゐるのか、さっぱりわからなかったという。

だが、私にはおおかた想像がつく。こういうときは国罵クオマーに違いないのだ。数え切れない国罵クオマーボキャブラリーのなかで中国を代表する国罵クオマーは以下の三つである。

ツアオニイマー
操你媽……おまえの母ちゃんを犯す

ツアオニイナイサイ
操你奶奶……おまえの婆さんを犯す

ツァオニイワンシーバークイ
操你祖宗十八代……一八代前の女を犯す

操という字は、じつは当て字で、ほんとうは「禽」という字だ。肉に入るとは字形としてあまりに露骨なので、ふつうの辞書からは消されている。

卑猥ひわいな内容の罵詈雑言ばりぞうごんは世界のどの国にも存在している。英語文化圏での禁句といえば「cunt」「cock」「fuck」などだが、「国をあげてのしる」ほどボキャブラリーに富み、かつだれもが口にするという国は中国をのぞいてないだろう。で、下半身はいつものしりの対象だ。

アールアールン
阿汚卵（役に立たない男根）……ばかやろう「南方で多く使われる」

タイヤオマオワイ
屌毛灰（焼けた陰毛の灰）……ばかやろう「男に対してのみ使う」

ツァオタン
操蛋（汚い睾丸）……ばかやろう「男に対してのみ使う」

ランウーゼー
爛汚尿（ただれた女陰）……尻軽女「南方で多く使われる」

ラオビイイエン
老屁眼（ケツの穴）……恥知らず「男女に対してともに使う」

魯迅は中国人の口の悪いことを民族の恥と考え、「国罵」といって嘆いた。一方、仲間

同士で使えばいつそう親しみが増す「国罵」もある。たとえばこんな言い方がある。

ノンブーヤオオオルアン
儂不要老卵（おまえのチンポは偉そうだな）……うそを言え「南方でよく使われる」

ツァオクママー
操他媽的（犯すぞ）……くそつ「何か失敗したときなど。北方でよく使われる」

ゴウビーダオツァオ
狗屎倒糟（交尾中の雌イヌが膺けいれんを起こす）……ばかやろう「協力してくれな

い仲間をののしる」

ディナオマオディエン
屌毛電影（陰毛映画）……ろくでもない映画

これらの言葉はセクシャルな感覚がまったくない。スラングとしてすっかり定着しているので、その本来の意味を知っている人はほとんどいない。

性器を攻撃の対象とする中国のスラングやののしり言葉は、子孫繁栄を至上としている儒教思想の疎外現象だと思う。子孫繁栄のため性の強者になりたいという願望が強く、その反動で性的な攻撃をするのではないか。敵視する相手には「おまえは性的に劣等である」という言葉で攻撃し、精神的ダメージを与えるわけだ。「国罵」の典型は「操你媽」（おまえの母親を犯す）である。この言葉の真意は、「おまえの母親から生まれてくる者は、すべて俺のタネだ」ということだ。

日本語にはこのような性的なのしり言葉は少ない。「クソタレ」のように同じ下でも排泄物のほうにポイントを置くのが特徴だろうか。

しかし、まったくないわけでもない。一九九四年、当時の社会党が自民党と連立政権をつくったとき、新聞社はいっせいに「野合政権」の四文字を見出しに掲げ、はげしい批判の砲火をあびせかけた。中国人の私としては、まさか「野合」などという下品な言葉が新聞紙上に堂々と載るとは思ってもみなかったので、仰天してしまった。卑猥なボキャブラリーには事欠かない中国でも、新聞にそのような言説が載ることは考えられない。野合は日本語でも中国語でも「私通」「姦通」の意味だが、中国ではたいへん罪深い語感がある。経済開放が進んだ現在の中国では、セックスに関することもありあいとおっぴらに語られるようになった。かつて男性も女性も地味な色の人民服に身をかため、恋愛ですら口にすることができなかったが、いまではビキニの水着の女性モデルが出ているポスターなども街中に見られるようになった。

セックスの隠語も新しい言葉ができていく。たとえば「打洞」(穴を掘る)といえ性交の行為、「喝壺」(壺で水などを飲む)というのはフェラチオを表わしている。また、女性の裸の上半身は「上集」(映画などの第一部)といい、下半身は「下集」(第二部)という。

おもしろいのは「挿^{チャ}胖^{パン}仔^ツ」という隠語だ。胖仔^{パンツ}は「太^{チャ}つち^ツよ」「でぶちん」という意味だが、発音は日本語の「パンツ」とよく似ているので下着の意味でも使われている。中国の売買春の「業界」ではなぜか「挿^{チャ}胖^{パン}仔^ツ」というと、日本人の客をとることを指す。というのは日本人男性は太っている人が多いので、体型から見てモノもりっぱだと思われるということだ。売春婦たちは「挿^{チャ}胖^{パン}仔^ツ、お一人様！」といって、日本人の客が来たことを伝える。同時に、パンツの中のモノを入れる（挿）ことも指す。

性の王者・イヌ

中国語の罵詈雑言にはイヌも登場する。日本語でも「犬畜生」「犬野郎」などというように、イヌは人をおとしめるときにも用いる。たとえば、

コウリ
狗日

コウトシ
狗東西

などは犬野郎という意味で使われる。日はセックスのことで、東西は物という意味である。どちらもイヌと交合して生まれたやつという意味で用いられる。

なぜイヌがセックスや罵声に用いられるのだろうか。それはイヌの交合に関係があるのではないだろうか。まずイヌの交合は継続時間がほかの動物にくらべ長いということだ。

牛は俗に「牛の一突き」などというように、たったの一突きで射精が終わってしまう。象は挿入から射精まで三〇秒もかからない。チンパンジーの場合、長くても一五秒だ。ライオンもほんの一瞬で終わってしまう。しかし、イヌは交尾のために一時間以上も費やす。

しかもいったん、ペニスが挿入されると、人間が引き離そうとして引く張っても、結合をはずすことはできない。というのも、イヌのペニスは完全に勃起する前に挿入され、膣内にすっかり入ると先端が急速にふくらみ、大きな球体となって抜けないようにはまってしまうのである。射精が終われば球体は縮小してもとにもどり、抜けるようになるわけだが、なんと「抜かずの三発」で三回もの射精が可能だというのである。

そんなことからイヌとセックスとの結びつきが考えられたのだろう。艶情小説『肉蒲団』の主人公、未央生の男根改造手術にイヌのペニスが使われたという話も、こうしたイヌへのセックス信仰があったからにはかならない。

唐代の文献で医学書の古典『洞玄子』のなかに特効薬が記載されている。それによると「肉菰蓉と海藻をこまかく砕いて篩ふるいにかけ、月の第一週に殺したイヌの肝とまぜて、男根にくじようように三回に分けてぬり、早朝起床後に井戸水で洗い流す。これを繰り返すうちに三寸大きく

なる」とある。

また、インポテンツを治す民間秘方として、イヌのペニスを強火で焙じ、粉にして酒にまぜて飲むという方法がある。ほんとうに効果があるのかどうかかわからないが、現在でも実践する人が少なくない。

一方、イヌがのしり言葉になった理由には、このような説がある。昔、中国では農耕民の漢族と狩猟民の北方民族との対立があつたといわれる。つまり、土を耕して生活している漢族を、狩猟民が南下して襲い、農作物などを掠奪するといふ歴史の構図が連綿と続いてきた。漢族と北方民族との対立は中国史の一角をなしているほど大きな民族問題だつた。狩猟民はモンゴル族、満州族、チベット族を問わず、みな馬やイヌを家畜として飼ひ慣らしている。だから漢族はイヌを嫌うというのだ。

しかし、民族問題より、やはり「性の王者」としてのイヌへのある種の変態的憧憬のほうが主な原因のように思える。中国人はイヌのように性の達人になりたいと思うと同時にイヌをねたみ、性に貪欲なことを侮辱の材料にするということだ。

イヌの罵詈雑言もたくさんある。

狗頭軍師（イヌの頭の軍師）……老獪な策士

狗腿子（イヌの足）……悪人の手先

犬牙交錯（ギザギザのイヌの歯）……凶悪な顔つきの形容

狗血噴人（イヌの血で人を汚す）……暴言をあびせる

狗嘴里吐不出象牙（イヌの口から象牙は出ない）……品性のない人間はどのみち上品

なことは言えない

掛羊頭、売狗肉（羊頭狗肉）……看板にいつわりあり

狗胆包天（イヌの肝つ玉程度のくせに天を包もうとする）……不遜にも大それたこと

をしようとする

狗屁（イヌの屁）……くだらない。価値がない

狼心狗肺（狼の心、イヌの肺）……腹黒いこと

狗眼不識泰山（イヌの目に泰山は見えない）……物知らずで相手の偉大さがわからない

い

このように、中国ではイヌは嫌われ者になっているが、日本では、人とイヌとが交合する話がある。有名な『南総里見八犬伝』がその一つだ。下総の国が隣国に攻められて苦戦しているとき、国主の義実がつい苦しまぎれに、飼犬の八房に、敵の大將の首をとって

きてくれたら娘の伏姫ふしひめを嫁にやろうとつぶやいたのだ。犬はたちまち闘志をみなぎらせ、敵陣に突入し、まもなく首をくわえてもどつてきた。

義実八房をほめてやったが、伏姫のことは触れないまま約束を反故はごにしようとしたところ、伏姫は、人間でないからといって約束を破ることは、人の上に立つ武士としてあるまじきことだとたしなめ、みずから身を八房に託し、その背に背負われて山に入ったという話である。そのあと八人の剣士が後の世に登場することになるのだが、八房と伏姫はいわば人獣相姦するのである。

江戸時代の浮世絵にも人獣相姦の光景を描いたものがある。『幾世夢いくよめ』（国麿画）と題するもので、下男が、主人の濡れ場ぬればを障子のすきまからのぞき見し、興奮して雌イヌを犯しているという図だ。

人獣相姦も性学のテーマである。人と動物との性交は人類の歴史ではかなり早期から見られるもので、中国にも記録が残っている。文献によると、イヌやブタとの性交があるが、ときには魚との性交、トラなどという信じられない話も見られる。考証家によると、古代中国人はガチョウと交わることを好んだという。周王朝の時代、新郎は一羽のガチョウを携えて新婦の両親に面会し、拝礼するという風習があったが、それと関連があるのかどうか。なかなか興味つきない問題である。

第20回 張競生先生の「性交救国論」

北京大学教授のセックス理論

時代の風雲が二〇世紀から二一世紀へ移り変わった現在、ちょうど一〇〇年前を振り返ると、中国にじつにユニークな人物がいた。その人の名は張競生^{ちやうきやうせい}、性学の第一人者にして生育計画研究の第一人者、また愛情評論家でもある。古今を通じて中国では非常にめずらしい性愛の研究家であった。時代は中国が西欧列強によって領土を侵食されていた混迷の時期。張競生先生は「性交救国」を旗印に掲げ、中国人の人種改良と国家の近代化を説いた。

生まれは一八八八年、青年時代に辛亥革命^{しんがいはい}に参加し、汪精衛^{わうせいゑい}や孫文^{そんぶん}とも面識があつた。革命が失敗して袁世凱^{えんせいがい}の帝政に移行するとフランスに留学し、その間に女色の風潮に染まり、少なからぬ浮き名を流したという。フランス滞在が政治活動から性学へと研究テーマ

を変えざる契機になった。張競生は哲学博士として帰国し、まず活動の第一に広東政府に対して計画出産の政策を訴えた。避妊教育を施し人口を抑え、国民の素質をレベルアップすることを説いたのだった。結果、報告書はつきかえされ、軍閥の省長しょうちょうから精神病患者あつかいされて終わった。

一九二一年、三三歳の張競生は、北京大学学長の蔡元培さいげんぱいから教授として招聘しやうへいされ、人生美学や社会美学を教え、学生たちの人気を博した。だが、彼の名を一夜にして全中国に知らしめたのは、一九二六年四月に出版された著書『性史』(性育社刊)である。この本は一般からの体験談の投稿を掲載したスタイルをとり、男女の赤裸々な性生活を細部にいたるまで余すところなく表現したものだった。本が出版されるやいなや社会に大きな衝撃が走った。一九二〇年代といえ、中国はまだ封建的な前近代社会で、女性には男性の従属物にすぎなかった。このような社会背景にあつて、女性がオーガズムに達したり、性の楽しみを語ったりするさまを記述したこの本は一大センセーションを巻き起こし、人々をおどろかせた。警察や学校は発禁処分を示す布告を張り出し、ちょうど印刷されていた第二集も焼却処分にされてしまった。

こんな一件があつたあと、張競生の名を冠した『性史』が次々出版された。著作権が確立されていなかった時代、売れるとなればどんどん偽作がつくられるのである。

一九二六年、張競生は北京大学を離れて上海に行き、書店を開いたが、性関係の書籍を販売したために警察の取り締まりの対象になり、閉店に追い込まれる。

一九二九年、杭州こうしゅうに旅行に行ったとき、性学を宣伝し若者に思想的な毒を流したという罪で現地の政府に捕らえられる。出獄後にふたたびフランスへ渡る。

一九四九年、中国共産党政府によって広東省の文史研究館の職員として配置されるが、一九六九年、今度は共産党政府によってまた逮捕され、翌年脳血栓のために死去する。

張競生はなぜそれほどまでに性にこだわったのだろう。彼は中国の近代化が遅れているのは人の先天的な肉体の欠陥によるものだと考えたのだ。張先生に言わせれば中国の男女は先天性の奇胎きたいだという。

一九二七年、張競生は上海の月刊誌『新文化』に「性美」と題する文章を発表した。そこで中国人が性の摂理が弱いこと、正しい性交ができないことを指摘し、それが原因で胎児が正常に発育しないのだと述べている。多くの子供は生まれてから成人するまでのあいだにさまざまな障害が出るが、最も目立つのが顔面と胸、陰部だという。

顔面の障害というのは美醜のことで、張先生は中国人が醜いと主張した。いわく、

中国人が醜いのは鼻が小さくて低く、頬骨が突き出て目玉が出ており、耳が前に向い

ていて口が横にひろがつているからだ。もし鼻が高くなれば、中国人の顔はたちまち変わり、美しく輝くだろう。この目標達成のためにはまず性欲を高めることからはじめなければならぬ。性欲の旺盛な人は鼻が発達するものだ。また女性の場合、性欲が強い人は「面若桃色」のことわざどおり頬がきれいな桃色をしている。処女の美しさもそこにある。性欲旺盛な男性は濃く美しい髭が生え、人の羨望を集める。しかし中国ではこのような男女はめったに見かけない。

また張競生先生は胸について述べる。

中国女性の最大の欠点は胸が発達していないことだ。そのうえにきつく布を巻いてしまうので、女の美も何もなく、男の胸と変わりはない。

胸に関して、張競生は「大奶復興」(ターナイフ・シン) (大きなおっぱいルネッサンス) と題した文章を書いており、中国人女性がなぜ胸を束縛するのかについて論じている。

老人の回顧によると、女性が胸を束縛する習慣ができたのは二〇世紀初頭だったとい

う。最初にしたのは妓女^{きじよ}たちで、胸をいじろうとする客が爪を立てて困るので、触らせないように布をきつく巻きつけたのだそう。また第二の理由は、胸をゆるめておくと淫売の女だと思われ、一日中男につきまとわれる。また客は処女を最もよろこぶので、妓女たちはどんなに多くの男と寝ていても今日が初めての処女のようにふるまう。彼女たちが工夫を凝らすのが胸なのだ。つまり男は胸の小さい女性はまだ發育中の処女だと思っているからだ。中国には「貧者は富者に学び、富者は娼^{しょう}に学ぶ」という悪習があるが、胸を小さく見せる風習は一般の女子が妓女をまねしてひろまったようだ。

陰部について張競生はこう述べている。

人体の構造からいうと女子の骨盤は男子のものより大きい。中国人女性が性欲の發達が遅れている原因は、臀部^{でんぶ}が小さいからである。性欲が弱ければ陰部も發達せず、陰部が發達しないと臀部も發達しない。同様に、男子も陽部が發達していないので、逆に臀部の外観はたいへん發達しており、女性のものである。女性の性欲でいえば、女陰の前庭球は「重なつた花蕊^{かすい}」のかたちをしている。しかし中国人女性の陰部はこうした理想的なかたちをしておらず、ほとんど「うすつぺらな落ち葉」だ。前庭球の退化が中国人

女性の性欲に直接影響を与えているのである。

張競生先生はまた言った。

中国では男は男の美に欠け、女は女の美を失い、男は女性化し、女が男性化している。堂々たるますらおは小作りで色白の書生になり、利発で快活な乙女たちは、よたよたした老婆になってしまった。中国の男性の大多数はインポテンツで早漏である。これも女性の性欲を弱める原因だ。閑をもてあまして^{ひま}いる男女が、漆黒の暗闇^{くらやみ}で抱きあっているのに何もしない。彼らのあいだに生まれた子供は男が男でなく、女が女でない醜さ。男女が交わるとき女性を性の高潮に導けば、かならず女性が男性の性能力を高めてくれる。

*蔡元培——1868～1940年。浙江省生まれ。近代国民教育の推進者。1902年、章炳麟^{しょうへいりん}らとともに中国教育会を組織し、愛国社を結成して民主革命思想を広める。ドイツに留学するが辛亥革命直後に帰国。1917年、北京大学学長に就任。1931年満州事変後は抗日を主張。終戦を見ずに香港で病没。

高潮に噴出する第三の水

性の高潮とは何か。それは張競生先生が発明した「第三の水」と呼ばれる有名な学説を見なければわからない。女性が性交するとき、「第三の水」を出したら性の高潮に達し、よい子が生まれるというのだ。出なければよろしくないという。張競生先生によると女性性は性交するとき自然に二種類の水を分泌する。第一の水は膣膜の排泄液で、もう一つの第二の水が陰核の内部にある香液だという。この二種類の液体は性交のとき排泄される。しかし女性には性の高潮を迎えなければ排泄されない液体があるというのだ。俗にそれを「淫水」というが、それを第三の水と呼ぶ。第三の水を分泌するには三〇分くらいかけて性交をする必要がある。そして分泌するかどうかは男性の性能力にかかっている。男性は、女性が第三の水を分泌すると同時に格別の興奮を覚え、猛烈な射精をすることができる。こうした性交で生まれる子供は健やかである。中国人の弱さは中国人女性が第三の水を出していないのと直接関係していると張先生は主張するのだ。

しかし、陰部が発達していれば長時間かけなくても第三の水は出るといふ。彼はフランス滞在中、一六、七の小柄なスペイン人女性と熱愛したことがあった。彼は回顧録にこう書いてゐる。

「彼女の性器はまるで回転する三重の門のように、触れるだけで魂がぬけるようだった。

その子宮頸は生き生きとし、中国の古典でいう『花心』のように、男子の陽具と結合すればすぐに活動する。このような女子はごく自然に第三の水をたくさん分泌し、受胎しやすい」

中国人を人種的に改造するためといって、張競生は「外婚制」を実行することを奨励した。「外婚」というのは現代風にいうと国際結婚である。彼は一九二五年、「美的社会組織法」という論文を書き、こう述べている。

「呼吁、中国男女は積極的にロシア人、欧米人、オーストラリア人、そしてアフリカ人と通婚し、軟弱な性格と体格を改造しようではないか」

彼は日本人との婚姻についてたいへん興味深いことを述べている。

「我々は日本人と通婚すべきである。日本人には白人種の才能はないのに、彼らと比較して中国人を軽視している。しかし我々留学生は少なからぬ『下女』を妾や正妻にしてやっている。これは『徳をもつて怨みに報いる』というものだ。しかし彼女たちは体がわりあい丈夫で、物事をするに向上心がある。『中日親善』という言葉を耳にすると嫌気がするが、婚姻を通じていまだ見ぬ希望を手に入れよう。日本人諸君、門を開けよ、我々に日本人女性を妻として娶らせよ。我々も門戸を開いて日本男子が中国人女性を妻として迎えられするようにしてあげようではないか」

張競生は多くの文章を発表して学説を広めたが、ときには公開の場所でも演説した。たとえば一九二〇年代、上海で結婚の立会人をしたとき、衆目の集まるなか、あいさつを述べる機会を与えられると、新婚初夜はどのように性交するか、言葉づかいもあからさまに扇情的な話をぶって、盛装でかしこまっている来賓を仰天させた。

「最初の夜は新郎は衝動にかられてはならない。自主的にセックスを回避すべきである。なぜなら新婚初夜は新婦は過度の緊張で情緒不安定になっているからだ。初夜は新郎新婦ともただ談笑し、抱きあうだけにするほうがよい。」

二日目の夜は男子は新婦の純真な心と愛らしさを大事にすべきである。男はセックスを要求せず、ただ新婦の胸を愛撫するだけにし、もしがまんできなければ陰部の外皮をいじるとどめなさい。

新婚三日目の夜、新郎は自由にやりなさい。ただし処女膜を破ることは女子の肉体と精神に大きなダメージをもたらすことを知っておくべきである。したがって新郎は内功（生殖器の抽送）と外用（愛撫）の両方を行うこと。ワセリンを女陰と自分の亀頭にぬっておきなさい。まず大事なものは女子をベッドに横たわらせ膝をゆるめさせることだ。男子はまず陽具を女陰の外と大腿部だいたいのあいだに入れ、陽具で女陰をこする。女子が動きはじめて液体が流れてきたら陽具をゆつくりと陰戸に移動し、一ミリ一ミリあり蟻がはうように進む。も

し女子が痛がったらずぐにやめること。外縁の摩擦で女子が極度に興奮していたら挿入してもよい。このように少しずつゆっくり行い、今晚できなければ翌日の夜に延長し、同じようにやること。女子は興に乗れば膣から液が流れてくる。そうなれば男子が性欲の衝動のままに処女膜を破つても大きな痛みは感じない。ときにはまったく感じず、第一歩から快楽を得ることができる。この方法はすでに多くの人が経験しているので、信頼できる。どうか、新郎はこの方法をためてほしい」

張競生先生のようにここまで思い切った著作をし、演説をした性学者はきわめて少ない。最も尊敬にあたいたいするのは彼の生き方、そして学問には少しのウソもなく、攻撃を恐れず、あくまで真理を追究している姿勢である。

魯迅はこう言つて張競生の性の理論を高く評価していた。

「張競生の偉大な論に私は敬服した。文を著すにもこのようにしたいものだ」

第21回 芸を売り身を売る、民国時代の花柳界

文化サロンの華・妓女

清の光緒帝（在位一八七四―一九〇八年）の後、珍妃は、宮廷で実権を握る西太后と対立して恨まれ、捕らえられて井戸に投げ込まれ殺されたことはよく知られている。悲劇的な彼女の死がかえって珍妃の名声を高め、清の宮廷の女性のなかでもとりわけ美しいという評判が立ち、のちのちまで艶情小説の題材にとりあげられている。ごく最近でも香港で珍妃を主人公にした小説が出版されている。それによると珍妃は井戸に投げ込まれる前に、西太后から派遣された殺し屋を自分の体で買収し、宮廷から逃げ出して娼館の妓女になり、たちまち売れっ子になるという展開が始まる。その後義和団の乱をきっかけに八カ国連合軍が北京に侵入し、外国人たちが花柳界にもやってきて、美人の珍妃がぶ男のロシア兵の相手をし、一夜の枕をともして意気投合し、その男の妻となりロシアに逃げるとい

う話である。

奇想天外なストーリー仕立てで思わず頬がゆるむが、皇帝に仕える女官が妓女になることは実際にあった。たとえば皇帝の怒りを買ったり讒言さんげんされたりした女官は、斬首ざんしゅでなければ妓院行きだった。妓院には戦で捕虜になった若い女性や、罪に問われて失脚した大家の娘も流されている。

妓院というのは、我々がいまイメージする売春宿とはだいぶ違うものである。第一に妓院はほとんどが国営だった。妓女は「官妓かんぎ」の称号を受けた身分を持っており、妓院のことも「教坊きょうぼう」と呼ばれていた。第二に妓女たちはセックスではなく主に芸を売り物にしていた。歌舞音曲のうち、歌を専門とする歌妓、楽器が専門の楽妓、舞が専門の舞妓、宴席で酌するのが専門の酒妓など、得意分野によって分かれていた。第三に妓院が相手にする客は高級官僚か文人だった。

たとえば唐代には多くの詩人が輩出し、詩の水準が最高潮に達したが、それには文才のある妓女たちが果たした役割が大きい。士大夫しだいふは酒色におぼれ、妓女と遊ぶことを誇りにしていた。たとえば杜甫とほや柳宗元りゅうそうげんのような文人は家に少なくとも一人の妓女をはべらせ、出かけるときは二人くらいの歌妓を連れて歩くのがふつうだった。大官僚ともなると家で大勢の妓女を養っていた。文人たちは詩をつくると彼女たちに歌わせ、妓女は新しい詩を

広める役割を担ったのだ。詩人と妓女の關係は、客と女郎との關係であるばかりでなく、ともに詩を詠じたり曲をつくったり、歌を歌ったりする仲間でもあった。王昌齡おうしょうれいには双環かん、李白りはくには金陵子きんりやうし、白居易はくぎやうしには阿軟あなん、元稹げんしんには劉採春りゆうさいしゆん、杜牧とぼくには張好好ちやうこうこうというように、彼らにはかならず才媛がパートナーになっていた。

温庭筠おんていきんは長いあいだ、歌妓と同棲どうせいし、自由気ままな生活をしながら音楽の才能を生かし、多くの詩を残した。明の太祖、朱元璋しゆげんしやうは妓院に二枚一組の詩を贈った。その上の句は「此地有佳山佳水、佳風佳月、更兼有佳人佳事、添千秋佳話」(ここは風光明媚めいびで風月も美しいばかりか、人も事もすばらしく、さらに千秋佳話を添える)とあり、下の句が「世間多痴男痴女、痴心痴夢、況復多痴情痴意、是幾輩痴人」(世の中に男女の痴情、痴夢多く、何世代重ねたことか)となっている。妓院には文化的な雰囲気濃厚にたちこめていたのである。

***義和団の乱**——19世紀末、中国を揺るがせた宗教的集団の反乱。天災と政治の混乱のため疲弊した民衆が、山東省さんとうしやうにあった宗教的秘密結社・義和拳教の扇動に乗り「扶清滅洋」を掲げて集団的に鉄道や教会などを破壊し、外国人を襲撃、首都・北京に流入。西太后はこれを征圧せず、日・英・米・仏・露・独・奥・伊の八カ国連合軍が自国民救済の目的で鎮圧。1901年、清との間で義和団事変最終議定書を締結。

魔都・上海の花街事情

アヘン戦争後、上海は中国で最大の経済都市に急成長した。商業が発展すれば娼妓業は膨張する。とくに外国租界の拡大にもなつて各種の妓院が華やかに発展した。資料によると一八六〇年、上海で名前のある妓院は一一〇〇あまりにのぼつた。記録に残っていない小さな妓院となれば数え切れないだろう。上海は中国最大の淫窟都市になつてしまった。外国の租界が中国人の妓院に対してまったく干渉せず、見て見ぬ振りの態度をとつたことが根本原因である。文化の香りの漂う妓院は、こうして体を売るだけの墮落した売春宿に転落してしまつた。

一九三〇年代、上海には公娼があつたが、闇で女性を斡旋する場所はたくさんあつた。たとえばコーヒー・シopp、遊技場、茶館で働く女性の多くは、男性客もとつた。女性のマッサージ師や按摩師も場合によつては娼となつたので、妓女の人口は多く、一二万人もいたということだ。この数字の差を見ても、戦前の上海がどんな都会だったのか想像がつくだろう。

当時、わりあい高級な客相手の妓院は「書寓」と呼ばれた。「書寓」には「上盤子」^{ツアートツ}「出条子」^{シウジエ}「住局」^{ラプ}「拉鋪」^{ツウト}「時条」などというサービスの種類があつた。

「上盤子」は毎日午後四時から深夜一二時まで、客が妓女を選ぶと、その妓女の部屋に茶菓子とタバコの載った盆が運ばれる。妓女は客と菓子などを食べながら談笑し、体を触らせて遊ばせるのである。上盤子では数人で一人の妓女をとつてもよいが、手を出してもいいのは一人だけで、あとの客は妓女と談笑するだけである。

「出条子」は客が妓女を連れて外出し、ホテルなどに同伴して遊びの相手をする事。

「住局」は妓院に一泊し、妓女と夜をともしすること。

「拉鋪」は昼間の時間帯で、一時間だけのタイムサービスである。

「時条」は妓女が客と外泊すること。

妓女たちは午後四時になると街頭に立ち、客を引く。妓院では笛や琴が鳴らされ、歌声が深夜遅くまで響く。

妓院のロビーは豪華なしつらえで、広々としていた。部屋に置かれる家具調度品も吟味してあり、羅のとはりには銀の鉤がかけられ、ベッドには豪華な綾錦の布団がしかれていた。化粧道具は何でもそろえてあり、窓のそばの小机には磁器の花瓶、自動的に時を鳴らす置き時計が置いてある。鏡つきの衣装ダンスに、籐の椅子、ロッキングチェアが壁にそって並べてあった。中央には紫檀の丸テーブルが置かれ、壁には有名な書画家の作品がかかっていた。

妓院には厨房ちゆうぼうもあるので、食べたいものを注文できる。点心類も豊富だ。贅沢ぜいたくな生活に慣れ親しんでいる客たちにとって、妓院に一步入れば何でも思いのまま。故郷を離れ旅から旅で生活し、上海で一人旅館暮らしをしている王侯公子、官僚、富豪、文人などは、妓院がほとんど安住の地となり、帰ることを忘れ、妓院に友人を呼んだり、そこで商談をしたりしていた。

妓女たちは、上品な美しさを出すために薄化粧の者もいたし、妖艶ようえんな美を演出するため濃い化粧の者もいた。客へのサービスはいたれりつくせり、情愛をこめて話しかけ、客を最高の気分にする。世話焼きの女たちがタオルや茶、タバコなどを運び接待するが、アヘンを吸引するときは、毛氈もうぜんをしいた長椅子に横たわれれば、彼女がすぐに向かい合ひに横たわり、火をつけてサービスする。

妓女たちは客の気持ちをつなぎとめるために、こんな表現を用いて客を呼んだ。

寶貝児パオベイ……かわいい人

心肝児シンカル……大事な人

爸爸バーバ……パパ

親人哪チンレンナ……肉親同様の人

チャンプ
丈夫……うちの人、あなた

ココロ
哥哥……お兄さん

シンカン
心肝哥哥……大事なお兄さん

セックスでエクスタシーに達したとき、あるいは達したように見せるとき、よく使われるのが次のような言葉である。

ア ウォーオスーラ
啊、我要死了……ああ、死ぬ

ウォブーヤオ ウォブーヤオ
我不要、我不要……いやいや

クアイラオラ ウォバ
快饒了我吧……もう許して

クアイフオスーラ
快活死了……このまま死んでしまおう

ウォオヤオチンシエンラ
我要成仙了……あの世に行きそう

ウォオヤオスニイ
我咬死你……（男の体をかみながら興奮して）かみ殺してやる

妓女たちのセックスの技は「捏打擰罵咬、顛歪摆晃揺」の一〇文字で言い、戯れ歌にして歌われた。一つの漢字に一つの意味がある。

捏……つまむ

打……たたく

擰……つねる

罵……軽くののしる

咬……かむ

顛……腰を上下に動かす

歪……腰を斜めに動かす

摆……腰を左右に振る

晃……腰をゆっくり上下に動かす

揺……腰を小刻みに動かす

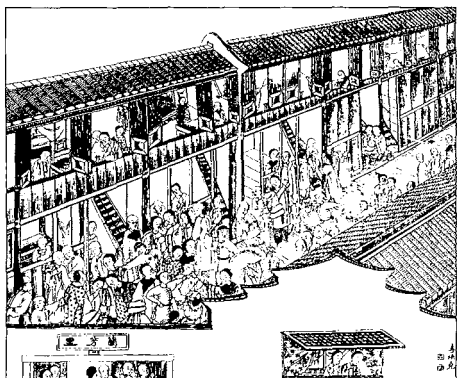
裏町の娼婦稼業

高級な妓院以外にも三、四人規模の小妓院もあった。店は看板を出しておらず、秘密裏に営業しているものである。最低ランクの妓院は「釘棚タインバン」と称し、みな貧しい家の婦人が、家族の糊口ここうをしのぐために体を売っていた。このようなところの妓女はみなるべくな化

粧もしておらず、貧しい身なりで、表情も憔悴^{しょうすい}していた。客というのも車引きや港湾労働者、商店の売り子など社会の底辺で働いている男たちだった。

釘^{タイン}棚は低収入の労働者が住むスラム街にあり、かんたんな仮小屋で、室内は汚く、光もほとんど入らないひどいところだったので、ふつうの人は絶対足を踏み入れなかった。料金はたったの〇・三元である。一九三〇年ごろ、上海ではアイスクリームが〇・一五円で売られていた。アイスクリームたった二つ分の価格である。だから店としては薄利多売でなければやっていられない。さつさとすませて効率よく回転させるのだ。そのすばやさというと、ほとんど釘^{くき}を打つようなもの。それで「釘^{タイン}棚」と呼ばれている。

客は入ったかと思うとすぐ出てくるので、商売繁盛のときはひっきりなしに客が出入りする。もし夜宿泊するときには料金を高く請求されるが、最高でも銀貨一元を超えない。当時、看板を出している妓



上海の裏街の妓院。妓女をめぐるもの事を描いたもの（『点石齋画報』）

院はどんなに安くても宿泊は最低六元した。

売春宿には店ではなく、個人営業のものもあった。たとえば北京の「土娼」^{トウチヤン}と呼ばれる娼婦がそうである。商売の場所は、胡同^{フートン}と呼ばれる小道の入り組んだ裏通りの奥で、門の扉には「〇〇〇寓」という四文字が看板として掲げられていた。周辺の民家とまったく変わらないようだが、通人が見ると一目でわかったという。何が違うかというと、門の中のようすがだいたい決まったパターンにもとづいていたいらしい。門を入ると左側か右側のどちらかに、壁につけてテーブルが置かれ、そばの壁には真つ赤な神馬の絵が貼ってあった。それにはたいてい「〇〇正神」といった字が書かれ、神馬の絵の左右には金の造花が一對にそろえて飾られ、前には香炉が置かれていた。家の窓という窓には切り絵が貼られ、愛らしい雰囲気がかもしだされていた。テーブルの脇の椅子には短いキセルを手にした中年女か老女が座っており、だれか通りがかりに中をのぞいたりすると、にっこり笑って手招きし、「遊んでいらっしやいな」と声をかける。これが土娼^{トウチヤン}のやり手婆である。

土娼には三種類あった。一つはやり手婆の娘か嫁で、家産がなくなり、仕事も見つからず、生活に困って体を売ることになったものだ。上述の風景はそういった家の状況である。もう一つはやり手婆のいない家で、化粧をして門の前で手仕事をしており、たいてい幼い子供がそばにいる。客が彼女の前を通りかかって目配せすると、女は子供に「お父ち

やんが帰ってきたよ」と呼びかけ、ふりむいて客に笑いかけ、秋波を送る。客はこの女が気に入れば、門をくぐって中に入る。

あと一つは女学生のなりをしている娼婦である。たいてい下女か乳母のような老女を連れ、マーケットや公園などをぶらぶらしているのだ。もし客が気づいたようなら、老女に「水を飲んでくるわ」と言い、先に行ってしまう。客のほうは彼女が気に入ったら、残っている老女に住所を聞いて時間を約束し、予約する。時間は昼でも夜でも客の都合に合わせる。

高級妓院の遊び方

高級妓院の書寓しよぐうに上盤子、出条子、住局などのサービス項目があることは前述したが、その名が広く知られている高級妓女と遊ぶとなると、ことはかんたんではない。一晚枕をとにもするどころか、たとえ髪の毛一本でも触れるごとに札束がどんどん飛んでいく。それが名妓の体の値段である。彼女たちは金をしほりとるのに手段を選ばない。

名妓と遊ぶには三つの関門がある。それを「三部曲セブチエ」といい、「茶を飲む」「局に呼ぶ」「花酒を喫す」に分かれている。

「茶を飲む」が最初の関門である。妓院に入ると「外場アウトター」と呼ばれるフロア係がいて、

新顔の客だと見抜くと「いらっしやいませ！」と叫び、ホールのテーブルで茶を入れる。妓院の茶碗は凝っていて、新顔の客には円頭茶碗と呼ばれる厚みのある小さい茶碗に茶を入れて出す。この茶碗はとくに何の特徴もない安物だ。客が希望する妓女の姓名を言うのと、指名された妓女はにこやかに出てきてあいさつをし、客としばらく雑談する。

次にもし妓女が自分の部屋にもどって手の込んだ茶碗を持ってきて、茶を入れ直して客に勧めたら順調なスタートだと思つてよい。妓女がこの客と交際してもよいという意味表示だからだ。これを「茶碗を加える」という。妓女が一度交際を許した客が気に入らなくなり関係を切りたくなつたときも、茶碗で意思表示する。その客が来たとき、いままでのきれいな茶碗を出さず、別の茶碗で茶を入れるのである。これを「茶碗を替える」という。客のほうも別の主^{あるじ}ができたのだと察し、きれいに身を引く。

「茶を飲む」で妓女と仲良くなつたらいつでも来たいときに来て、おしゃべりすることが出来る。それを「局に呼ぶ」という。それが第二関門になるわけだ。

中華民国時代もその前も、男性は集まりに妻を同行する習慣がなかった。ふつう良家の婦人は平素は家の奥深くに住まい、やたら外に出歩くものではないと思われていた。そこで多くの男性は、宴会などの席に妓女をともなつて出席することが流行になつていた。もし、妓女を連れずに出てきたら恥をかくことになる。「局」というのは集まりのことだ、

「局に呼ぶ」というのは妓女をパーティや宴会などの集まりに同伴することである。局には「酒局」(宴会)、^{バール}「牌局」(マージャン会)、^{シニエ}「戲局」(芝居見物)などがあるが、「酒局」がいちばん多い。同伴するには「局票」^{ナユビヤオ}がいる。局票というのは美しい赤い絹でつくったカードの一種である。客は彼女を呼ぼうと思ったなら、もらい受けていたこの局票に自分の名前と集まりの日時・場所などを書き、自分の使用人かパーティ会場のボーイに妓院までとどけさせた。妓女たちのあいだで名刺が流行すると、局票は名刺で代用されるようになった。

妓女が集まりに出ることを「局に出る」という。いまのように交通が便利でない時代、出かけるには輿^{こし}に乗ったものだが、一三、四歳の少女の妓女は男衆の肩に乗せられて出かけることもあった。やがてモータリゼーションの時代になるとバイクに乗っていく者、また人々の注目を集めるのでリムジンに乗っていく者もあった。

局こそ名妓の晴れ舞台だった。彼女たちの主たる仕事だったといえよう。同伴料金の支払い、常連客のときは端午の節句と、中秋、大晦日^{おおみそか}のときにまとめて集金し、あまりなじみのない客は数日後に決済された。これらの収入は妓院の収入の大部分を占めた。名妓ともなれば一回の出演料ならぬ出局料は三〇〇〇元あまり。民国初期、サラリーマンの年収が一〇〇元ちよつとの時代である。

三番目の関門は「花酒を喫す」である。客は妓女としばらく交際したあと、彼女の部屋で酒食を用意して客を招く。二人の関係が深まっていることを友人たちに公表するのである。花酒を飲めば、妓女はパトロンを持つ身の上になったのだ。高級官僚や大富豪が一人の妓女をキープすれば、彼女の衣食住はすべて客が面倒を見る。またそれとは別にとりついで女性にも巨額の謝礼が支払われる。しかし、妓女はいままで通り局に出ることができない。つまりほかの客との交際はしてもいいということだ。上海の名妓はふつう五、六人から多ければ七、八人のパトロンがいた。

いずれにしろ、高級妓女とつきあうには財力がなければならぬ。彼女たちは表面上客と親密そうにつきあうが、実際はつかず離れずの関係を保つようにしている。ことに万貫の財産を持つている金持ちは、あの手この手で籠絡し、骨抜きにしてしまう。男のほうも相手が望んでも得られない高嶺の花だからこそ、思い切って散財するのだ。ある程度金を使わせたなら、一度しつとりとなつき、膠のように漆のようにべったりついて遊ばせる。その後ふたたびつかず離れずの関係にもどり、場合によっては手を切る。要は、客の片思いを利用して財布を傾けさせるのである。

しかし、名妓の栄華は短い。若さと美貌が衰え客足が遠のいた妓女は、いままでの生活レベルを保つためになりふりかまわず金を稼ごうとする。その手口には百戦錬磨の商人も

仰天するだろう。

中華民國一五年（一九二六年）、上海に陸文琴りくぶんきんという名妓がいた。一〇年ほど名をはせたスターだったが、容色が衰えたので商売をやめ、することがなくなってしまう。しばらくするとある省で水害が発生し、甚大な被害が出て、社会問題となった。と、彼女の脳裏に一計がひらめいた。災害の義援金のために個人で宝くじを発行したのである。総額が一〇万元、一枚一元で販売し、当たりくじの番号はボールを引いて発表する。一等の賞金は彼女自身が妻になるというものだった。たとえそれが富豪だろうと、しがない文人だろうと、軍人だろうと、また老人でも苦力クワリイでも、宿無しだろうと、当たった男にはかならず陸文琴が妻になると約束した。広告にはこうあった。

「この身を犠牲にし、たとえ貧夫に嫁いで苦境におちいろうとも、被災民が助けられるならばいとわない」

もっとも、広告には条件が一つついていてた。

「一〇万元のうち陸文琴が三〇パーセントをとって嫁入りの費用にする」

広告が出されるやいなや上海中騒然となり、くじを買い求める者が殺到し、半月もしないうちに完売した。しかし当選発表の日、陸文琴は突然姿をくらまし、消息不明になってしまったのだ。そのとき男たちはやっと騙だまされたことに気づいた……。

宋代から、中国では客と妓女とのあいだで「花榜^{かぼう}」という遊びが伝えられている。この遊びは現在の美人コンテストにあたり、美しい妓女に投票してランキングするものだ。たいへん人氣があつたらしく、専門書まで出された。明代には氷華梅史の『燕都妓品』と、潘之恒の『金陵妓品』という二冊の本がある。『金陵妓品』では妓女に「品」「韻」「才」「色^{しよく}」の四項目の基準をもうけることを主張していた。

「花榜」は清末から中華民国初年にかけてエスカレートし、妓女の情報を掲載した新聞があいついで発行されるようになった。たとえば一八九八年の『笑笑報^{しやうしやうほう}』、一九〇一年の『春江花月^{しゆんこうかげつ}』、一九〇二年の『花天日報^{かてんにつほう}』、一九〇三年には『花世界報』などなど。これらの新聞は独自に妓女をノミネートし、一般客に投票させ、ランクを決めた。発表の当日、上海の街頭では新聞が飛ぶように売れ、人々はまるで天下の一大事のようにしきりに噂^{うわさ}し、その話題に盛り上がった。上位入賞を果たした妓女には新聞社から額が贈られ、名声は大いに高まり商売大繁盛になった。新聞社のほうでも「花榜」のおかげで新聞は売れるし妓女たちからは賄賂^{わいろ}や謝礼が入った。

妓女コンテストの極めつきは民国時代の「花国大統領選出選挙」だった。一九一一年、ついに封建制が終わって共和制による中華民国が発足し、大統領制が導入された。花国大

統領の選挙は一九一七年、近代国家の誕生を見習って上海の有名な歓楽場「大世界」で行われた。結果、冠芳^{かんぼう}が花国大統領に、菊第^{きくてい}と見錦^{けんきん}が副大統領に選ばれ、蓮美^{れんみ}が花務総理に選ばれた。

第22回 貞操の話

林彪夫人・葉群の不倫スキャンダル

五〇歳以上の日本人ならば中国の「プロレタリア文化大革命」をご存じのことだろう。当時、毛沢東は「最高統帥」と呼ばれ、林彪りんびょうという人物がナンバー・ツーとして「最高副統帥」といわれた。毛沢東は神であり、林彪も神だった。しかし、林彪は文化大革命の初期、その神格が危うくなったことがあった。というのも、妻の葉群ようぐんは若いとき素行不良で、林彪と結婚する前にすでに処女を失っていたという情報おほやけが、匿名の手紙によって公にされたからだ。手紙には林彪らと行動をとみにした王実味おうじつみ（林彪らとともに動いたインテリ）と葉群が関係していると、林彪の子供が別の男性の子であるとか書かれており、もしそれが事実だとすると、林彪の神格は崩壊し政治生命に大打撃を被るこうむことになる。林彪は公安の人員を全国的に動員し、手紙の主を徹底探索させた。やがて犯人は党中央の宣

伝部長の妻、嚴慰氷げんいひょうであることが判明した。手紙の日付は一九六六年五月一日、当時、嚴慰氷は精神病にかかっていたというが、内容が一人歩きすると一大事になる。林彪は証明書を書き、党中央へ報告した。証明書の内容はこのようなものだった。

党中央に証明いたします。

- (一) 葉群は私と結婚したときは純潔な処女でした。結婚後も身をかたく守っています。
- (二) 葉群と王実味は恋愛関係にあったことはありません。
- (三) 老虎ラオフーと豆豆トウトウは私と葉群との子です。
- (四) 嚴慰氷の反革命的な書簡に書かれたことはすべて捏造ねつぞうです。

これらの一連の事実は一九七一年、林彪がクーデターに失敗し、航空機事故で死亡したのち、広く一般の人に知られることになった。

葉群夫人にまつわるスキャンダルはこれに終わらなかった。葉群が夫・林彪との性的関係に不満があり、秘書の張と肉体関係を持ったというのだ。

「政治のことばかり考えている夫とは肉体関係がほとんどない。こんな哀れな私をだれか慰めてくれないか」

と部下の張秘書を誘惑し、肉体関係を強要したと、これは当の張秘書の手記によって暴露されている。

一九四九年、中国共産党が政權を掌握したとき、党は「人類を代表する最も先進的な思想」を標榜^{ひょうぼう}していたものだが、こと女性に対する貞操觀念だけは男權至上主義の封建時代のままだった。葉群に対する中傷はそのよい例である。文化大革命と称する政治的潮流においてもなお処女が大問題だったのである。封建時代においてはさらにきびしかったことは自明の理だ。

中国の処女検査法

昔、中国には女性の処女を調べる方法があつた。いちばんかんたんなのは、きめの細かい灰を桶^{おけ}の底にまき、下帶をといた女性を桶に座らせ、こよりなどで鼻の穴をくすぐってくしゃみをさせる。もし処女でなければ上から息が出ると同時に下からも気が漏れるので、灰が吹き飛ばされる。処女であれば下の気は漏れないので灰はそのままだというわけだ。

古来より中国皇帝の子弟は「竜の種」といわれ神聖視された。もちろん、皇女はみな処女でなければならぬ。各王朝の皇室で用いられた検査方法もある。

検査方法はこうだ。七斤（約一・八キロ）の辰砂^{しんしゃ}（鉱石の一種で、水銀とイオウの化合

物。朱砂しゆしゃ、丹砂たんしゃともいい、赤色の顔料に用いるをヤモリに食べさせたのち、それをつぶ

して汁にする。ヤモリは中国語で「壁虎ビーフ」というが、別名が「守宮シヨウゴン」で、この赤い汁も

「守宮砂シヨウゴンシャ」という。赤い汁を女性の体に塗っておくと、処女のうちは赤色のさめることが

ないが、男性と性交渉を持ち、愛欲に燃えたとたちまち色が消えてしまうという。

これは古代の話だが、中国ではつい最近まで女性たちには肉体にすらプライバシーがなく、処女検査に似たようなことが当然のように行われていた。

いまから十数年ほど前、私が来日してちょうど二年目にあたるとき、第一家も上海から東京へやってきた。そのとき、弟の妻から「月経検査制度」がなくなり、女性たちがよるこんでいるというニュースを聞き、私もうれしく思ったものだ。

「月経検査制度」とは何かというと、上海で実施されていた慣習的な制度で、女性の月経や妊娠などを管理するものだった。

現在とは違って、当時の中国は企業、工場、教育施設などはすべて国営で「単位タンウェイ」と呼ばれ、生活全般にわたる福祉や管理などもみな所属する企業、工場などが行っていた。

そのような時代、女子工員の月経まで検査して管理していたというわけだ。現在は月経のときは使いやすいナプキンが出回っているが、以前は「衛生紙」という紙を用いていた。

紙は女子工員たちには無料で配布されるのだが、一人一人が毎月工場内の医務室に受け取

りに行かなければならない。受け取るさいには、なんと、先月使用した衛生紙と交換するという条件がついていたのである。経血のしみた紙を提出し、先月たしかに月経があったことを証明しなければ、紙は配布してもらえないのである。既婚女性が妊娠するにも、人口管理のために毎年割り当てがあり、単位の許可があつて初めて妊娠することができる。それに違反すると養育手当などがもらえないなどの罰則もついていた。

医務室の担当者はそれを記録し、もし受け取りに來ない女子工員がいれば、上司に報告し、原因調査に乗り出す。このことが周囲に知られると、たちまち噂がたち、当人は白眼視されてしまう。医務室から配布される四角い衛生紙は、未婚の女子工員たちには「貞操証明書」であり、既婚女性には「計画生育成績表」となるのである。

「人はみな幸福で自由な生活を送る」ことを理想とする社会主義国家の、これが実態だったのだ。

処女信仰の犠牲者たち

私の友人の一人に、この「月経検査制度」のためにひどい苦痛を味わった人がある。姓は林、かつて上海で私と同じ集合住宅に住んでおり、私にとっては弟のように親しい友人だった。江蘇省のある貧しい農村の生まれで、幼いとき両親に連れられて上海に出てきた

ということだった。その彼が三〇歳のとき、鄭ていという女性と知り合い、結婚の約束をしたのだが、周囲の祝福も受けているというのに、住宅取得の申請をしても割り当てされず、結婚は先へ先へと延ばされた。そのうち彼女の月経が来ず、妊娠したことがわかった。

彼女は工場では毎年「生産模範兵」として表彰され、労働模範の栄誉ある称号を持っており、周囲から「先進分子」として尊敬されていた。もし妊娠したことが知られると、これらの榮譽が剝奪はくだつされるばかりでなく、世間から冷たい目で見られ、「恥知らずな女」「処女ではない」などと陰口をたたかれ、ふつうの生活をしていられなくなる。もちろん、フイアンセの林くんも「素行が悪い」といわれ、仕事に差し支えるようになるだろう。

二人は悩みに悩んだあげく、無認可の民間医のところに行き、こっそり墮胎だたい手術を受けたのだ。翌月、彼女は経血のしみた衛生紙を医務室に持っていく、無事新しい衛生紙の配給を受けることができた。だが、たかが生理用品のために支払った代価は大きかった。やはり民間医はよくなかった。その後、正式に結婚したものの、何度妊娠しても流産してしまい、ついに自分たちの子供はあきらめ、養女をもらうことにした。

前時代的な処女信仰のために、彼ら二人は心と体に大きな傷を残すこととなった。このような体験は彼ら二人だけではない。ちょっとした事故が原因で処女膜が破れてしまった女性が結婚できなくなった悲しい例もある。

一九八五年には、ペンフレンドとして手紙のやりとりをしていただけで周囲からとがめられ、自殺してしまった中学三年生の少女がいた。彼女は上海に住む平均的な家庭の少女で、夏休み、安徽省の黄山へ遊びに行ったとき知り合った青年と気が合い、帰ってからずっと手紙で交際を続けていた。工場や学校が生活単位となっている中国では、手紙も単位内部にある郵便物受け取り室にとどけられ、そこから本人に渡される。その受け取り室の人が、あまりに同じ人からの手紙が多いというので疑いをかけ、単位の管理者に通知して調査がはじまった。やがて先生や周囲の大人たちから「いったいどういう関係があるのか」と問いつめられ、少女は行き場を失ってビルから飛び降りてしまったのだ。

第23回 品のない話

社会主義的猥談

中国にはこんなことわざがある。

「妻は妾さいしやうにしかず、妾は婢ひ（はしため）にしかず、婢は妓ぎ（女郎）にしかず、妓は窃せつ（不倫）にしかず、窃は説せつ（おしゃべり）にしかず」

性の楽しみは妻より妾、妾より下女、下女より娼婦、娼婦より不倫、不倫よりおしゃべりが最高だというのである。実際の行動に出るより、セックスを話題にして話の花を咲かせることがいちばんの快樂というわけだ。こういう話題を中国語では下流話シアリウホウという。

しかし中国人はめったにこのような話をしない。中国社会では、猥談わいだんなどを口にするのは教育レベルの低い人間がやることで、教養のある人はしないという考えがある。猥褻わいせつな話を人前ですると「野蛮人」だと思われるので、みずからの価値を落とすようなことはし

ないのである。

ところが、日本人はこのような話をどこでも自由に話すにはおどろかされる。中国人でも猥談をしないわけではない。しかし、日本人、ことに男性は、昼間から会社や通勤途中など、大勢の人がいる場でも平気で猥褻な話をする。日本では、下品な話であつても、おしやべりのときにはよくある話題として社会的に許されているようだ。

中国社会はこの点、かなりきびしい。ことに文化大革命の時代は、人々が着飾ることすら「悪」と見なされていたから、猥談やセックスそのものを楽しむという考えはまったくなかった。文革は中国史上、前例を見ない性的抑圧の時代である。だからこそ、その反動で、含蓄の深い猥談がかなり生まれていた。その一つを紹介しよう。たとえば「不硬」^{イイ}（かたくない）という笑い話は、極左的な政治路線をするどく批判した反体制的思想をはらんでいるので、人々のあいだでは密かに語り継がれていた。

ある模範的労働者がインポテンツの悩みをかかえたまま結婚した。当然、夫婦の夜の間となみはうまくいかない。しばらくして妻は離婚申請届を役所に提出した。当時、政府関係の機関のうち末端組織に革命委員会というものがあつた。いわば町内会である。近所のおじさんやおばさんが人々の生活のすみずみまで管理したのだ。妻の出した届は委員会に

まわされ、革命委員の幹部が離婚を思いとどまらせようとやってきた。

「なぜ離婚したいのかね。君の夫はまぎれもないプロレタリアートだ。いったい何が不足なのかね」

「……………」

「それだけじゃない。彼は造反派ぞうはん（その当時、毛沢東主席の政策を支持し、直接中央政府とコンタクトがとれた労働者組織）でもある。不満があるとは思えない」

「……………」

「君、彼は毛主席の著作をよく勉強している真面目な労働者だ。公開学習会では何度も講演している。このようにりっぱな男にいったいなんの不足があるというのかね」

「……………」

「はつきり言ってごらん」

うつむいていた妻は、理由の告白を迫られて、恥ずかしそうに言った。

「彼は……彼は……かたくないんです」

「かたくない？ とんでもない。彼のようなプロレタリアートはみなかたいのだ。彼こそ堅物中の堅物ではないか」

幹部の言った「かたい」は決意が固い、気骨があるという意味で、当時は毛主席に対す

る忠誠心の強さを表現した。

「いえ、そうではなく、あの……あのものがかたくならないので、夜の夫婦生活を楽しむことができないのです……」

革命委員会の幹部は、「かたくない」ものが何であるかわかったとたん激怒し、こう言った。

「夫婦生活の楽しみだと？　ブルジョアジーの生活にあこがれて離婚したいというのか。よく聞け。この離婚申請は絶対許可できない。亭主の話は絶対口外するな。プロレタリアートの名誉にかかわることだ。少しでも人に知られたら刑事責任をとらせるぞ」

読者のみなさんにはばかばかしい話だと思われるかもしれないが、一〇年にわたる暗黒の政治動乱をくぐり抜けてきた私や、私より年上の世代の中国人にとっては、たんなる冗談としてかたづけられない真実味がある。当時、人々はこんな「下流話」をして憂さを晴らしていたのだ。

もう一つ笑い話がある。タイトルは「老幹部活動センター」といい、一部の政府の幹部がなかば公然と女遊びをしていたことを風刺したものだ。「老幹部活動センター」というのは八〇年代にできた施設で、古参の退職幹部のために娯楽を提供する場である。映画を見たり、将棋をさしたり、本や新聞を読んだりし、老後の生活を楽しむのだ。

話はこのセンターのことではない。あるホテルのこと。老幹部が一人の売春婦を呼んだ。彼女は白く小さな手で老人の性器をもてあそんでいたが、いきなりかたくなって勃起した。彼女は茶目っ気を出して尋ねた。

「まあ、これはなんですの。ちよっと触っただけでこんなになるなんて」

「これはな、老幹部というモノだよ。きれいな娘さんを見るといつもやりたくなるのだ」というと、老幹部は売春婦の陰部をまさぐった。中国語で「老」は「老いる」という意味のほか、口語では「いつも」という意で使われ、「幹」も本来の幹という意味のほか、に、「やる」「する」という口語になる。この老幹部はだじやれで彼女に応えたのだ。

「ほほう、お嬢さん。わしのこいつはこんなにかたく、君のモノはこんなにやわらかくてぐっしより濡れているんだね」

「私のこれは老幹部活動センターというものだわ！『老幹部』さんに入って楽しく過ごしていただけるの。さあ、はやくお入りになって」

老幹部はたちまち淫心燃え上がり、彼女をかかえると腰をはげしく動かした。

老幹部本人が自分の性器を老（いつも）幹（やる）部としゃれてみせ、売春婦が自分の陰部を老幹部の娯楽場施設だとしやれてみせたわけだ。

猥談罵倒戦争

一九六八年、毛沢東の号令のもと、都市部の知識青年たちを農村へ送り、農場の生産隊に入れて再教育させるという政策が行われた。都市部の家庭では、子供一人を除いて、ほとんど全員が周辺の農村部に移住させられた。中国語でそれを「挿隊」チャートウェイという。日本の戦争中の疎開に共通するものがあるかもしれないが、中学生、高校生たちが親と離れて農業をしながら政治の勉強をし、共同生活をするのである。もちろん、下品な話は御法度だ。しかし、農作業はきびしく、朝から晩まで働きづめなので、現地の農家の人とおしゃべりする機会はなかった。また仲間同士も雑談するひまさえなく、昼間は労働し、時間があれば政治学習に明け暮れた。農閑期や祭りのとき、水利施設を建設するために山中で集団労働をしていたとき、また、雨などで休みになったときなどは、猥談に花が咲いたものだ。農村などでは「打油詩」タイヨウシと呼ばれる戯れ歌がよく歌われた。「打油詩」は日常生活の瑣末なことを題材にした詩で、口伝えで伝えられていくうち言葉も変えられ、だんだん完成されていくのである。

江西省の都昌県の農村に送られた私のある友人は、邵シヤオという一族だけで構成される村に居住したが、その近くに倪ニイという一族の住んでいる村があり、両家は対立していた。ち

よつとしたことで喧嘩^{けんか}になり、一触即発で村をあげての大立ち回りになることもあったという。邵一族は憂さ晴らしに、しばしば卑猥な内容の「打油詩」を歌って倪一族を挑発したそうだ。

独坐書齋手做妻

ひとり書齋に座すればさみしさに手で妻をなす

此情不与別人知

このさまは他人の知るところではない

若得左手換右手

左手を使ったり右手に取り換えたり

便是停妻再娶妻

妻を捨ててまた妻を娶る

一勒一勒復一勒

こすりこすり、またこすり

渾身搔痒骨実迷

渾身^{こんしん}にふるえは響き骨まで酔えば

点点滴滴落满地

点々ばたばた地に落ちる

子々孫々都姓泥^{ニイ}（倪）

子々孫々まで姓は泥^{ニイ}（倪）

倪家の男はみな手淫ばかりしている間抜けだとなじっているのである。

ついでながら、中国ではマスターベーションは非常に恥ずかしい行為であるとされている。男は友人に寝た女の数を自慢することはあっても、手淫のことを話すということはない。

い。

古くから伝えられていることわざにも性の裏話がある。たとえば、

人は蘇州そしゅうに到りて老い、船は揚州ようしゅうに到りて小となる

というものだ。昔の蘇州は、現在でいえば香港やシンガポールのような臨海大都市で、海のシルクロードを通じて交易が盛んに行われ、空前の繁栄を誇っていた。もちろん、花柳界も華やかで、中国一の美女が集まり、美々しい妓楼が立ち並んでいた。地方から物見遊山に來た男はみなつい魅惑の花街に迷い込み、天国にでものはった気分ひたつて時のたつのも忘れ、肉欲の快楽おほに溺れ、ふと気がつくとき見違えるほどにやつれ、老人のような顔になってしまうという。

揚州というところも、かつては中国一の大きな港町だった。南北の物資集散の地として、巨大な貨物船が出入りしていた。水路でここまで來た客船や貨物船は、揚州の船のにぎわいにまぎれて、たちまち小さくなってしまう。揚州の花街は陰部の大きい妓女が多いということでも有名だった。それを知らずにやってきた風流男たちは、闘いに挑むのだが、一番となるとおのれの武器の小ささを思い知らされ、しつぽを巻いて帰るしなくなるという

うわけだ。これもまた「船は揚州に到りて小となる」。

二〇世紀前半、日本は東アジアに圧倒的な軍事力をもって勢力を拡大し、日本軍は中国に「日本鬼子^{リッベシキイッ}」という悪名を残すほど恐れられた存在だった。

かつて上海の妓女だった女性が回想録を出しているが、それによると、当時は日本の軍人もいい客だったということだ。日本軍が出す軍票は価値があったので、妓女たちには主要な収入になった。だが、日本軍の夜の仕事の評判はかんばしくなかった。

「日本人はかつこうばかりつけているけれど、あっちのほうは『銀樣蠟槍頭^{インヤンラウチヤントウ}』よね」と、陰口をたたかれていたというのである。つまり、銀製のように見える槍^{やり}だが、じつは蠟^{ろう}のようにもろい——いくらも突かないうちに折れてしまう。

日本軍にとって中国人女性^{てこお}はさらに手強い敵だったのではあるまいか。

情歌・好色民謡

年配の日本人の多くは「草原情歌^{ホソウゲンシヨウカ}」という中国の歌を知っている。これは青海省^{せいかいしやう}の民謡で、情歌というように恋愛の歌だ。「草原情歌」は純朴な愛情を歌っているが、民謡には「下流話^{シヤリウワ}」に近い歌詞のものも少なくない。

浙江省の海門地区にはこんな扇情的なものがある。

娘さんはまるで小さなマシン

サトウキビを粗く、細かく自由にしほる

お兄さん、ちよっとためしてごらん

あまくてねっとり砂糖の味

また、こんな歌もある。

八幅の羅のスカートは帳に

豆と麦の田はしとねに

桑の葉は部屋に影をつくる

桑の園の風光はよし

男は女に向かい、女は男に向かい

楽しきこと洞房にまざる

男は女を抱き、女は男を抱き

金蓮きんれんは男ににぎられ

男は小さき足を高く掲げ

まるで蓮はすの実を担いで沼を渡るよう

ライラックの舌は男の口のなか

蜜みつよりも飴あめよりもあまい

気は遠くなつてズボンはびっしょり

牡丹はたんは咲いて男に摘まれ

夫はいまだためさず、君先にためせ

河北省かほくしやうには性に目覚めた少年少女たちのうぶな心を歌った情歌がある。「二八摸シーバモ」(女性の体を一八回さわるの意)という歌はこうだ。

手をのばして娘さんの境界をまさぐる

彼女の境界はちようど三角の田

チコノントンチャン

アイヨー、アイヨー

梭^ひの両端はとんがっている

ひげは二つに分かれている

アイヨヨー

これはまさに熱戦の最中を歌ったものだ。

昨今の中国は改革開放もだいぶ進み、ベッドシーンのあるドラマなどもめずらしくなくなった。しかし、「下流話」はやはりこつそり話すものである。そのなかの一つ、「半分」というものを紹介しよう。

ある新婚夫婦は房事が好きで、毎夜毎夜欠かさず交わっていた。一カ月も続けたところで、ついに妻のほう之音をあげ、言った。

「ねえ、あなた。ちよつとやりすぎじゃないかしら。このまま続けていると、体に悪いわ。少しは健康を考えて体力を節約したほうがいいわ」

夫のほうは、じつは性欲が異常なほどにあり、やらないでいることなど考えられなかった。

「そうかい。じゃ、おれは半分だけ入れるっていうことにするよ。そうすれば半分節約す

ることになるだろう」

妻はそれならばと納得し、につこりした。次の日の夜、夫はまた妻の体を求め、足を開いて陰部に男根を突き立てた。と、ずぶりと全部入れられ、はげしくこすりはじめたのである。妻はもだえながら、「半分だけだと言ったのに」と抗議すると、夫はこう言った。

「あれ、半分というのは後ろ半分のことだと言っていないかったかな」

*草原情歌

青海省民謡

青山梓／劉俊南訳

はるかはなれた

そのまたむこう

誰にでも好かれる

きれいな娘がいる

明るい笑顔

お日さまのよう

くりくり輝く目は

お月さまのよう

お金もたからも

なんにもいらぬ

毎日その笑顔

じっとみつめていたい

山羊にでもなって

いっしょにいたい

毎日あのむちで

私をたたいておくれ

草原情歌

© Copyright 1984 by ビクター音楽出版株式会社
JASRAC 出 0012244-001

第24回 革命軍人

軍人婚姻破壊罪

中国の刑法には、「軍人の婚姻を破壊する罪」という罪状がある。日本人はまさかと思うかもしれない。かりに、日本の自衛隊の隊員や幹部職の妻と恋愛し、女性側が離婚成立させて再婚になるからといって、刑事上の罪にはならない。しかし、中国ではそれは罪となり、刑罰を受けなければならないのだ。現役の軍人の配偶者を、騙したり、不法な手段で登記を書き換えたり、あるいはまだ登記をしていなくても、結婚を約束している段階で、同棲をしてしまったりすると、軍人側から告発されれば逮捕され、三年以下の懲役を科せられるのだ。

北京でかつてこういう事件があった。胡花玉フーホウユイ（仮名）という名の女性が、解放軍のある部隊の連隊長、陳柱チエンチュ（仮名）と結婚した。部隊は国境防衛のため遠方に派遣され、胡花

玉は一人北京に残されたのである。一人さみしく生活していた彼女の前にあらわれたのが、中学のときの同級生、趙海^{チャオハイ}（仮名）である。趙は学生時代から胡花玉を崇拜し、彼女が軍人と結婚したと聞いても、あきらめるところか、ますます思いをつのらせ、押しの一手でラブレターを出しつづけていた。

最初は迷惑がっていた彼女だったが、独り寝のつらさに耐えられず、ちょっとした遊びのつもりでいっしょに映画を見たり、ダンスに行ったりするうち、肉体関係に発展してしまった。やがて、夫婦のように旅行に出かけたりするようになったのである。

陳柱が部隊からもどつて家に帰ってきたとき、恋の熱に浮かされていた趙海は、大胆にも彼らの家にやってきて、陳柱に向かって胡花玉を譲ってくれと申し入れたというのだ。激怒した陳はさっそく裁判所に趙を告訴した。結果、趙海は「軍人の婚姻を破壊した罪」によって二年の懲役を言い渡された。

では、胡花玉も陳柱との離婚を望み、趙海と再婚することを望んでいたとすると、どうなるだろうか。法律上は、どれほど胡と趙の二人が結婚を望んでいたとしても、陳柱の意思が最優先されるようになっていく。中国の法律は軍人の生活を優先的に保護する規定になっているのだ。婚姻法第二六条には「現役軍人の配偶者が離婚を要求した場合、軍人の同意を得なければ離婚できない」とある。つまり、胡花玉は、夫の陳柱がいやだといえ、

一生連れ添わなければならないのである。ただし、夫婦がともに現役の軍人の場合ばかり
あい規制はゆるい。

ある離婚

浙江省のある沿海地方で起きた軍人の離婚騒動は、前述の例と同じように、夫が現役の
軍人で妻が民間人の例だった。妻から離婚の申し立てがあり、夫もそれに同意した。離婚
の理由は性生活の欠如だった。裁判記録をもとに、離婚調停のようすを再現してみよう。

男は三八歳、士官クラスの軍人で、堂々たる体格、真っ黒に日焼けした顔には長年の風
雪に吹かれた跡が刻まれている。一見、たくましく頼りがいのある男性に見えるが、裁判
の日、表情は暗く、肩を落として沈んでいた。

女は三五歳、色香のただよう美人だが、その日は涙でぐっしりぬれたハンカチを握り
しめていた。裁判長が聞いた。

「離婚申し立ての理由はなんだね」

「生活の不一致です」

女は嗚咽おえうしながらやっとこれだけ言った。

「たとえばどんなところが合わないのかね」

「……………」

「二人は愛しあったのだろう」

「はい」

「まだ彼を愛しているかね」

「……………」

女は、何か言おうとしてやめ、涙が一つ、頬をつたって流れ、わっと泣きふしてしまつた。

裁判長は士官に尋ねたが、士官はぼつりと言つただけだつた。

「私は彼女を幸せにしてあげることができないのです。だから離婚に同意するのです」

士官の名は呉勝^{ウーシヨン}（仮名）といつた。東シナ海の離島の守りに派遣されていた。数年前、

入隊したとき、同じ村の娘だつた蘭芝^{ランチ}（仮名）と婚約し、二年間兵役に服したあと、村に

帰つて結婚した。翌年まるまる太つた男子に恵まれ、夫婦は宝を得たように大よろこびしたものだつた。しかし、呉勝は子供が満一歳を迎えたとき一度休みをとつて家に帰つたが、その後はまったく帰ることができなかった。

そのとき、呉勝は小隊長だつたが、軍備増強の緊張感がみなぎつており、日常の勤務や訓練のほか、「大戦に備えるならば先手必勝、核戦争も恐れない」という思想的指導のも

と、離島に半永久的な建造物を建設するための地下工事が行われ、呉勝の率いる小隊は「戦備施工突撃隊」と命名された。名誉に感じた呉勝は、工事が完成するまで決して家に帰らないと心に誓ったのだった。

彼は寝る間も惜しんで身を粉にして働いた。三年後、巨大な戦備工事の主要な工程が十分に完成し、内装などの細部の工程に移った。この間、彼は輝かしい功績をあげ、何度も表彰され、小隊長から主管施工の副中隊長になり、警備地区の模範兵となった。

呉勝が故郷に帰って妻と会うための旅装を整えていると、警備区、師団、連隊の三レベルの工作隊が彼の部隊を次々訪れ、表彰会議を開いたり、取材を行ったりする。そのため、せつかくの休暇はまた先に延びてしまった。

妻の蘭芝は気だてのよい女性で、結婚すると一心に夫のことを思い、夫のために尽くした。夫の名誉は彼女の名誉であり、夫の栄光は彼女の栄光だった。夫が軍備建設のために帰れなくなると、最初の二年は子供を連れて会いに出かけた。三年目の秋も、会いに行くつもりだったが、夫の母親が中風で倒れ、舅がすでになく、残る家族が蘭芝一人のため、彼女は姑の面倒を見るために、夫に会いに行くことを断念した。そして寝たきりの姑について、髪を洗い、体を拭き、下の世話から食事の世話まで、誠心誠意働いた。ただ夫のことだけはつねに気がかりだった。

それから八年間、彼女は部隊に行つて夫に会うことがなかった。

呉勝は模範兵として特別に養成されることになった。一年のうち三分の一は他の部隊をまわつて歩き、先進的兵士の代表大会に参加したり、交流会や表彰式に臨んだり、報告会に出席するなど、次から次へと息つくひまもなく活動に明け暮れた。しかし、まじめな彼は部隊に帰れば仕事に没頭し、不在だった分を取りもどすべくがんばった。彼こそ模範兵の名にふさわしいりっぱな解放軍兵士であつた。家族に会うことなど夢のまた夢だつたのである。そのうち、彼は中隊長に昇進し、人々の期待はますます大きくなっていった。

だが、呉勝には「模範兵」の榮譽がだんだんと重荷になつてきた。名譽というものも、一度背負つてしまつたからには、そうかんたんにおろすわけにはいかない。模範兵であるからにはよき部隊にしなければならぬ。彼は自分をきびしく律し、やがて連隊の壁も表彰状でいっぱいになり、彼の休暇はどんどん先へ延びていった。

姑の病気はよくなることはなかった。嫁の看病に感謝しながら、息子と一目再会することもかなわず、姑はこの世を去つた。蘭芝は葬儀のいっさいを取り仕切ると、翌日、沿海地方へ向かう列車に乗つた。

呉勝は妻がたずねてくるという電報を受け取ると、船艇に乗つて迎えに行つた。ついに再会を果たした二人は、八年の思いがつのるばかりで声にならず、島への船上、じつと黙

ったままだった。現地に到着すると、あいさつに来る幹部や部下の兵士たちがひきもきらず、夫婦水入らずの時間が持てなかった。全島に灯り^{あか}がとまり、人々もやっと去っていき、旅の疲れで子供がぐっすり寝ついたころ、呉勝はやっと妻を抱きよせ、一言「苦勞させたね」とつぶやく。と、涙があふれ、蘭芝の涙といっしょになって流れ落ちた。

しかし、問題はこの日の夜発生した。夫ができなくなっていたのだ。

夢にまで見た再会はよろこびと興奮のなかにあったのに、二人のあいだに苦悩が立ちただかった。蘭芝は落胆し、後ろ髪を引かれる思いで去っていった。呉勝は彼女を港まで送っていったが、恥ずかしさとうしろめたさで妻を慰める言葉もなかった。

その後、呉勝は蘭芝が送ってくれる漢方薬や民間療法のたぐいを用いてみたが、五年続けても効果は表われなかった。その後は年に一度、会うことができたが、二人とも思いをつのらせるあまり、逆に緊張してしまうのである。漢方医の話では同居することが最も効果的であるとの助言があったが、島には家族が住む住宅がなかった。また呉勝は模範兵であるゆえに、不自由な身になっていた。

こうして二人は離婚への一本道を歩くしかなかった。中国では、呉勝・蘭芝夫婦のように、配偶者と別れて住む軍人家族が無数にいる。とくに夫婦の性生活は深刻な問題であり、しばしば悲劇を生む。

心中

次の話も、軍人の妻の悲劇である。

舞台は古都、南京。^{ナンキン}軍人の江勇^{チャンヨン}（仮名）は紡績工場の女子工員の劉欣欣^{リウシンシン}（仮名）と友人を介して知り合い、しばらく交際したあと、夫婦になった。しかし、人の気持ちというのは、時間がたつにつれて、太陽にさらされたデコレーション・ケーキのようになくずれてしまうのである。

二人は七年間の結婚生活のうち、一つ屋根の下で生活したのは合計しても七カ月に満たなかった。出産のときも緊急の軍務があれば彼女のそばに何日もおらず、部隊にもどってしまった。また次の年も、夫は銃火の飛び交う前線で国防のために働き、彼女は後方で愛情の防衛戦をはらなければならなくなった。

夫の陣地は堅固でも、妻の防衛戦は頻々と急を告げる状況に陥っていたとは、江勇の夢にも思わぬことだった。

彼女の心の防衛ラインを侵そうとしていたのは、彼女の同僚だった。背が高くハンサムで、人あたりのいいタイプだった。数年前に妻をなくし、独り身をかこっていた。彼らは職場で話などするうち、私生活にまで関心を持つようになり、何か男手の必要ことがあ

れば、すぐに手伝いに来てくれた。冬場は暖房燃料のコークスを六袋も担ぎ、運んでくれた。冬場に漬け物にする白菜も、ドアのところまで運んでくれた。自転車を盗まれたときには、三日もたたないうちに新品が贈られた。……こうして冬から春まで、花が咲き、花が散るまで、彼は誠心誠意、彼女に尽くした。人の心は鉄ではない。時は現象液のように、彼の声や笑顔を彼女の心のネガフィルムに焼き付けていった。

姑が元気なころは、姑が劉欣欣の避難場所だった。彼への気持ちが高まってくると、姑の家へ逃げ込んだ。姑は彼女にとって倫理道德の壁となってくれたのだ。

しかし、姑が死ぬと、だだっぴろい部屋のなかで彼女と小さい娘の二人が残された。彼女は自分の体のなかからわき上がってくる熱い感情を抑えることができず、恐怖にふるえた。彼女は自分を抑えるために、夫へひんばんに長い手紙を書いた。手紙を通して夫婦の心の絆を強め、肉欲を消してしまおうとしたのである。彼女は夫が前線で負傷することすら願うようになった。そうすればすぐに夫のもとに駆けつけることができるのだ。

ある日、夫から手紙が届いた。その内容は彼女を震えさせるものだった。

「最近、君はよく手紙をくれるね。手紙の書き方はちよつと露骨すぎないか。家族の手紙は公の場で読まれるということを知らなかったのかもしいれないが、前線では常識なんだ。みんな手紙は読まれるのだ。君の書いた睦言むつごのような言葉は、物笑いの種にされてしまう。

いいかげんにしてほしい。もう三〇すぎのいい大人なんだから、一〇代の女の子のラブレターではあるまいし、中隊長の面子も考えてほしい。手紙を書くならば用件だけ手短に書き、言葉遣いには十分気をつけてくれ……」

彼女は夫への心をこめてしたためた手紙が、まさかまったく知らない兵士たちに読まれているとは思ひもよらなかった。彼女は恥ずかしさのあまり身の置きどころもなくなった。前線で国防のために全精力を集中している夫は、赤裸々な言葉のなかに隠された危険信号に気づいていなかった。

時間はゆつくりと、しかし確実に過ぎ去っていく。別居生活も長くなった。

ある日、劉欣欣は病気で寝込んでしまった。子供を幼稚園に連れていくこともできず、家事もできない。こんなとき、例の男がやってきたのである。あたかも雪の日の炭のように、雨の日の傘のように彼女のそばにあらわれたのである。彼のやさしさ、気遣い、そして強烈な男の体臭は霧のように彼女をおおった。男の看病は一週間続いた。

このとき、劉欣欣の夫は兵を率いてはるか遠方で緊急の突貫工事をしていた。

一週間後、彼女の体力は回復したが、心の防衛ラインは洪水で流された堤防のようになつてしまった。彼女はもともと浮気性ではなく、男のほうも女たらしのようなあくどい男ではない。ごく平凡な人間であつた。だから、聖人君子にもなれなかったのだ。二人は自

分の気持ちの高まりと道德の聲の重圧の下でおそれ、不安におののいた。

最初の愛は、抑えきれない衝動によってつくられた。衝動は大海の怒濤どとうのように高々と盛り上がり、岩石のごとき罪悪感にあたつてくだけた。

「君は軍人の妻だから……」

彼は独り言のようにささやいた。

「私たちは……罪人だわ」

彼女はふるえながら彼を抱きしめて言った。

罪悪感の重圧に耐えられず、二人はこのときをかぎりにもう二度と会うまいと誓った。だが、誓いは守られなかったばかりか、二人の心と体はしっかりと結びつけられ、離れることはできなくなっていた。何度も逢瀬おうせを重ねるうち、劉欣欣は妊娠した。

軍人の妻が愛人の子をみごもるということは大罪に値する。法と社会的制裁の両方から人間として立ち直れないほど懲罰を受けることになるだろう。二人は何日も考え、子供はおろさなければならぬというので、結局ある友人から無記名の病院紹介状を手に入れることができた。紹介状に偽名を書き入れ、中絶手術を受けに行つた。

医師の診察では、劉欣欣は血圧が高く手術はできないと診断されたが、しつこく頼みこんでどうにか医師を説得し、手術した。術後二四時間は病院のベッドで安静にしていなく

てはならなかったが、劉欣欣はだれか知った人と出会うことをおそれ、二時間後、迎えに来た男とともにこっそり退院してしまった。だが、この行動が逆に病院の注意を引き、治療した患者に対する責任上、病院側が追跡調査し、結局のところ真相が明るみにされてしまった。

一週間後、二人は失踪し、さらに一週間後、二人は古城の城壁近くを流れる川で、溺死体となって発見された。しっかりと抱きあった姿で……。

第25回 赤き中国にあらわれた妓女の姿

繁栄の中国性産業

一九四九年一〇月一日、共産主義制度を目標に掲げた共産党政権によって中華人民共和国の建国が宣言された。

北京が中国の首都とされた。同年一月二一日、政府はすべての市が所有する妓院を閉鎖するよう布告した。その日、政府の指導のもと、数千名の警察によって二二四の妓院が閉鎖され、一二六八名の妓女が更生施設に収容された。性病のある妓女には指定された場所での無料の治療が施された。その後一、二年のうちに各地の妓院が強制的に閉鎖され、取り締まられた。

一九六四年、中国政府は全世界に向けて、中国には売春婦がないこと、性病が基本的になくなったことを宣言した。

私は一九五五年に生まれた。一九八五年に日本へ来るまで中国で三〇年生活していたが、たしかに妓女とか性病という話は聞いたことがない。妓女どころか、婚約した仲でも婚前交渉は許されていなかった。当事者が工場労働者ならば行政処分がなされ、大学生ならば退学となった。じつに清く貧しい時代をすごしたのである。

それから一三年たった一九九八年、中国に仕事で帰ったときにはあちらこちらで性産業が幅を利かせており、そのおどろきたるや、日本で初めてストリップ・ショウを見たとき以上に強烈だった。中国は世界でも強硬な社会主義政党、中国共産党が指導する国家である。純粹で善良なる一般中国市民には、冷えた灰が再燃するようにふたたび売買春業が復活し、しかも日々拡大しているという状況が共産党の目の前で展開されていることが理解できない。

中国で妓女を買ったことのある外国人が言っていた。

「中国には歓楽街がないが、どこもかしこも歓楽街のようだね」

言い得て妙である。解放後の中国で売春業が発生した



解放後、施設に収容された上海の妓女

のは十数年前だった。売春産業の発生とともに、売春に関する隠語が次々でき、用語が新旧交代したかのようにだった。例をあげよう。

打魚蛋タウユイタン（魚のたまごをやる）……客に触らせること。とくに乳房。広東地区で流行して

いる

洗手シーシヨウ（手を洗う）……右と同じ意味。上海地区で使われている

魚蛋妹ユイタンメイ（魚たまご娘）……右のサービスをする女性

坐台小姐ツオタイシヤオチエ（内勤お嬢さん）……ナイトクラブなどのホステスで、ごくたまにしか客と

外泊しない

出台小姐チユータイシヤオチエ（外勤お嬢さん）……ナイトクラブなどでホステスもするが、客を連れてホ

テルにもよく泊まる

打洞ダイドン（洞穴を打つ）／打炮ダイパオ（大砲を撃つ）……いずれも性交のこと

煤餅メイピン（石炭餅）……売春婦のこと。敲煤餅チヤオメイピンは買春すること

走后門ツォウホウメン（裏門から入る）……アナルセックス（かつてはコネや縁故のルートを指した）

煲粥パオチヨウ（粥を煮る）……売春婦と過ぐすこと（取り決めた時間内ならば射精が数次にな

つてもよい）

包夜パオイエ（夜をキープする）……売春婦と一晚過ごす

打飛機ダイフイキ（飛行機を撃ち落とす）……売春婦が手で射精させるサービス

毛片マオピエン（ヘアのフィルム）……裏ビデオならぬ裏VCD

団体操トウファンチイツアオ（体操の団体演技）……男女数人の乱交

三明治サンミジチ（サンドウィッチ）……一人の男性と二人の女性のセックス

老公ラオゴン（あなた）／老板ラオバン（社長さん）……売春婦が客を呼ぶときの称

などなど。

新たに生まれた現代の妓女にも、社会の通俗的な基準によって地位の高低ができています。研究家や警察関係者は彼女たちをだいたい以下のように分けている。

（一）「二奶」アルナイ（二番目の奥さん）と呼ばれる女性が売春婦たちのなかで最も上位にあるものといわれている。昔の妾に相当するが、違うのは同じ夫に一生仕えるのではなく、一人の男性と一、二年あるいは五、六年生活するが、その後は関係を断つ。彼女のサービスはセックスだけで、ふつうの愛情のこもった夫婦の生活とか、子供を産んで家庭をつくることとは無縁である。代金は月払い。料金は五〇〇元から五〇〇元まで、地方によって格差がかなりあるが、ふつうは二〇〇〇元から三〇〇〇元だという。中国では都市生活者の

月給はふつう一〇〇〇〇〜三〇〇〇元なので、二奶アルナイを囲える男性は商売が当たった個人営業の経営者か、不正の財を持つている政府の上級幹部である。

(二) 「包婆バオポ」(キープした女)……包娼バオチヤンとか包嫖バオピヤオともいう。彼女らは二奶のように一定期間特定の男性につくが、先にまとまった金を受け取っている。二奶と違うのはつねに客と生活するのではなく、客が出張のときなどにかぎってサービスすることだ。料金は時間の長さで異なる。

包婆にまつわるこのような事件があった。一九九九年五月一日のこと、四川省重慶しせんしやうじゆうけいの松藻鉞業区しょうそうの六五歳の男性が買春行為の疑いで公安に逮捕された。男性は逮捕に不服でこう反論した。

「これは息子が私に孝行してやってくれたことだ。おまえたちと関係ない。おまえたちに一銭の損もさせたわけではなからう」

彼の息子はビジネスでよく出張していたが、ある日偶然、湖南省出身こなんしやうの四五歳の売春婦と出会い、長年男やもめをかこち生活に張りをなくして生彩がなかった父親のために「包娼バオチヤン」として雇ってやろうと思い、値段を交渉し結局月二〇〇〇元で成立し、期間は半年とされた。父親は大よろこびで息子の孝行をほめたというのだ。逮捕後、息子は公安の人員にこう言った。

「母親がはやくに亡くなったので、父はこの数十年苦勞してきたんだ。おかげですっかり年をとってしまったが、あの女を雇って以来、父は一〇歳は若返ったよ。とても元氣になったんだ。息子として父に尽くすのは当然だろう」

父も子も法規を知らず、売春が罪であることを知らなかったのだ。「包婆」の現実を示すわかりやすい例である。

(三) 「三陪女」^{サンペイニョ}(同伴嬢) ……陪^{バイ}は「つきあう」の意で、いわゆる「三陪女」はカラオケ、

ダンス、食事につきあう女性をいい、金さえもらえば見知らぬ男性と遊ぶ若い女の子も含まれる。彼女たちは夜、カラオケ店やダンスホール、レストラン、ナイトクラブなどの高級な遊び場に入りし、その日かぎりの男を探す。ふつう、カラオケやダンス、酒場などのつきあいは二〇〇元か三〇〇元、時間は決まっていない。平均月収と比較するとけっこう高い。小都市ではわりあい安く、五〇元から一〇〇元である。もちろん、遊んでいるうち触られるのはわかつている。ホテルまでつきあう場合は射精一回五〇〇元、一晚泊まる^{マール}と一〇〇〇元になる。現在、中国ではどのナイトクラブに行っても、このような「三陪女」を見つけることができる。

(四) 「叮咚小姐」^{ティントウシヤオヂエ}(ピンポン嬢) ……彼女たちはホテルの一室を固定的に借り切ってお

り、男性宿泊客をねらって内線で電話を掛けて客をとる。買春の客がいればすぐに部屋に

やってくる。「ピンポーン」とドアベルを鳴らしてあらわれる。それでこの名称がある。料金はホテルのランクと連動し、二つ星クラスではふつう二〇〇元で、四つ星や五つ星では四〇〇元から六〇〇元である。彼女たちがホテルの従業員と結託していることは確かだ。私が仕事で北京と広州に出張したときのこと、ホテルのフロントでチェックインして部屋に入ったとたん、知らない女性から電話が来た。人に甘えるような声で「マッサージはいりませんか」というのである。「お友達がほしくありませんか」ということもある。カモを見つけてねらいを定めるはやさにはびっくりさせられた。

(五) 「髪廊妹」^{フアーランメイ}（美容院嬢）／「按摩女」^{アンモニー}（マッサージ嬢）……洗髪やマッサージ、ある

いは足専門のマッサージという名目で、理髪店やサウナ、足裏マッサージの店で売春をするもの。私は上海で、売春をやっているという噂のある二軒のヘアサロンに入ってみた。二軒とも繁華街から遠い郊外にあり、外見からは理髪店にしか見えないが、ドアを開けて入ると、胸元を開けて肌を見せた女の子たちが座って客を待っていた。妓女たちは見るからに山出しで、化粧もへただった。いずれ山奥の農村か海辺の貧しい村から出てきたものだろう。みな未成年のようだった。女の子は客に指名されると近所に用意された部屋に客を連れていき、春を売る。時間は一時間から二時間で一五〇元から二〇〇元くらいである。射精の回数は決められていない。このような売春ヘアサロンはたいい中年女性を取り仕

切っており、入ってきた人物が買春客か私服警官か、理髪店だと思って入ってきた人かすぐに見抜き、出てきて対応する。警官だったら決して少女売春のように見せかけず、うまいことを話をしてはぐらかし、追い出してしまふ。理髪店だと思って入ってきた客はすぐに帰ってもらう。買春目的の客はもちろん歓迎し、女の子たちがどんなに男性を楽しませることに長けて^たいるかまくしたてる。

(六) 「街妹」^{チエ妹}(ストリートガール)……彼女たちはたいいホテルの前や、映画館などの娯楽施設の入り口で客引きをし、行為は別の場所で行う。

(七) 「工棚婦」^{コンボシフ}(飯場婦人)……彼女たちはだいたい農村の女性で、都会に短期の肉体労働で働きに來た出稼ぎ人を客にしている。一部の女性は数人の出稼ぎ人とともに生活し、共有の妻になっている者もいる。

これらの七種類はみな同じ売春ではあるが、提供する「商品」が少し違う。(一)は夫婦のスタイルを提供する。

(四)はさまざまなセックスのサービスをする。(三)はまだそれらしい交際があり、売春する者は金銭を要求するだけでなく、虚栄心を満足させるために高級感のある生活を求めている。このタイプの売春婦はたいい都会の女の子である。

(五)(六)はたった一度だけの性交であるが、売春する女性は農村出身で、生活に困っており、

学校教育も受けていない。彼女たちはたいてい体を売って得た金で家族を養っている。

いま世間で流行っている下世話な言い方をすれば、(五)(六)(七)は穴を売り、(四)は肉を売り、(二)(三)は人情を売り、(一)はスタイルを売るといったところである。

*五〇〇元——約6700円。2005年9月現在、一元13・6円にもとづく

広東買春客取り合戦

中国における売買春の実態がどういうものか、いまだ全貌は明らかではない。しかし、『存在與荒謬・中国地下性産業考察』（存在と嘘・中国闇性産業についての考察）という一冊は興味深い。この本は中国人民大学教授、潘綏銘氏（はんすいめい）によって書かれた調査研究書で、記述はたいへん客観的である。とくに興味を引かれたのは一九九七年に広東省のある街で行われた売春実態調査レポートだ。その歓楽街でのさまは「改革開放」の中国的特色にあふれていた。

その街に住む男性の話によると、売春業は九五年から流行し、当時は売春婦たちが路上で客引きをしたという。衣服はほとんどつけておらずヌードモデルに近いあられもないかつこうで、客を引くのもまるで餓えた虎が獲物を襲うようだった。もし断ると、さっきま

での満面笑みの表情が豹変^{ひょうへん}し、目をつりあげてさんざん相手を罵倒^{はとう}するというのだ。もつともこのような乱暴はすぐに見られなくなつた。しかしその二年後に潘教授は、同じ場所 で信じがたい客引きの場面に遭遇している。

毎日夜のとばりが降りるころ、その街は男も女も忙しく行き来し、すっかり暗くなると所定のポジションについて客を待つ。遠くに買春に來たとおぼしき男の人影が見えたと、数グループの客引きが押し寄せ、たちまち客取り合戦が開始される。売春宿の表向きはどれも理髪店である。

第一陣は「理髪店」の妓女と見張りの男性だ。少なくとも妓女二人が出てきて、まるで犯人を連行するかのように左右からはさみ、自分を買うように機関銃のようにまくしたてる。見張りの男は客に圧力をかけるように背後に立つてついでくる。妓女たちはまつわりついて離れないが、せいぜい腕を組んだり、袖^{そで}を引いたり、肩を寄せたりするにとどめ、強引に連れ込むことまではしない。

第二陣は一〇歳ほどの花売り娘だ。少女たちは客のいないときには理髪店のなかで遊んでいるが、だれも彼女たちに注意を払わない。しかし、第一陣が客引きをはじめるとまるで地面の下からわきでるようにいつのまにか客を取り巻き、女たちの足のあいだからわりこんで、つまさきだつて花を客の鼻先に突き出す。しかし花を買う客は少ない。

第三陣はバイクである。彼らは理髪店の前で待機しており、客が女を選ぶと客と女をうしろに乗せて、話をつけてある宿泊所まで送っていく。理髪店の前には何台ものバイクが客待ちをしているので、いざとなれば第一陣よりはよいこともある。遠くから客になりそうな男の姿が見えると、大声で「おれのバイクに乗ってくれ」と叫ぶのだ。

第四陣は物乞いの群である。老若男女いずれもいる。彼らもどこに潜んでいたのか、雨のごとく風のごとくいつのまにか十数人が寄ってくる。彼らはだれからも人間として見られていないので、叱責しつせきされることもないが、ただ突き飛ばされないように気をつけなければならぬ。年配の物乞いは往々にして突き飛ばされ、踏みつけにされてしまうのだ。

潘教授によると、これまでは静かなときのこと、もし客が少しでもその気を見せ、さらに何軒か選ぼうとすると、たいへんなことになるという。四つの陣営が客を取り巻いたままいっしょに移動し、まるで観光ツアーの団体のようになる。二、三人の客に三十数人が取り巻いている場面も決して少なくない。

客に買春の気持ちがないようだと、最初に引き揚げるのが売春婦である。というのも、客が数歩あるくと次の理髪店のテリトリーに入ってしまうからだ。そこには別グループの売春婦が手ぐすね引いて客を待っている。次に撤退するのはバイクだ。そのあとすぐごとと花売り娘と物乞いが去っていく。この街は理髪店が軒並みなので、一軒の店ごとに四グ

ループが波のように押し寄せては引いていくという奇妙な光景が展開される。

売春テクニクの文化的な差

現代妓女のセックスのテクニクは、女性の教育水準や出身地などによって違ってくる。私は上海のナイトクラブで二人の高学歴のホステスと出会ったことがある。彼女たちはなかなかの美人で、年は二〇歳だった。性の話題を出したら乗ってきて、話しづからずいぶん経験があるようだった。しかし相手は売春の客ではなく、半分は好きになったボーイフレンドで、あとは妻のある男性のようだった。彼女たちはセックスに対してなんの束縛も感じていないらしく、やりたいようにやっていた。またフェラチオ、アナルセックス、オナニーなどはもちろん、^{こぶし}拳を女性性器に入れる特殊なスタイルまで知っていた。おどろいたのは性文化が解放された環境ではないのに、知識が豊富だということだ。

貧困地区から出てきた教育のない農村女性の売春婦は、一日に五人も六人も相手にするが、やり方は原始的で、正常位での性器の結合だけである。彼女たちはフェラチオやアナルセックスなどに対しては本能的に拒否反応を示す。遊び慣れている友人が証言してくれたが、若い農村の売春婦にコンドームを着用して、特別に高いチップを渡すことを条件に、フェラチオを要求したが、受け入れられなかったという。彼女たちの意識では、売ってい

るのは性器だけであつて、そのほかの方法での行為は穢けがれていると感じられ、気持ち悪いというのだ。売春といつても何のテクニクもなく、ただ裸になつて横たわり、ものも言わず客にやらせるだけやらせ、終わりである。

農村の女性は受動的で保守的な考えしかなないので、悪くすると容易に危険を招いてしまう。あるニュースによると、ある売春婦が、セックスに不満だった客に金やガラス玉、ペンなどを膣ちゅうに突つ込まれ、病院にかつぎ込まれたという事件があつた。またある売春婦は夜、騙されて山の上に連れて行かれ、さるぐつわをかまされて木に縛りつけられ、アナルセックスを強要された。男たちはやり終わると帰つてしまい、彼女は翌日人に発見され、病院に運ばれたが、人事不省におちいつていた。

聞いたところによると中国人売春婦にいちばん人気があるのが韓国人男性だということだ。理由は売買春の行為ではあつても、韓国人男性はやさしく接してくれるからだという。中国人男性は事が終わるとポケットから金を出し、ベッドに投げ、「おまえの金だ」と言い捨てて行くというが、韓国人は札を小さくたたんでそつと手に握らせ、「かわいいね。これで化粧品でも買つてね」と言うのだそう。

中国人男性でも歓迎されるのは個人営業の経営者、次が政府の中・上層部の幹部である。季節労働者や長距離トラックのドライバーなどはもてない。日本人の客の評判はとくに言

われていない。

よく知られている文化人たちの多くが中国政府に公認の歓楽街を設けるように呼びかけている。公認にすることで治安を維持し性病などを防止することができるといなのだ。歓楽街を設けても、管理できるのは世間を知らない農村女性だけで、都会ですれている高級売春婦は制約のあるところには入らないだろうという意見もある。

中国のテレビ番組でかつて放映されたルポは、たいへん印象深かった。貴州省の山岳地帯の農家の娘が騙されて深圳に連れて行かれ、売春をさせられた。最初つらかったが、慣れてくると金を稼ぐおもしろさを覚え、毎日男と寝さえすれば、以前は夢に見るだけだった大金が懐に入るのである。彼女は墮落した。積極的に客を引き、出身の村から娘たちを騙して連れてきて売春をさせるようになった。結局、彼女は逮捕され、重い実刑判決を受けた。刑務所に収監される前、公安の人員は人をつけて一度故郷に帰して家族と面会させた。このとき彼女を追うカメラのレンズは、彼女の両親がすでになく、天真爛漫な小さい妹と弟がぼろぼろの服を着て家にいるところを写していた。家には家具らしいものもなく、家も家畜小屋とたいして変わらなかった。彼女が去るとき、妹と弟が泣いて後を追っていたのが印象的だった。

著者あとがき

邱 海濤

中国人は保守的である。とくに女性に対してはきびしい。本書中に紹介した古代中国の宮廷で処女検査に用いられた「守宮砂」^{シヨウコンシヤ}、二〇世紀の六〇年代、極左的思潮が占めていた中国共産党が定めた「月経検査制度」はそのよい例である。時代はもはや二一世紀に入ろうとしているが、中国人の意識にはいまだ伝統的な古い考えの一部が沈殿^{ちんでん}している。もちろん保守はかならずしも後れや愚昧^{ぐまい}ばかりを意味しない。

よく知られた景勝地、杭州には、人々から「西子」^{シーツ}と呼ばれて親しまれている美しい湖、西湖^{せいこ}がある。その湖畔に、処女膜をめぐって訴訟を起こした一人の女性がいた。彼女は、四五歳の今日まで身体を玉のごとく堅く守りとおしていた。名前は紅梅^{ホンメイ}（仮名）という。一九九九年一〇月一三日午前、ある大病院に子宮癌^{がん}の検査を受けに行った。担当の林医師^{リン}は、所定の問診と検査をしたあと、さらに腹部の超音波検査をするよう検査表を書いた。その検査表には「未婚、経腹超音波」と書かれた。紅梅は病院に三三元の検査料を払い、

検査を受けた。検査を受け持った趙^{チヤオ}という名の女性医師は、検査表を一瞥^{いちべつ}すると、紅梅にズボンを脱いで診察ベッドによこたわるように言った。趙医師は超音波プロープを彼女の陰部に挿入した。

「痛い！」

そのとたん、紅梅は引き裂かれるような叫び声をあげた。趙医師はびっくりして陰部から器具を抜いたが、彼女はそのとき初めて経腹超音波と経膣超音波をまちがえたことに気づいた。

紅梅はひどく痛がり、かなり出血した。趙医師は紅梅を診察の林医師のところに連れて行き、検査と治療を頼んだ。紅梅は未婚の清らかさを明らかにするために、医師に証明を出してくれるように頼んだ。そこで林、趙両医師は「超音波探査を誤って膣内約一センチのところに挿入したため、処女膜に裂傷をつけ、若干の出血を見た」という証明書を書いた。しかし紅梅はまだ安心できず、杭州市第一人民病院に行つて再検査をした。検査結果は処女膜に破損があり、鬱^{うつけつ}血があるというものだった。前の病院では処女膜は破れていないという話だったが、杭州市第一人民病院は処女膜はすでに破れたと証明したのだった。紅梅は浙江省^{せつこうしやう}人民検査院に評定を依頼した。その結果は「処女膜破損」であった。処女であることが終身の大事であつた紅梅はすぐに告訴に踏み切つた。

今年六月、杭州市上城区の人民法院（裁判所）で紅梅勝訴の一審判決が下された。被告は紅梅に陳謝のうえ慰謝料五〇〇〇元を支払うよう命じられた。

この事件は中国のマスコミで大きく取り上げられた。原告の紅梅のところにはマスコミ各社の記者が訪れ、インタビューを迫り、写真を撮っていった。勇気ある中国女性が最も重く、最もやっかいなことに向かって告訴したと、中国五〇〇〇年、前代未聞の珍事件として大きく取り上げられた。

中国人は一方でとても開放的な人種でもある。それはこの数年あふれ出たポルノグラフィの氾濫で証明される。本書にも闇の売春の場を二カ所紹介したが、それはどちらも上海の都市部と農村部との境界線にある。それは一年前のことだった。

時がたち状況が変わり、現在の上海は中心地にも数え切れないほどの売春スポットができています。セックス・サービスの内容もさまざまなこと、目のあたりにすれば話以上のありさまにおどろきを禁じえないだろう。

中国の「性産業」は「四化」^{スーホワ}に向かっている。「四化」というのは組織化、職業化、国際化、低年齢化である。

組織化はたいへん緊密で、組織の資金源から管理まで、すっかりシステム化されている。ある公安部の高級官僚から、現在各地で誘拐されたり失踪^{しっそう}している婦女子や子供たちは、

交通の不便な辺境地区や沿海地区の歓楽街に売られ、一人の力では脱出困難な状況におちいつているという話を聞いた。また誘拐された女性は辺境地区の農家の嫁にされているという。彼らの組織は徹底しているということだ。

二〇〇〇年六月二日、北京で大規模な売春組織の摘発が行われた。売春には別荘が使われ、会員制で、紹介がない客は入れず、秘密厳守のうえ、組織内の人員は全員証明書を発行していた。接待にあたるホステスは車で送り迎えし、客は別荘に来る前に電話を入れて車のナンバーを聞き、指定された場所で組織が送った車を待つ。これは組織化の代表的な例である。

職業化の例にはこのようなものがある。セックス・サービスにもいくつかの段階によって価格が区別されるようになった。たとえば山西省太原市公安機関が、「晋陽娛樂一條街」(晋陽娛樂専門ストリート)と通称される市内の商店街を密かに調査したところ、五〇ものカラオケ店に裏部屋や裏道、簡易ベッドが設けられていた。接待する女性は「大砲を撃つ」(セックスのたとえ)のみで、歌は歌わない。ある売春組織は女性たちに売春のための職業訓練をしていた。「みな職業道徳を守らなければならない。みなさんの仕事はお客様の体を洗って差し上げることで決してお客様とふざけてはならない。つねに体を清潔に、行いには注意をし下品な言葉を使ってはならない」と教育しているのである。

このような教育を施すというのは、以前は、客が売春婦をおとしいれたり、売春婦が客を騙したりすることが当たり前だったからだ。

売春婦たちは「自我奮闘」^{ツィウオフエントウ}の意識が芽生え、より稼げるところをめざして国内を移動している。

高学歴のホワイト・カラーの階層が歓楽産業に参加している例もめずらしくない。都市部には大学生ばかりがたむろする酒場もできている。

低年齢化も問題になっている。売春をしている女性ほとんどが二五歳以下である。そのうち一六歳から一八歳がいちばん多く、一四、一五歳という少女もいる。彼女たちは教育水準が低く、相当数は小学校か中学校しか出ていない。

国際化というのは、売春が国境を越えて展開されているということだ。中国人売春婦の「輸出先」は香港、マカオ、タイ、韓国、日本である。逆に中国も「輸入」している。「輸入元」はモンゴル、ベトナム、ロシアで、売春婦が中国へ進出しているのだ。

セックス産業の蔓延^{まんえん}とともに、新たな風景がひろがってきた。一つは役人の汚職が進んだことだ。公安部は、この数年来、売春の接待を受ける幹部が増加しつつあることを、資料を公開して指摘した。幹部の買春摘発の事件は、省庁、部局のレベルでも多く発生している。

上海市紀律委員會の統計によると、一九九四年以来、上海市の四八人の処（局の下（行政機関）レベルの幹部が性的な接待を受けたり、買春行為をはたらき党規律、行政規律の処分を受けた。そのうち、一五人は党籍を剝奪はくだつされている。一九九七年、上海市公安機関が黨員幹部を買春行為で摘発した事件は、九五年以降黨員の違反事件の四二パーセントを占めた。

成都市に、こんな例がある。元交通局局长、石全志シーチユアンチはある美容サロンで一九歳のマツサージ嬢と出会った瞬間、ひらめき、この少女を使っている店主と交渉しようと思ひ立つた。「私はこの娘を連れていきたい」と申し入れたところ、「私は彼女のためにこの美容サロンを開いたのです。もしこの子を連れていくならば三万円用意してもらいたい」と返事をした。すると石局長は「四万やろうじゃないか」と豪語したというのである。要は、別邸を建てて妾を囲おうというわけだ。のちに局長は一〇〇万円を捻出しねんしゅつ、マツサージ嬢に会社を開いてやった。だが、この件は露呈し、大スキャンダルに発展した。

このように、中国人は性に対して意識は非常に保守的である反面、肉体はたいへん開放的でもあると言える。

本書の執筆・刊行にあたっては、集英社学芸編集部部長・細川剛生さん、学芸編集部編

集長・橋本尚武さん、翻訳家の納村公子さん、ならびにアメリカ在住の中国文学研究家の李国慶さん、台湾民俗文化研究家の丘来伝さん、オーストリア在住の中国社会問題研究家の常恺さんにたいへんお世話になった。この場をかりて感謝申し上げます。

二〇〇〇年秋 上海にて

文庫版あとがき

邱 海濤

本書を単行本として発表してからもう五年の月日がたった。時のたつのははやいとも、遅いとも言える。この間、中国では性に関する変化があり、記念すべき事件、考えさせられる事件が起きた。たとえば「セックスで支払う賄賂」は犯罪となるのかという議論が起きたり、インターネットにピンクサイトがあふれて社会問題になったり、離婚率が激増している現象があり、体操のメダリストがヌード写真を出版して物議をかもしたり……。こうした変化はかならずしもいいと言えるものではない。

また、すでにいまではあたりまえになってしまったことでも、よくないものもある。筆者がこの五年のあいだで印象深く思っているのは、大学生たちの性に関する意識や行動が変わってきていることだ。とくに大学生で同棲することが問題として目立ってきている。

筆者は上海外国語大学で一九七八年から一九八二年まで学んだ。もう二十数年前になるあの時代、大学で学ぶ者が恋愛をするなど恥とすべきことだった。なにしろ文化大革命終

結後、再開された最初の全国統一試験で入学した私たちである。当時、二二歳にもなっていた私は勉学の時間が惜しくて、恋愛などを考える余裕はなかった。

なかには片思いをしていたり、相思相愛の恋愛をしている人もいたらしいが、みな人に知られないようにしていた。もし指導員（学生の思想を管理している教師で、各学部に一人いた）に知られると、呼び出されて説教される。そのころ大学を卒業すると就職先は国家の配分で決められており、指導員がその配属に意見を述べることでできたので、みなやっかいなことにならないようにしていた。ところが、配属先が決まって卒業となったとたん、いままで隠れて恋愛していたカップルがおおっぴらにつきあうようになる。私が学んでいた日本語科でも三クラスで六、七組のカップルがいた。みんなおどろきながら、うらやんだものだ。卒業してしまえば、恋愛をしていたことが発覚したところで学校も何も言わない。

そしていま起きた大きな変化といえば、大学生が在学中に結婚できる「権利」を得たということ。

学生結婚が認められるようになるまでには、学内のようすに変化のプロセスがあった。まずキャンパスでおおっぴらに抱き合ったりキスをしたりする学生が現れ、そのうち授業中でもいいちゃいちゃするようになり、やがて大学の寮を出て外でアパートを借りて同棲す

る学生まで出てきた。かつて大学生はたとえ同じ市内に家があっても、全員、学生寮に住まわなければならなかったという中国である。時代は変わるものだ。そして学生結婚が現れた。これはほぼ五年の変化である。それぞれの現象はどこかの学校から他校へとひろがっていき、大都市から地方都市へと流行していった。世間の見方も「おかしい」や「とんでもない」から、「時代の流行」そして「性意識の大革命」へと変わっていった。

ある雑誌社が、伝統ある北京師範大学のキャンパスをこう報道した。

北京師範大学のキャンパスでは、昼だろうと夜だろうと林の中で仲良く寄り添うカップルを見ることが出来る。通りかかった背の高い男子学生に、大学生のあいだで同棲が流行していることについて知っているかどうか聞いてみた。すると彼は笑って、平然とこう答えたのだ。

「大学ではみんな恋愛しているよ。恋愛したことがない人なんて少数だろうね。恋愛したくないなんていうやつはきっと本人に何か問題があるのさ。恋愛すればたいいてい同棲するし、同棲もしないなんていうと、逆にばかにされる」

抱き合ったりキスをしたりすることも、学外で部屋を借りて同棲したり、学生結婚をし

たりすることも、大学側と学生側で最初から鋭く対立し、よくもめごとになり、場合によっては訴訟事件にまで発展した。学校側は大学の規則を理由にするが、学生側の言い分はキスや同棲、結婚を禁じている法律がないとして、大学生にも結婚や出産の権利を求めるものである。

一九九〇年の教育部による『大学生管理条例』は、大学生の結婚や妊娠をはっきり禁止しており、違反者は学籍剝奪をするとしていた。

二〇〇一年四月末、江蘇省南京市のある大学で二人の学生が学籍を剝奪された。その理由は学外で部屋を借りて未婚のまま同居し、妊娠した女性が市内の病院で中絶をしたというものだった。学校側はそのことを知ると、大学規則『大学生管理条例』に違反したとして、この二人を学籍剝奪処分にしたのだった。この二人はそれに対して訴訟はしなかった。

二〇〇三年六月十五日、武漢市の華中師範大学四年生の男子学生が結婚式を行い、学生結婚の先鞭をつけた。同じ年の一〇月九日、重慶のある大学生が結婚の登記を行い、二〇〇四年五月一日には、天津師範大学の三年生、王洋と劉航喜が公開の結婚式をとり行い、全国三〇社あまりのマスコミが取材する騒ぎになった。あとの三例は当初学校側ともめたものの、国の婚姻法には違反していなかったもので、教育部の条例による処分は受けなかった。

二〇〇五年になり、大きな変化が起きた。三月二九日、教育部が新しく『普通高等学校学生管理規定』を発行し、大学生が在学中に結婚できるかどうかという注目の問題に決着がついた。この規定では大学生の婚姻を禁止する事項がなくなったからである。しかし教育部の担当者は、それで大学生の結婚を奨励しているわけではないと説明している。いずれにしろ、結果は学生側の勝利となった。

九月一四日、廈門^{アモイ}大学が『廈門大学学生紀律違反規定』を新たに発行し、それまでの規定にあった「学生が公共の場でキスをするなど、ふしだらな行為を行ったり、注意を聞かないなどの態度の悪い学生には警告あるいは嚴重警告処分を行う」という規定がなくなっていた。

統計によると、大学生で結婚の登記を行った者は、全体の一万分の一にすぎない。全国（香港、マカオを含む）の大学は二七〇あるが、いちばん多い地域が北京で三二校、江蘇省がその次で二八校、上海が一四校となっている。学生数は一四〇〇万人。東京都の人口を超える数である。その一万分の一といえば一四〇〇人となる。大学の数で平均すると五、六人だ。数のうえでは非常に少ないので、大きな社会問題になることもない。しかし問題は在学中の学生の同棲である。

いまの大学生は、結婚がいいのなら、なぜ同棲がいけないのかと反論する。

中国の多くのマスコミが大学生の性意識の調査をしているが、ある調査では、結婚前の性行為があつたと回答した学生が五二パーセントを占め、女子学生は六七・三パーセントにもなり、好き合つていればかまわないと答えた学生は六二パーセントを占めた。また、八五パーセントは性関係があつても結婚しなければならぬと思つておらず、九〇パーセントの女子大学院生が同棲を認めている。

異なる地域での別の調査では、八〇パーセント以上の男子学生がいちばんよい交際方法として同棲を選び、五〇パーセントの男子学生が婚前の性行為を認め、キスに賛成している女子学生は一〇〇パーセントである。

結婚の権利と同じように同棲を見るのは、幼稚で愚かしい考え方であり、権利意識の俗化である。それは中国の大学側に管理能力がないことの表われだ。そこから見ると、現在の共産党政府は、政治体制に反対しなければなんでも黙認していると言えるだろう。

武漢大学の学生カップルで三年同棲を続けている二人は、将来結婚するのかどうかという記者の質問に、女性のほうが人ごとのように「わからないわ」と答え、男性のほうはこう答えた。

「そのときはそのときさ。人生は短いんだ。先のことなんか考えたつてしょうがない。その日その日を生きていけばいいんだ。ぼくたちはいまこのときの本当の愛情を求めている

のであって、明日どうなるかなんてわからないさ。それで何が悪いの？ そんなにいろんなことを考えたら疲れるじゃない」

統計によると同棲している大学生で結婚まで至るのは五パーセントにも満たず、たいていは卒業後別の道を進んで別れていくという。たしかに結婚の登記を行う大学生が一万分の一しかないのも当然だ。

実際、こうした学生たちはみな一人っ子で、大学入学前に勉強のプレッシャーを強く受けていた。社会、学校、両親という三者からの統制がなくなると、性の解放が彼らの享楽主義を実現するいちばんよい方法となるのだ。ある専門家はこれを中国の大学生の「第二の離乳期」と言っている。

同棲は他人に影響を与えることはないが、大学生たちのあいだで多数の学生同士の同居が流行っているという話にはびっくりさせられる。重慶のある大学では、コンピュータを専攻している学生が記者のインタビューにこう答えていた。

「ぼくたちの部屋はベッドが八つあるけど、一五人で寝ているんだ。一人で寝ているのはぼくだけで、あとは一つのベッドに男女が二人で寝ている」

耐えられるのかという質問に、

「最初は気分悪くて、おかしくなりそうだった。とくに夜中に聞こえるあの声……。しんどかったな。みんなぼくが熟睡していると思っっているんだけど、実は全然眠れない。引越しようかと考えたけれど、お金がないからね。自殺でもしちゃおうかと思ったこともあった。帰ってくると、まるで魔窟同然だもんね……。でも時間がたつにつれて慣れちゃった」

「女の子たちは翌朝、君に会って気恥ずかしくないのかね」

「あの子たちってたいしたものだよ。朝、“家”のカーテンを開けると、顔を洗って歯磨きをして、楽しそうに笑ったりおしゃべりしたりして、何事もなかったようなんだ」
家というのはベッドのことである。

中国の大学生たちの結婚する権利は結局こんな落ちになっている。何をか言わんや。あと五年もしたら大学ではいったいどんなことが起きるやら。

二〇〇五年一月

中国性文化略年表

年	王朝	社会における性文化の特色	文献	人物
前2100～ 前1600	夏 殷(商)	母系制社会 宮刑(去勢による体罰)始まる		黄帝(絶倫の帝王) 妹喜(夏の美女) 妲己(殷の美女)
前1100	周	父系制社会		褒姒(周の美女)
前770	春秋 戦国	一夫一婦制の確立 齊の桓公「女閭」を設置、娼妓の始まり 耳輪の流行 「戦国策」「説苑」に男性同性愛者の記録 中国統一され儒教が国教になる 宦官が制度化される 房中術および娼薬の研究が盛んに 王侯貴族の風紀の乱れ、男色や姦通が流行	詩経(文学) 黄帝内经(医学) 礼記(儒学) 十問(医学) 合陰陽(医学) 天下至道談(医学) 養生方(医学) 雜療(医学) 列女伝(文学) 女誡(儒学)	孔子(儒家の祖) 夏姬(鄭の美女) 西施(越の美女) 蔡倫(宦官・紙の發明) 蹇碩(宦官・軍事家) 李延年(宦官・音楽家) 司馬遷(宦官・歴史家)
前221～ 前202	秦 漢			
220	三国	道教の成立、房中術による不老長寿の関心が高まる	玉台新詠(文学) 金匱要略(医学) 抱朴子(道教)	緑珠(晋の名妓)
265	魏晉南北朝	方異民族の侵入によって漢族との通婚が進む		

1 2 7 1 }	9 6 0 }	9 0 7 }	6 1 8 }	5 8 9 }	
元	宋 (北宋・南宋)	五代十国	唐	隋	
仏教信仰により禁欲が提唱される 戯曲の発展	売買春の興隆、男色の流行	内乱が続き、淫蕩の風潮が強まる 宦官の横暴が激しくなる 纏足の始まり	「唐律・戸婚」が制定され、家柄が婚姻関係の条件に ブラジャーの着用(楊貴妃が嚆矢?)	仏教の流行 退廃的風潮により男性の女装、人格の女化が流行	
馮夢龍(文学)	西廂記、迷楼記(文学) 婦人大全良方、格致余論、三元延寿参赞書(医学) 雲笈七籤(道教)	千金要方・房中補益(医学) 女論語(儒学)	隋書(史書・房中術の記述多い) 隋誌(史書・房中術の記述多い) 旧唐書(史書・房中術の記述多い) 新唐書(史書・房中術の記述多い) 天地陰陽交歡大楽賦(文学) 千金要方・房中補益(医学)	隋書(史書・房中術の記述多い) 隋誌(史書・房中術の記述多い) 旧唐書(史書・房中術の記述多い) 新唐書(史書・房中術の記述多い) 天地陰陽交歡大楽賦(文学) 千金要方・房中補益(医学)	
	蘇小小(名妓) 秦弱蘭(名妓) 李師師(名妓)		楊貴妃(玄宗皇帝の愛妃)		

1368}	明		1644}	清	1912}	中華民國
理学が発展し、家父長制度の基本理念「三綱五常」「三従四徳」が、社会全体に浸透する 道教の流行にともない、房中術が朝野に行きわたる 纏足のフェティシズム(鞋杯など) 小説や戯曲にレズビアン(俗称「磨鏡子」)が見られる 河南省開封にセックスショップができ、婦人用自慰具「広東人事」が売られる 対外交流の興隆にともない、日本の春画や東南アジアの淫具(緬鈴など)が流入	如意君伝、繡榻野史、金瓶梅、僧尼孽海、素娥篇(文学) 広嗣紀要、色欲当知所戒論、遵生八箋、撰生総要(医学) 女兒経、女四書(儒学)	唐寅(美人画家) 仇英(美人画家) 陳円円(名妓) 李香君(名妓)	養病庸言、双梅景閣叢書(医学) 女学、新婦譜(儒学) 肉蒲団、隔簾花影、珠林野史、緑野仙踪、桃花艶史、紅樓夢(文学)	満州族の婚姻風習(夫の死後、妻は息子を夫にするなど)が漢族社会に伝わるが、のちに漢族の「三綱五常」に統合される 1652年より明末の艶情小説が禁止される	封建制度の終焉と近代化の始まり 「婦女運動決議案」(1926年)で男女平等が提唱され、1930年に成立した民法で「一夫一婦制が確立される 自由恋愛のもと同棲も流行する 社会的には妾が認められ売買婚も多い	思無邪小記(文学) 白雪遺音統選(文学) 性史(文学) 張競生(学者・作家)

1949	中華人民共和	北京、上海を中心に売春産業が興隆。上海は登録された妓院が八千余軒、妓女は九千余で全国第一位	1966-68年『少女之心』(著者不明。手写による伝播)	史成礼(蘭州医学院教授。1950年より陰莖の研究を始め、1412の形状事例を測量。1986年蘭州で最初の性科学セラピーを開院し、1992年に甘肅省性学会を設立
		1949-51年北京、上海を中心とする各都市の妓院がいつせいに検挙され、解体される	1993年『魔都』(賈平凹著)	986年蘭州で最初の性科学セラピーを開院し、1992年に甘肅省性学会を設立
		1950年「婚姻法」の制定	2000年『上海寶貝』(衛慧著)	1992年に甘肅省性学会を設立
		「革命第一、恋愛第二」主義が流行、晩婚が奨励される	2002年、体操の国内メダリストで舞踊家の湯加麗がヌード写真集を出版	1992年に甘肅省性学会を設立
		1979年、一人っ子政策の実施	2004年、木子美の性愛日記『遺情書』出版後、発禁に	1992年に甘肅省性学会を設立
		1983年、初めて性転換手術がなされる		1992年に甘肅省性学会を設立
		1985年、第一回全国性教育研究大会開催		1992年に甘肅省性学会を設立
		開放経済政策の実施とともにボルノグラフィ、売買春、妾などが復活し社会問題に		1992年に甘肅省性学会を設立
		1985年、上海市教育局が市内100カ所の中学で性教育を試験的に始める決定を行う		1992年に甘肅省性学会を設立
		1986年、性科学の最初の団体、上海性教育研究会が発足		1992年に甘肅省性学会を設立
		1999年、中国古代性文化博物館設立(上海市南京路)		1992年に甘肅省性学会を設立
		2000年、江蘇省で刑法学シンポジウムが開かれ「性の賄賂」に関する法的問題を討論。罪名として成立せず		1992年に甘肅省性学会を設立
		2001年、中国人民解放军総政治部が「軍隊が「婚姻法」を徹底して実施するうえでの若干の問題に関		1992年に甘肅省性学会を設立

する規定』を発行。問題とは軍人の同棲、婚外関係の禁止、兵士の部隊内や駐屯地での異性交際の禁止、現役中の結婚の禁止など

中国社会科学学院婦女研究センター教授、陳一筠が小學校での性教育を提唱。ある調査で、広州市の20パーセントの中学生が生殖能力の発生時期を知らず、32・8パーセントの母親が娘の最初の月経前までにその処理の仕方を教えていないことがわかった

2004年、デュレックス社(コンドーム・メーカー)の世界性生活事情調査で中国人は一人平均10・5人のセックスパートナーがあり、年平均のセックスは90回で下から7番目(世界平均は103回)との結果を発表

安徽省公安厅がボルノサイト「九九色情フォーラム」検挙。10万枚のボルノ写真を掲載する大型サイトで、会員は30万人、クリック数4億回、10秒間に1万5000人がアクセスしていた

2005年、改訂版『普通高等学校学生管理規定』が発表され、大学生の婚姻を禁止する事項がなくなるある調査によると北京市の離婚率は50・9パーセントで全国第一、上海は38パーセントに達するとした

主な参考文献

●中国語●

- 『古代女性世界』洪丕謨、姜玉珍著（上海古籍出版社 一九九〇年）
- 『青楼悲歎——中国名妓列伝』聞韻著（中州古籍出版社 一九九〇年）
- 『中国男娼秘史』史楠著（中国華僑出版社 一九九四年）
- 『中国婚姻性愛史稿』戴偉著（東方出版社 一九九二年）
- 『古代中国房室養生集要』宋書功著（中国医薬科学技術出版社 一九九一年）
- 『張競生文集』張競生著（広州出版社 一九九八年）
- 『四大禁書与性文化』鐘雯著（哈爾濱出版 一九九三年）
- 『中国艶書博覧』郭長海等著（吉林文史出版社 一九九六年）
- 『中国古代性文化』劉達臨著（寧夏人民出版社 一九九三年）
- 『文化性中国 一個千年不解之結』鄭思礼著（中国对外翻譯出版公司 一九九四年）

●日本語●

- 『セックス・シンボルの誕生』秋田昌美著（青弓社 一九九一年）

『古代中国の性生活 先史から明代まで』R・H・ファン・フリーック著 松平いを子訳
(せりか書房 一九八八年)

『医心方 卷廿八 房内』馬屋原成男監、飯田吉郎訓読、石原明他解説(至文堂 一九八九年)

『纏足物語』岡本隆三著(東方書店東方選書 一九八六年)

『宦官物語 男を失った男たち』寺尾善雄著(東方書店東方選書 一九八五年)

『中国神話伝説集』松村武雄著、伊藤清司解説(社会思想社 一九七六年)

『中国神話・伝説大辞典』袁珂著、鈴木博訳(大修館書店 一九九九年)

『観相 顔にひそむ運命』櫻井大路著(ぱる出版 一九九八年)

『中国人の性事情 開放と抑圧のはざま』胡霞、島崎継雄著(サイマル出版会 一九九二年)

『酒池肉林—中国の贅沢三昧』井波律子著(講談社現代新書 一九九三年)

『恋の中国文明史』張競著(筑摩書房 一九九七年)

『世界性風俗じてん』上下 福田和彦著(河出書房新社 一九八七年)

『医者見立て 幕末の枕絵師』田野辺富蔵著(河出書房新社 一九九七年)

『世界史の中の女性たち』三浦一郎著(社会思想社 一九八五年)

『史記』「I・II 筑摩世界文学大系6・7」小竹文夫・小竹武夫訳（筑摩書房 一九七一年）

●英語●

CHINESE SEX SECRETS: A Look Behind the Screen 1984 CFW Publications Limited

図版・写真提供

第1回 24、25頁 中国古代性文化博物館蔵

第2回 37頁 『中国性史図鑑』劉達臨編著（一九九九年、時代文芸出版社）

第5回 66頁 中国古代性文化博物館蔵

第9回 103頁、104頁 中国古代性文化博物館蔵

第10回 119頁 岩永眞砂子氏蔵

第10回 126、130頁 中国古代性文化博物館蔵

第13回 166頁 中国古代性文化博物館蔵

第15回 184、185頁 中国古代性文化博物館蔵

第25回 292頁 『上海娼妓改造史話』（一九八八年、上海三聯書店）

この作品は2000年11月集英社より刊行されました。

徳間文庫をお楽しみいただけましたでしょうか。どうぞご意見・ご感想をお寄せ下さい。
宛先は、〒105-8055 東京都港区芝大門2-2-1 (株)徳間書店「文庫読者係」です。

徳 間 文 庫



ちゆうごく ご せんねん せい ぶん か し
中国五千年 性の文化史

© Kimiko Namura 2005

著者	邱 海 濤
訳者	納 村 公 子
発行者	松下 武 義
発行所	株式会社徳間書店
電話	編集部 〇三(五四〇三)四三五四 販売部 〇三(五四〇三)四三二四
振替	〇〇一四〇一〇一四四三九二
印刷	株式会社廣済堂
製本	株式会社明泉堂

2005年12月15日 初刷

（編集担当 明石直彦）

ISBN4-19-892347-7 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

